

茨城県教育財団文化財調査報告第110集

一級河川玉川改修工事地内
埋蔵文化財調査報告書

下村田遺跡

平成 8 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第110集

一級河川玉川改修工事地内
埋蔵文化財調査報告書

しもむらたのいせき
下村田遺跡

平成 8 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨 城 県 教 育 財 団

序

茨城県は、河川流域の開発や都市化の進展に対応した、洪水や土砂災害に強い県土づくりをすすめています。

玉川は、北塩子小貝野の燧石山と山方町長田の羽出庭を水源とし、大宮町、瓜連町を経て久慈川に合流する一級河川で、昭和57年からほ場整備事業や下水道事業に対応し、水害を未然に防ぐための河川改修事業が進められております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と一級河川玉川河川改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業について委託契約を結び、平成6年7月から同年9月まで下村田遺跡の調査を実施いたしました。この調査によって貴重な遺構、遺物が検出され、大宮町の歴史を解明する上に多大の成果をあげることができました。

本書は、下村田遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深めると共に、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県からいただいた多大な御協力に対し心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、大宮町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成8年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

- 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成6年7月から9月まで実施した茨城県那珂郡大宮町大字下村田338-2ほかに所在する下村田遺跡の発掘調査報告書である。
- 下村田遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇 昌 橋 本 昌 昌	昭和63年6月～平成7年3月 平成7年4月～	
副 理 事 長	小 林 秀 文 中 島 弘 光	平成6年4月～ 平成7年4月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～平成7年3月	
常 務 理 事	一 木 邦 彦	平成7年4月～	
事 務 局 長	藤 枝 宣 一 齋 藤 紀 彦	平成4年4月～平成7年3月 平成7年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重	平成5年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 業 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月 係長)
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成6年4月～
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～
	主 査	鈴 木 三 郎	平成7年4月～(平成5年4月～平成7年3月 課長代理)
	課 長 代 理	大 高 春 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月 係長)
	主 任	小 池 孝 孝	平成7年4月～
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～
調 査 課	課 長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～
	調 査 第 二 班 長	小 泉 光 正	平成6年7月～平成6年9月
	主 任 調 査 員	荒 井 保 雄	平成6年7月～平成6年9月 調査
	主 任 調 査 員	小 島 敏	平成6年7月～平成6年9月 調査
整 理 課	課 長	山 本 静 男	平成7年4月～
	主 任 調 査 員	荒 井 保 雄	平成7年10月～平成8年3月 整理・執筆・編集

- 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 本書の作成にあたり、陶磁器の年代と生産地については、出光美術館学芸員の克川正明氏、上陶器、須恵器の年代については、茨城県立太田第一高等学校教諭の浅井哲也氏に御指導をいただいた。
- 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概略

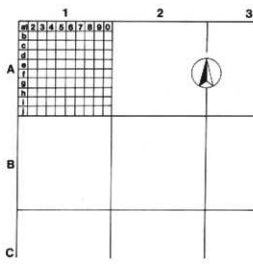
ふりがな	いっせがせんまがわかいしやうじちかいせいふんかざらうびやくしよ						
書名	一級河川玉川改修工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	下村田遺跡						
巻次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第110集						
著者名	荒井保雄						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL. 029-225-6587						
発行年月日	1996(平成8)年3月31日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
下村田遺跡	茨城県那珂郡 大宮町大字下村 田338-2 ほか	08344 -19	36度 30分 57秒	140度 26分 16秒	19940701～ 19940930	1,312㎡	一級河川玉川改 修工事に伴う事 前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
下村田遺跡	集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	住居跡 土坑 墓塚 不明遺構	25軒 33基 2基 2基	土師器 須恵器 灰釉陶器 硯、管状土錘 紡錘車 砥石 縄文土器片 弥生土器片	古墳時代～平安時代の 集落跡及び中世の墓跡 等の複合遺跡である。	

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅹ系座標を原点とし、X軸=+57,400m、Y軸=+54,000mの交点を基準点 (A1a) とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a区」、「B2b区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 不明遺構-SX

遺物 土器・陶器-P 土製品-DP 石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本土器-TP

土層 攪乱-K

- 3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺跡の全体図は縮尺200分の1、住居跡や土坑、不明遺構は60分の1に縮尺し掲載した。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にS=1/〇と表示した。
- (3) 「主軸方向」は長径方向とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E、N-10°-W）。なお、[] を付したものは推定である。
- (4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高 F-体部径とし、単位はcmである。なお、現存値は（ ）で、推定値は[] を付して示した。
- (5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測（P）番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 遺 跡	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺跡と遺物	9
1 堅穴住居跡	9
2 土 坑	69
3 竪 穴	77
4 不明遺構	78
5 遺構外出土遺物	79
第4節 ま と め	82
写真図版	

插图目次

第 1 图	调查区称呼方法概念图		第 32 图	第 13 号窟·出土遗物实测图	45
第 2 图	周边遗跡分布图	5	第 33 图	第 14 号住居跡实测图	46
第 3 图	基本土层图	6	第 34 图	第 14 号住居跡出土遺物实测图	47
第 4 图	下村田遺跡遺構配置图	7·8	第 35 图	第 15 号住居跡实测图	48
第 5 图	第 7 号住居跡実測图	10	第 36 图	第 15 号住居跡出土遺物实测图	49
第 6 图	第 7 号住居跡出土遺物实测图	11	第 37 图	第 17 号住居跡实测图	52
第 7 图	第 9·10·24 号住居跡实测图	13	第 38 图	第 17 号住居跡出土遺物实测图(1)	53
第 8 图	第 9 号住居跡出土遺物实测图	14	第 39 图	第 17 号住居跡出土遺物实测图(2)	54
第 9 图	第 10 号住居跡出土遺物实测图	16	第 40 图	第 18 号住居跡实测图	56
第 10 图	第 21·26 号住居跡实测图	18	第 41 图	第 18 号住居跡出土遺物实测图	56
第 11 图	第 21 号住居跡出土遺物实测图	19	第 42 图	第 19 号住居跡实测图	57
第 12 图	第 23 号住居跡实测图	21	第 43 图	第 19 号住居跡出土遺物实测图	58
第 13 图	第 23 号住居跡出土遺物实测图	22	第 44 图	第 20·25 号住居跡实测图	59
第 14 图	第 24 号住居跡出土遺物实测图	23	第 45 图	第 20 号住居跡出土遺物实测图	60
第 15 图	第 26 号住居跡出土遺物实测图	25	第 46 图	第 22 号住居跡实测图	61
第 16 图	第 1 号住居跡实测图	26	第 47 图	第 22 号住居跡出土遺物实测图	62
第 17 图	第 1 号住居跡出土遺物实测图	26	第 48 图	第 25 号住居跡出土遺物实测图	63
第 18 图	第 2 号住居跡实测图	28	第 49 图	第 27 号住居跡实测图	66
第 19 图	第 2 号住居跡出土遺物实测图	29	第 50 图	第 27 号住居跡出土遺物实测图	67
第 20 图	第 3 号住居跡实测图	31	第 51 图	土坑实测图(1)	73
第 21 图	第 3 号住居跡出土遺物实测图	31	第 52 图	土坑实测图(2)	74
第 22 图	第 4 号住居跡实测图	33	第 53 图	土坑出土遺物实测图	75
第 23 图	第 4 号住居跡出土遺物实测图(1)	34	第 54 图	第 1 号墓塚实测图	78
第 24 图	第 4 号住居跡出土遺物实测图(2)	35	第 55 图	第 2 号墓塚出土遺物实测图	78
第 25 图	第 5 号住居跡实测图	37	第 56 图	第 2 号不明遺構·出土遺物实测图	79
第 26 图	第 5 号住居跡出土遺物实测图	38	第 57 图	遺構外出土遺物实测·拓影图	80
第 27 图	第 8 号住居跡实测图	40	第 58 图	下村田 I ~ V 期住居跡分布图	84
第 28 图	第 8 号住居跡出土遺物实测图	41	第 59 图	下村田 VI ~ VII 期住居跡分布图	85
第 29 图	第 11 号住居跡实测图	42	第 60 图	下村田 I ~ V 期土器群	86·87
第 30 图	第 11 号住居跡出土遺物实测图	43	第 61 图	下村田 VI ~ VII 期土器群	88·89
第 31 图	第 12 号住居跡实测图	44			

表目次

表 1	下村田遺跡周辺遺跡一覧表	4
表 2	下村田遺跡住居跡一覧表	68

表 3	下村田遺跡土坑一覧表	76·77
-----	------------	-------

写真図版目次

- P L 1 遺跡全景，遺跡全景（南東側）
- P L 2 試掘前風景，遺構確認状況，遺跡全景
- P L 3 第7・8号住居跡，第7・8号住居跡遺物出土状況，第7号住居跡遺物出土状況
- P L 4 第7号住居跡貯藏穴遺物出土状況，第10・24号住居跡遺物出土状況，第21・25・26号住居跡
- P L 5 第21号住居跡遺物出土状況、第21号住居跡竈遺物出土状況，第21号住居跡竈
- P L 6 第23号住居跡遺物出土状況，第24号住居跡，第24号住居跡遺物出土状況
- P L 7 第24号住居跡竈，第25号住居跡遺物出土状況，第26号住居跡遺物出土状況
- P L 8 第2号住居跡，第2号住居跡遺物出土状況，第2号住居跡竈
- P L 9 第3号住居跡遺物出土状況，第4号住居跡，第4号住居跡遺物出土状況
- P L 10 第4号住居跡遺物出土状況灰釉陶器，第5号住居跡，第5号住居跡遺物出土状況
- P L 11 第11号住居跡，第12～15・17号住居跡，第12～15・17・18号住居跡遺物出土状況
- P L 12 第13・14号住居跡，第14号住居跡竈遺物出土状況，第15号住居跡
- P L 13 第15号住居跡遺物出土状況，第15・17～19号住居跡，第15・17号住居跡遺物出土状況
- P L 14 第17号住居跡遺物出土状況，第17号住居跡遺物出土状況，第18号住居跡
- P L 15 第18号住居跡遺物出土状況，第19号住居跡，第19号住居跡遺物出土状況
- P L 16 第27号住居跡，第27号住居跡遺物出土状況，第27号住居跡竈
- P L 17 第2号土坑，第4号土坑，第5号土坑，第6号土坑，第9・27・28号土坑，第9号土坑遺物出土状況，第10号土坑，第11・21号土坑
- P L 18 第14号土坑，第18号土坑，第32号土坑，第37号土坑，第1号墓壙遺物出土状況，第2号墓壙壙口壺出土状況，第2号不明遺構，五輪塔
- P L 19 第7号住居跡出土遺物
- P L 20 第9・10・21号住居跡出土遺物
- P L 21 第21・23・24号住居跡出土遺物
- P L 22 第1・2・24・26号住居跡出土遺物
- P L 23 第2～5号住居跡出土遺物
- P L 24 第8・11・13～15号住居跡出土遺物
- P L 25 第15・17号住居跡出土遺物
- P L 26 第18～20・22・25号住居跡出土遺物
- P L 27 第25・27号住居跡出土遺物
- P L 28 第2・7・9・10・12・26号土坑，遺構外出土遺物
- P L 29 各遺構出土遺物（土製品・石製品・石製模造品）
- P L 30 出土土器・第2号墓壙出土土人骨



作業風景

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

一級河川玉川は、狭小で蛇行しているため、大雨が降ると氾濫が絶えなかった。そのため、茨城県は、御前山村の国道293号線が通る玉川上流付近から下流の国道118号線の玉川橋までの狭小、蛇行部分の河川改修を行い、玉川の氾濫を防ぐための工事計画を進めている。

工事に先立ち、平成5年10月15日に茨城県（大宮土木事務所）は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。茨城県教育委員会は、平成5年10月22日に現地踏査を実施し、工事予定地内における遺跡の存在を確認した。平成5年12月22日に現地踏査の結果に基づき、茨城県（大宮土木事務所）あてに、開発予定区域内における埋蔵文化財の範囲とその取り扱いについて回答した。平成6年1月10日に茨城県教育委員会と茨城県（土木部）は、一級河川玉川改修工事予定地内（大宮町下村田地内）の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、平成6年1月28日に茨城県教育委員会は茨城県（土木部）あてに、下村田遺跡（1,312㎡）を現状保存することが困難であると判断し、記録保存とする旨回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団が紹介された。

茨城県教育財団は、茨城県（土木部）と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成6年7月1日から下村田遺跡の調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

下村田遺跡の発掘調査を平成6年7月1日から9月30日までの3か月にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を記述する。

7月前半 発掘調査を開始するため、現場事務所や倉庫の設置、調査器材の搬入等の諸準備を行った。12日から作業員を投入して、諸施設の整備、遺跡内の清掃作業を開始した。

7月後半 15日からトレンチを設定、試掘調査を開始し、27日に終了した。試掘調査により竪穴住居跡、土坑等の遺構を確認し、土師器片、須恵器片、弥生土器片及びメノウの原石等の遺物が出土した。28日から重機による表土除去を実施した。

8月前半 重機による表土除去を2日に終了した。表土除去と同時に遺構確認作業を行い、竪穴住居跡2軒、土坑39基を確認した。8日から遺構調査を開始した。

8月後半
① 継続して竪穴住居跡、土坑の遺構調査を行った。

9月前半

9月後半 16日には遺構調査を終了し、17日に現地説明会を開催し、遺構、遺物を公開した。19日に補足調査を開始し、20日に終了した。22日に遺跡全景を撮影し、26日に空撮を実施した。30日までに事務所の撤収を完了し、現地調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

下村田遺跡は、茨城県那珂郡大宮町大字下村田338-2ほかに所在している。

大宮町は、茨城県の中央部やや北に位置し、北は山方町、美和村に、東は久慈郡金砂郷町に、南は那珂郡瓜連町、那珂町に、西は緒川村、東茨城郡御前山村、桂村に接している。

地形的にみると、八溝山に源を発して南流する久慈川と栃木県那須連山に源を発して流れる那珂川の二つの大きな川に挟まれた丘陵と台地上に位置している。全体的に地形は北部地域が高く南端部が低く、台地の中央部には北塩子小貝野の麓石山と山方町長田の羽出麓を水源とする玉川が流れており、その台地を二分して、下岩瀬で久慈川に合流する。また、これらの丘陵や台地は久慈川、那珂川、玉川、緒川によって作りあげられた段丘構造を示している。上位段丘は標高70~120m前後で、緒川村、美和村境界付近の町北部であり、中段段丘は標高30~70m前後の久慈川西岸、那珂川東岸と町中心地の台地であり、下位段丘は標高15~30m前後の那珂川、久慈川、玉川、緒川流域の沖積低地である。

地質は大宮町の基底層の大部分は第三紀層であるが、緒川村や美和村と境を接する付近には鶯子・鶏足古期岩層と呼ばれている古期岩類が発生している。表層は大部分が関東ローム層で覆われている。しかし、河川流域の沖積低地には関東ローム層はみられず、下位段丘堆積物である砂礫層が分布している。

下村田遺跡は大宮町の南東部にあり、久慈川に注ぐ玉川の左岸の標高22~23mの舌状に張りだした台地上に位置し、当遺跡の南西側は玉川によって削られている。沖積低地は水田として利用されている。調査前の現況は畑地である。

参考文献

- ・阿久津純「茨城県常陸大宮付近の地形地質」『宇都宮大学学芸学部研究論文集 第2号』1953年
- ・大宮町教育委員会・常陸遺跡発掘調査会「常陸常陸遺跡 第1次調査」1983年
- ・大宮町諏訪台遺跡調査会「諏訪台遺跡」1991年
- ・大宮町教育委員会「大宮町の考古遺物 那珂・久慈清流にはぐくまれた大宮町の先史・古代」1995年

第2節 歴史的環境

大宮町には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。当町は、久慈川、那珂川をはじめとした水利に恵まれており、久慈川と那珂川に挟まれた台地は、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきた。ここでは、下村田遺跡周辺の主な遺跡について時代を追って述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、腕巾遺跡で槍先形尖頭器、小野天神前遺跡で細石刃核が出土している。

縄文時代の遺跡は、約40か所の遺跡があるが、時間的には早、前、晩期は少なく、中、後期の比較的規模の大きな遺跡が目立ち、久慈川と那珂川沿岸の台地上に分布するものが多い。久慈川右岸には坪井上遺跡、宮中遺跡があり、那珂川左岸には小野天神前遺跡、高ノ倉遺跡等の代表的な遺跡がある。そのほかに梶巾遺跡、諏訪台遺跡、坪井上遺跡〈11〉、三矢遺跡、下坪遺跡、上宿遺跡〈1〉、大家遺跡〈3〉、小中遺跡〈8〉、北村

田遺跡〈9〉、瓜連町の^{ハニカ}上宿遺跡〈20〉等がある。昭和51年に調査が行われた小野天神前遺跡からは沈線文土器、小型の首飾、玉類、亀形土製品、ハート形土偶、山形土偶、遮光器土偶など早、中から晩期にかけての遺物が出土している。梶巾遺跡からは中期の袋状土坑16基が、諏訪台遺跡からは中期の堅穴住居跡1軒、袋状土坑13基が検出されている。坪井上遺跡では中期の堅穴住居跡8軒、土坑43基のうち袋状土坑19基が検出され、翡翠の大珠が5点、フクロウをモチーフした縄文土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、久慈川沿いに小祝^{コノノ}後田B遺跡、梶巾遺跡、富士山古墳群〈15〉、糠塚遺跡、鷹巣犬道遺跡、坪井上遺跡等があり、那珂川沿いには三美遺跡、小野天神前遺跡、高ノ倉遺跡等がある。弥生時代中期の小野天神前遺跡以外は、ほとんど弥生時代後期後葉の遺跡である。そのうち調査が行われた遺跡は、小野天神前遺跡、梶巾遺跡、富士山古墳群、坪井上遺跡の4遺跡である。小野天神前遺跡では再葬墓跡が検出され、人面付型土器が3点出土している。また、富士山古墳群では堅穴住居跡9軒、坪井上遺跡では堅穴住居跡2軒が検出されている。

古墳時代の遺跡は、前期の古墳として前方後方墳の富士山4号墳があり、大宮町最古の古墳と考えられている。この富士山4号墳は富士山古墳群に属し、久慈川と玉川の合流点に向かって突出する中位段丘から下位段丘上にかけて築造されている。中期の古墳としては同古墳群の五所^{ゴショ}早神社裏古墳、糠塚古墳等の大型古墳が築造されている。五所早神社裏古墳は全長60mの前方後円墳、糠塚古墳は小祝台地上に全長90mの前方後円墳である。後期の古墳としては一騎山古墳群、岩崎古墳群、鷹巣古墳群、小祝古墳群及び富士山古墳群等が形成される。一騎山古墳群は10基の古墳からなり、そのうち4基の古墳が昭和48年に調査された。1～3号古墳は7世紀頃の横穴式石室をもつ墳径13～20mの小規模円墳である。4号墳は6世紀後半の小規模な前方後円墳で、人物、動物等の形象埴輪や円筒埴輪が出土している。岩崎古墳群は前方後円墳2基、円墳2基からなる。そのほか土川左岸の八田、若林地区東端の台地の崖面には、8～9世紀の^{イノシロ}雷神山横穴墓群、^{イノシロ}岩穴横穴墓群がある。古墳時代の集落遺跡は、久慈川右岸台地上に梶巾遺跡があり、前、中期の住居跡4軒が検出されている。そのほか^{イノシロ}宿遺跡、^{イノシロ}馬場先遺跡、^{イノシロ}東平遺跡、^{イノシロ}西坪井遺跡〈12〉、^{イノシロ}根本遺跡〈6〉、^{イノシロ}後三ヶ尻A B遺跡〈10〉、^{イノシロ}富士山遺跡〈17〉及び下村田遺跡などがある。

奈良・平安時代の遺跡は、鷹巣遺跡、上村田小中遺跡〈8〉、小野中道遺跡、源氏平遺跡、一騎山古墳群、春日神社前遺跡〈5〉、北村田遺跡〈9〉、前三ヶ尻遺跡〈14〉、後三ヶ尻A B遺跡、西坪井遺跡、堂山遺跡〈18〉等がある。そのうち、鷹巣遺跡では8～10世紀の堅穴住居跡32軒、掘立柱建物跡2棟が検出され、堅穴住居のかまどから再利用された瓦が出土し、台地斜面に約10基の瓦窯が存在したと予想されている。また、「西口」、「高倉」等と墨書された土器が出土している。上村田小中遺跡では9～10世紀の堅穴住居跡17軒検出され、「千万」、「綱」、「丈」及び「曹」等の墨書土器や「丈」字の烙印から丈部氏の関連集落と考えられている。小野中道遺跡では「□□里丈部里」という宛書をもつ平瓦が出土している。また、「丈永私印」の字句を彫刻した銅印が小野中道地区出土と伝えられる。源氏平遺跡では19軒の堅穴住居跡、掘立柱建物跡1棟が検出され、「□□鳥取文功」、「□□鳥部鳴」の文字が刻まれた瓦や「土道倉」と墨書された土師器坏、内側には漆紙文書「解」が付着したものが出土している。

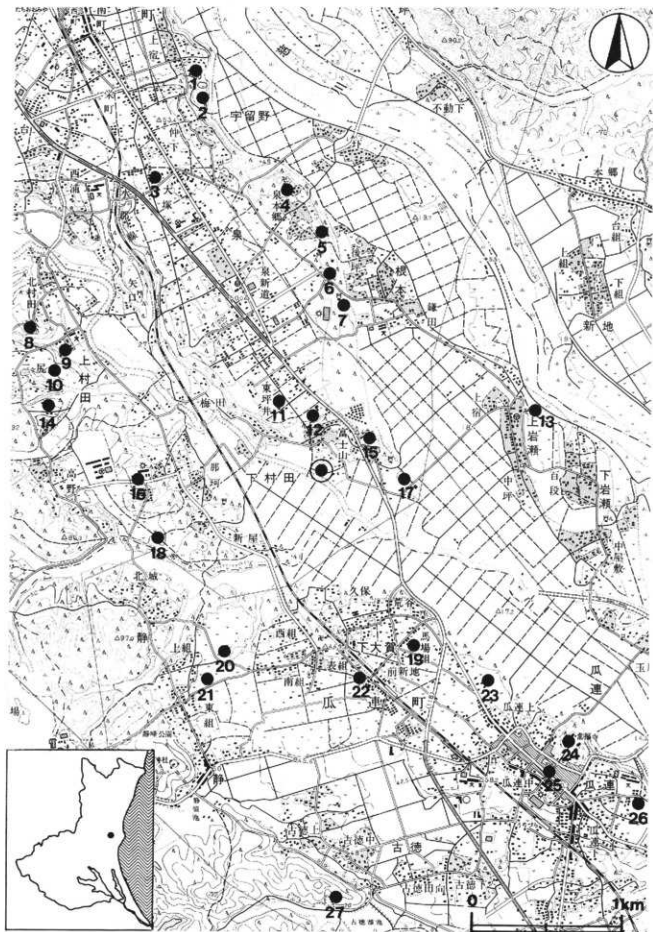
中世の遺跡は、^{ウツノ}宇留野城跡〈2〉、^{ウツノ}小原館跡〈4〉、^{ウツノ}岩瀬城跡〈13〉等の城跡跡や三美の備蓄銭出土があげられる。三美の備蓄銭は合計3,929枚出土し、すべて中国銭（渡来銭）である。そのほか、下村田遺跡は16世紀の山水画家雪村周継が^{ウツノ}字五林堂で出家したという由来の地であり、平成4年に「雪村顕彰事業」に伴う五林堂地区調査が行われ、五輪塔が調査された。

参考文献

- (1) 大宮町教育委員会「常陸一騎山」1974年
- (2) 茨城県歴史館「茨城県大宮町小野天神前遺跡(資料編)」『学術調査報告書1』1978年
- (3) 大宮町教育委員会「富士山遺跡発掘調査報告書Ⅰ」1979年
- (4) 大宮町教育委員会・梶巾遺跡発掘調査会「茨城県梶巾遺跡 大賀小学校校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1985年
- (5) 大宮町教育委員会・鷹巣遺跡発掘調査会「常陸鷹巣遺跡 第1次調査」1983年
- (6) 大宮町教育委員会・鷹巣遺跡発掘調査会「常陸鷹巣遺跡 第2次発掘調査報告」1987年
- (7) 大宮町教育委員会・水戸北部中核工業団地内埋蔵文化財発掘調査会「常陸源氏平」1985年
- (8) 大宮町教育委員会「上村田小中遺跡」1988年
- (9) 大宮町諏訪台遺跡調査会「諏訪台遺跡」1991年
- (10) 茨城県 「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」1979年
- (11) 茨城県 「茨城県史料 考古資料編 弥生時代」1991年
- (12) 茨城県 「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」1991年
- (13) 茨城県 「茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代」1995年
- (14) 大宮町教育委員会「雪村顕彰事業 五林堂地区調査」1993年
- (15) 大宮町教育委員会「大宮町の考古遺物 那珂・久慈清流にはぐくまれた大宮町の先史・古代」1995年

表1 下村田遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世以降	番号	遺跡名	県遺跡番号	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世以降
1	上宿遺跡	3739		○					15	富士山古墳群	615			○	○		
2	字留野城跡	630						○	16	一騎山古墳群	616				○	○	
3	大塚遺跡	3735		○					17	富士山遺跡	619				○		
4	前小屋遺跡	629						○	18	堂山遺跡	3716					○	
5	春日神社前遺跡	3715					○		19	二ツ堂遺跡	579			○			
6	根本遺跡	626				○			20	上宿遺跡	577		○				
7	根本古墳群	617				○			21	上宿古墳群	582				○		
8	小中遺跡	3699		○					22	静駅付近遺跡	578		○				
9	北村田遺跡	603		○			○		23	十林寺古墳群	583				○		
10	後三ヶ尻A B遺跡	3718				○	○		24	瓜連城跡	586						○
11	坪井上遺跡	591		○	○				25	瓜連遺跡	581				○		
12	西坪井遺跡	627				○	○		26	大塚古墳	584				○		
13	岩瀬城跡	4775					○		27	古徳城跡	4771						○
14	前三ヶ尻遺跡	3717					○	◎		下村田遺跡(当遺跡)	605				○	○	○



第2図 周辺遺跡分布図

第3章 遺 跡

第1節 遺跡の概要

下村田遺跡は、大宮町の南部、玉川左岸の標高21~22mの台地上に位置している。調査区は、最長東西約61m、南北約43m、面積1,312㎡である。現況は畑地である。調査区の北側直下には、玉川が流れ、その流れによって下村田遺跡の一部は削り取られている。

今回の調査によって、調査区から住居跡25軒、土坑33基、墓壇2基、不明遺構2基を確認した。そのほか、五輪塔が2基確認されているが、この五輪塔については、平成4年度に「雪村顕彰事業」に伴う五林堂地区調査によって報告されているので、ここでは取り上げないこととする。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に24箱出土している。遺物の大部分は古墳時代から平安時代にかけての土師器、須恵器である。中世の墓壇に関する遺物は常滑産の竈口壺以外ほとんど出土していない。その他、縄文土器片、弥生土器片、管状土錘、紡錘車、円面硯片、砥石、鉄滓及び瑪瑙の原石が出土している。

第2節 基本層序

調査区内にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った（第3図）。

第1層は、25cm前後の厚さの耕作土層で、黒褐色をしている。

第2層は、14~25cmの厚さで、褐色をしたソフトローム層である。

第3層は、42~50cmの厚さで、褐色をしたハードローム層である。

第4層は、8~24cmの厚さで、鹿沼バミス中量とスコリア粒子少量を含む明褐色をしたハードローム層である。

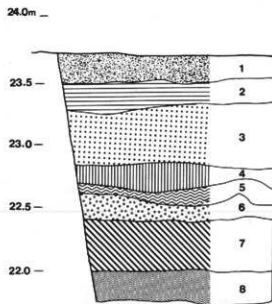
第5層は、6~15cmの厚さで、明褐色をした鹿沼バミス層である。

第6層は、10~21cmの厚さで、浅黄橙色をした鹿沼バミス層である。

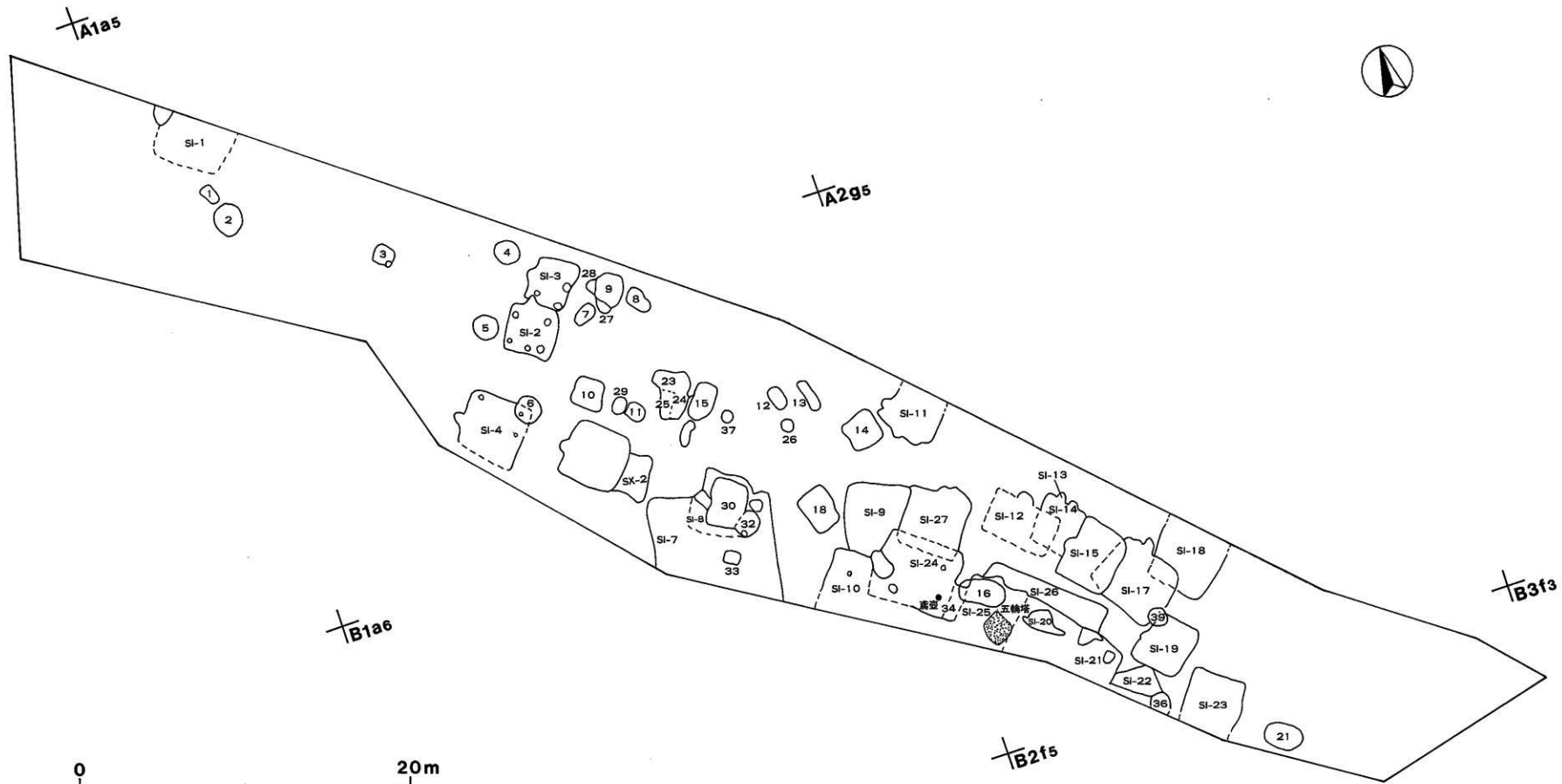
第7層は、35~44cmの厚さで、スコリア粒子を中量含むにぶい褐色をした粘土層である。

第8層は、25~28cmの厚さで、スコリア粒子多量と小石を中量含む橙色をした粘土層である。

住居跡などの遺構は、第2層上面で確認した。



第3図 基本土層図



第4図 下村田遺跡遺構配置図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当遺跡の遺構確認の段階で、竪穴住居跡27軒（SI-1～27）を確認したが、調査の結果、第6、16号住居跡（SI-6、16）は近世の攪乱穴で住居跡として捉えられなかったため欠番とした。25軒の竪穴住居跡のうち、重複が激しく、しかも玉川の流れによって遺構の一部が削り取られているものもあり、確認困難なため、そのような住居跡の規模や平面形は残存する壁や床から推定した。時期は古墳時代から平安時代にかけてのもので、以下、調査した住居跡の形態や出土遺物等について記述する。

(1) 古墳時代の住居跡

第7号住居跡（第5図）

位置 調査区中央部、B2a区。

重複関係 本跡は第8号住居跡、第30号土坑、第32号土坑及び第33号土坑によって掘り込まれていることから、これらの遺構よりも本跡の方が古い。

規模と平面形 重複している遺構によって掘り込まれており、規模や平面形は明確でないが、残存している壁や床面から、一辺が7.35m程の方形と推定される。

主軸方向 N-21°-E

壁 南壁は玉川の流れによって削られているが、残存壁高は5～15cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、踏み固められた面はみられない。

ピット 4か所（P₁～P₄）。P₁とP₂は径26～28cmの円形、深さ35～50cmで、主柱穴である。P₃とP₄は性格不明である。

貯蔵穴 北東コーナーに付設されており、径90cmの円形、深さ68cmで、断面形はU字状である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量 2 暗褐色 ローム粒少量

覆土 4層からなる自然堆積である。

土層解説

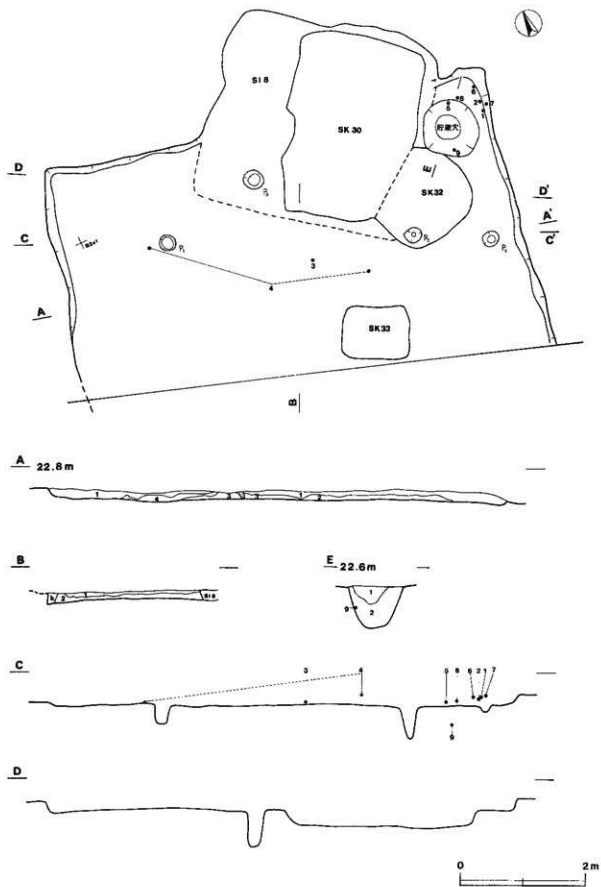
- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒・炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
4 暗褐色 粘土粒子少量、ローム粒子少量、焼土粒・炭化粒子微量

遺物 出土遺物は、土師器片196点、土製品1点及び混入した弥生土器片4点である。覆土中から第6図10の管状土鍋、貯蔵穴付近の床面から1の土師器坏と8の甕が正位の状態、2の坏と7の高坏が逆位の状態、5の埴と6の高坏が斜位の状態、中央部床面から3の坏が正位の状態で、P₁付近から4の坏が逆位の状態それぞれ出土している。また、貯蔵穴内から9の甕が横位の状態で出土している。

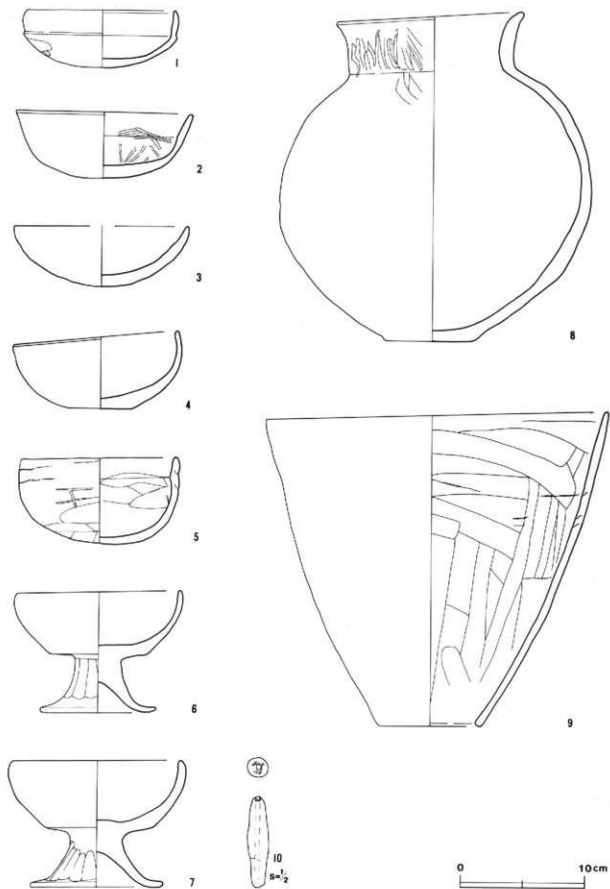
所見 本跡の竪は貯蔵穴の位置から推定すると北壁に構築されていたと思われるが、本跡の北側は第8号住居跡、第30号土坑及び第32号土坑に掘り込まれているために、壊されたものと考えられる。本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から6世紀初頃と思われる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	坏 土師器	A 11.9 B 4.6	丸底、体部は内傾して立ち上がり、口縁部との境に線を持つ。口縁部は直立するが、わずかに内傾する。	1:縦割内・外面ナデ。体部及び口縁部外へラ削り後ナデ。体部内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	P.35 100% 床面 内面腐付着



第5图 第7号住居跡实测图



第6图 第7号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図2	坏土師器	A 13.9	丸底。体部は内押しして立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部内面に強い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面へラ削り後ナデ。体部内面へラ磨き。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P36 床直
		B 5.3				
3	坏土師器	A [13.8]	丸底。体部から口縁部にかけて内押しして立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部及び底部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	P37 床直 二次焼成
		B 4.8				
4	坏土師器	A 13.2	唇部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部にかけて内押しして立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部及び底部内・外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・パミス 褐色 普通	P39 床直
		B 6.3				
		C 5.2				
5	坏土師器	A 12.5	丸底。体部は内押しして立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。口縁部内面に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面へラ削り後ナデ。体部内面へラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P38 床直
		B 6.9				
6	高坏土師器	A 12.9	口縁部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち、内押しして立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内面ナデ。外面へラ削り後丁家ナデ。脚部外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P40 床直
		B 9.8				
		D 9.0				
		E 4.2				
7	高坏土師器	A 12.5	口縁部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち、内押しして立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内面ナデ。外面へラ削り後丁家ナデ。脚部外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P41 床直
		B 10.1				
		D 10.5				
		E 4.0				
8	突土師器	A 14.8	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は卵形状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内面横ナデ。外面へラ削り後ナデ。体部内面へラナデ。外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P42 床直
		B 26.3				
		C 7.1				
9	瓶土師器	A 27.8	平口式。体部はわずかに内押しして立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラナデ。外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P43 野蓋穴内
		B 25.1				
		C 8.2				

図版番号	器種	計 測 値					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第6図10	管状土師器	4.9	1.1		0.3	4.5	瀬上中	DP1 100%

第9号住居跡(第7図)

位置 調査区中央部、B2a区。

重複関係 本跡は第10号住居跡、第24号住居跡、第27号住居跡によって掘り込まれていることから、これらの遺構よりも本跡の方が古い。

規模と平面形 重複している遺構によって掘り込まれており、規模や平面形は明確ではないが、残存している壁や床面は、長軸(4.25)m、短軸(3.00)mで、平面形は方形と推定される。

主軸方向 N-21°-E

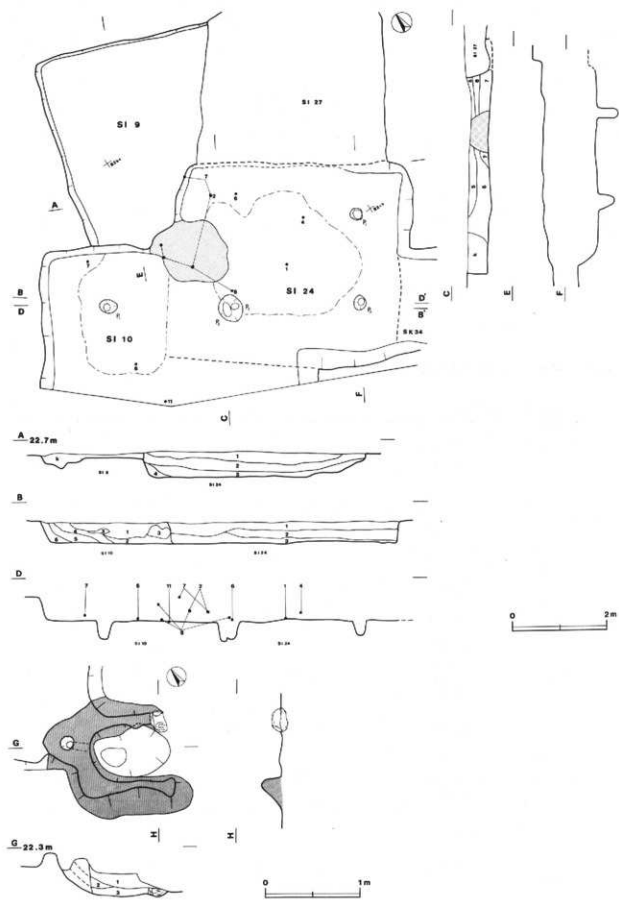
壁 3軒の住居跡との重複により、北壁と西壁の一部のみ残存する。残存壁高は20cmで、外傾して立ち上がる。

床 耕作によるトレンチャーが南北に走っており、床面のほとんどが攪乱を受けている。床残存部で踏み固められた面が部分的にみられる。

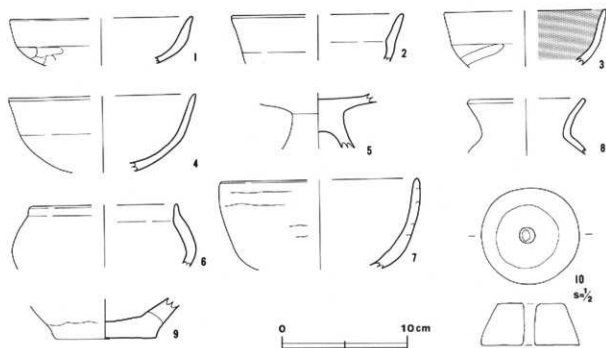
覆土 掘り込みが浅く、覆土はほとんど攪乱を受けている。

遺物 出土遺物は、土師器片517点、須恵器片10点、土製品1点及び混入した弥生土器片2点である。床面からの出土は細片だけである。覆土中から第8図1、2、3、4の土師器片、6、7の埴、5の高坏、8の壺、9の甕、10の土製紡錘車がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、3軒の住居跡に掘り込まれて、さらに耕作によるトレンチャーによって攪乱を受けているため、炉や柱穴は確認できなかった。本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第7图 第9·10·24号住居跡实测图



第8図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第8図 1	坏土器	A [14.5] B (3.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P48 覆土中 5%
2	坏土器	A [13.6] B (4.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部内面に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P49 覆土中 15%
3	坏土器	A [13.0] B (4.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 褐色 普通	P51 覆土中 2次焼成 5%
4	坏土器	A [14.9] B (6.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。内・外面に一部赤彩残存。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にふい褐色 普通	P56 覆土中 15%
5	高坏土器	B (4.3) E (2.9)	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は大きく外傾する。	脚部内・外面ナデ。坏部下位内・外面ナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P54 覆土中 5%
6	埴土器	A [11.7] B (5.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部に直立する。口縁部内面に強い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P50 覆土中 10%
7	埴土器	A [15.6] B (7.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。輪轆痕。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P52 覆土中 2次焼成 10%
8	壺土器	A [9.1] B (4.6)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア にふい褐色 普通	P53 覆土中 5%
9	甕土器	B (3.3) C 8.0	底部片。平底。	底部内面へうナデ。外面へう削り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にふい褐色 普通	P55 覆土中 5%

図版番号	種 別	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)		
第84図10	紡 絲 車	5.1	—	2.2	0.9	61.6 覆 上 中	D P9 100%

第10号住居跡 (第7図)

位置 調査区南部中央, B2b区。

重複関係 本跡は第9号住居跡を掘り込み, 第24号住居跡によって掘り込まれていることから, 第9号住居跡より新しく, 第27号住居跡より古い。

規模と平面形 東側は第24号住居跡により掘り込まれ, 南側は玉川の流れによって削られており, 規模や平面形は明確ではないが, 残存している壁や床から, 一辺が5.40m程の方形と推定される。

主軸方向 N-39°-E

壁 北西壁, 北東壁及び南東壁の一部が残存している。残存壁高は50cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, P₁付近に踏み固められた面がみられる。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁は長径40cm, 短径26cmの楕円形, 深さ40cm, P₂は長径55cm, 短径 [35]cmの楕円形, 深さ42cmで, どちらも主柱穴である。なお, P₂は第24号住居跡のP₂と上端が重複している。

覆土 6層からなる自然堆積である。

土層解説

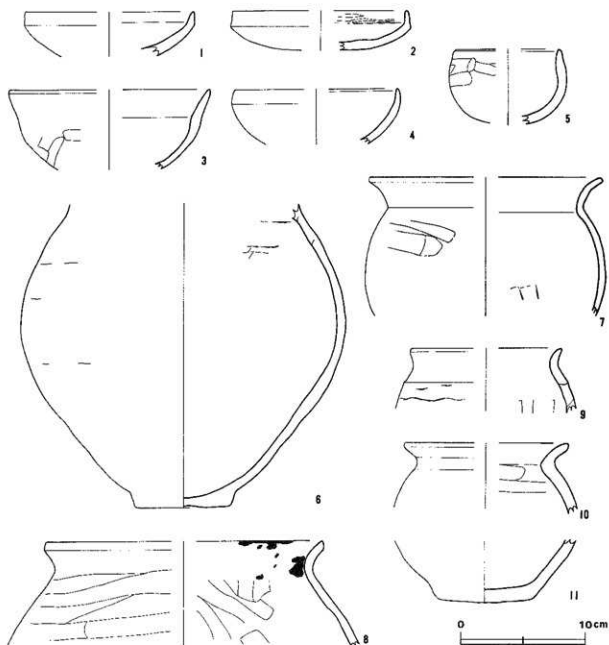
- 1 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子・炭屑・ハミス微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 褐色粘土ブロック多量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・褐色粘土ブロック微量
- 6 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量

遺物 出土遺物は, 土師器片446点, 須恵器片18点及び混入した弥生土器片5点である。覆土中から第9図1~4の土師器片, 5の埴, 8~10の埴, 北東壁際の覆土下層から7の土師器片, 中央部の床面直上から6, 11の埴がそれぞれ出土している。

所見 本跡の底は, 第24号住居跡を構築する際に壊されたものと考えられる。本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から6世紀後半と思われる。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第9図 1	土 師 器	A [13.4]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり, 口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P57 覆土中 2次焼成
		B (3.6)				
2	土 師 器	A [13.9]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり, 口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ後, 内面へラ削ぎ。体部内面ナデ, 外面へラ削り後ナデ。	長石・スコリア 褐色 普通	P58 覆土中
		B 3.2				
3	土 師 器	A [13.0]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり, 口縁部は内傾する。口縁部内面に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ, 外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・スコリア 褐色 普通	P59 覆土中
		B (6.4)				
4	土 師 器	A [13.0]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり, 口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラナデ, 外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P60 覆土中
		B (4.5)				
5	土 師 器	A [8.4]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり, 口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ, 外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P61 覆土中
		B (6.0)				



第9図 第10号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 6	甕 土師器	B (24.1) C 7.5	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 灰白色 普通	P62 床直 60%
7	甕 土師器	A [18.4] B (11.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。外面斜位方向のヘラナデナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 褐色 普通	P63 覆土F層 20%
8	甕 土師器	A [22.0] B (8.5)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P64 覆土中 内面膠付着 10%
9	甕 土師器	A [12.0] B (5.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ、外面ナデ。輪轆取。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P66 覆土中 2次焼成 5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図	甕 十 脚 器	A [13.0] B (5.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英にふいかけ色普通	P66 覆土中 2次焼成
11	壺 十 脚 器	B (5.0) C 7.6	底部から体部下段片。平底。体部は内傾して立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。底部外面ナデ。	砂粒・長石・石英にふいかけ色普通	P67 床直 2次焼成

第21号住居跡（第10図）

位置 調査区南東部，B2d区。

重複関係 本跡は第26号住居跡を掘り込み，第20，25号住居跡によって，掘り込まれている。

規模と平面形 北西側は第25号住居跡に掘り込まれ，南西側は玉川の流れによって削られており，規模や平面形は明確ではないが，残存している壁や床から，一辺が6.80mの方形と推定される。

主軸方向 N-45°-E

壁 3軒の住居跡との重複により，東コーナー付近に部分的に壁が残存している。残存壁高30cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦で竈付近から貯蔵穴にかけて踏み固められた面がみられる。

貯蔵穴 東コーナーに付設しており，長軸124cm，短軸83cmの長方形，深さ42cmで，断面形は「U」状である。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 褐色粘土ブロック多量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 褐色 褐色粘土ブロック多量

竈 北東壁中央付近に砂粒まじりの白色粘土で構築され，天井部は崩落している。両袖部は砂粒を混ぜた白色粘土で構築されている。規模は煙道部から焚き口部まで84cm，両袖最大幅100cm，壁外への掘り込みは5cmである。袖の内壁は，火熱を受けて赤変硬化している。火床面は床面を3cm掘り溜めており，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は外傾して立ち上がり，赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黄褐色 焼土小ブロック少量
- 2 褐色 焼土粒子少量
- 3 暗褐色 赤土小ブロック・炭化粒子多量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量

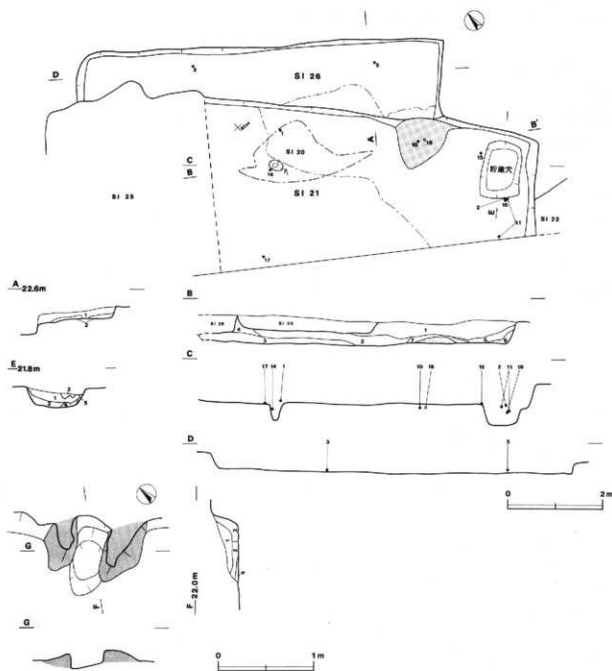
覆土 7層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量，炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量
- 7 黒褐色 白色粘土粒子多量，ローム粒子微量，炭化物微量

遺物 出土遺物は，土師器片401点，須恵器片1点及び混入した弥生土器片5点である。覆土中から第11図4，6，7，8の上師器片，12の高杯，北東壁西よりの覆土下層から1の杯が正位の状態，中央西寄りの床面から17の手捏杯が正位の状態，P付近の床面から14の壺が正位の状態，貯蔵穴付近の床面から2の杯が正位の状態，15の甕が横位の状態，11の高杯，16の甕，竈内覆土中から3，5の杯及び18の土製支脚，火床面から10の台付杯が逆位の状態それぞれ出土している。

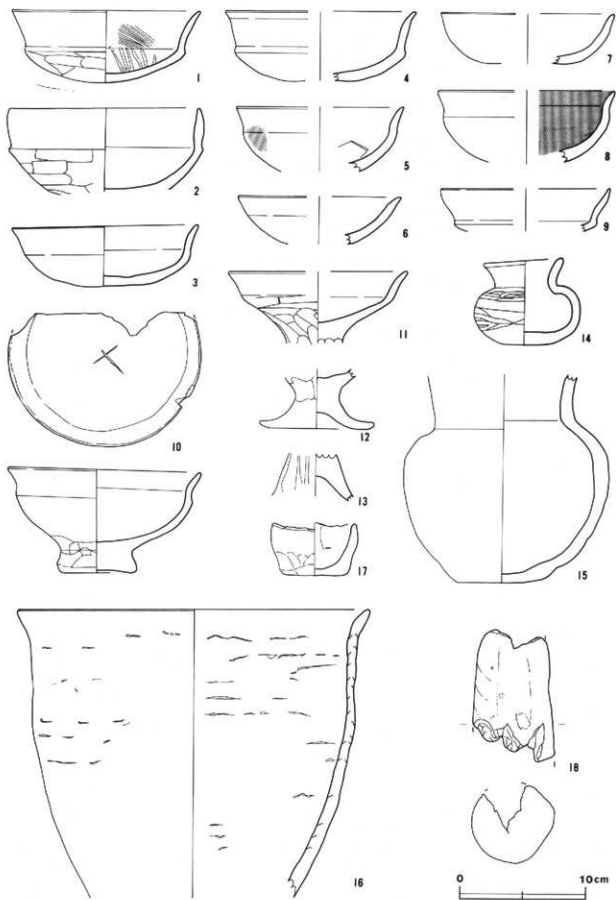
所見 本跡の窟から逆位の状態で出土した白付坏は支脚に転用されたものと思われる。また、第21号住居跡から出土した遺物のほとんどが二次焼成を受けていることや床面が一部熱を受けて赤化していることから、本跡は焼失家屋と思われる。時期は、遺構の形態や出土遺物から6世紀前葉と思われる。



第10図 第21・26号住居跡実測図

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	坏 土 陶器	A 14.8 B 5.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 棕色 普通	P129 90% 覆土下層



第11图 第21号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色割・焼成	備考
2	坏土師器	A 15.0 B 7.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P130 95% 灰底 2次焼成
3	坏土師器	A 15.0 B 7.5	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P131 50% 甕内 2次焼成
4	坏土師器	A [14.9] B 5.5	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P132 40% 甕上中 2次焼成
5	坏土師器	A [10.3] B (5.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。外面一部赤彩。	砂粒・長石・石英 スコリア 普通	P133 35% 甕内 2次焼成
6	坏土師器	A [12.9] B (3.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 スコリア に白い褐色 普通	P134 15% 甕上中
7	坏土師器	A [13.7] B 4.0	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 スコリア 褐色 普通	P135 15% 甕上中
8	坏土師器	A [13.9] B (5.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。内面赤彩。	砂粒・長石・石英 スコリア に白い褐色 普通	P141 30% 甕上中 2次焼成
9	坏土師器	A [13.4] H (3.4)	口縁部にかけての破片。口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は外反気味に開き、わずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P189 5% 甕上中
10	台付坏土師器	A 15.0 B 8.5 D 5.6 E 1.8	体部から口縁部にかけて一部欠損。突出した平底。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。底部へう削り後ナデ。内面にへう記号。	砂粒・長石・石英 スコリア 褐色 普通	P136 80% 甕大底面 2次焼成
11	高坏土師器	A [14.0] B (5.7)	坏部片。体部から口縁部にかけて一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 スコリア 褐色 普通	P137 30% 甕上中 2次焼成
12	高坏土師器	B (4.8) D 9.1 E 3.0	胴部片。胴部は短くラッパ状に開き端部は反る。	胴部内面ナデ。外面面ナデ。	砂粒・長石・石英 スコリア に白い褐色 普通	P145 40% 甕上中
13	高坏土師器	B (3.7)	胴部片。胴部は短く「ハ」の字状に開く。	胴部内面へうナデ。外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 スコリア 褐色 普通	P195 10% 甕上中
14	甕上師器	A 6.2 B 5.9 C 3.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内埋して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部・底部外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	P138 98% 灰底
15	甕上師器	B (16.5) C 6.0	口唇部欠損。平底。体部は内埋して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へうナデ。外面ナデ。	砂粒・長石・石英 雲母・スコリア 褐色 普通	P139 90% 灰底 2次焼成
16	甕土師器	A 27.5 B (22.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へうナデ。外面ナデ。輪轆痕。	砂粒・長石・石英 雲母・スコリア に白い黄褐色 普通	P142 40% 灰底
17	手捏土師器	A 5.4 B 4.1 C 5.0	底面及び口縁部一部欠損。平底。体部は内埋気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へうナデ。外面ナデ。体部下位粗粒痕。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P143 90% 灰底

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第11図18	支脚	(10.5)	6.6	(6.1)	—	(212.0)	甕内 DP6	40%

第23号住居跡 (第12回)

位置 調査区南東部, B26区。

規模と平面形 本跡の南西側3分の1は調査区域外に延びており, 規模や平面形は明確ではないが, 残存している壁から, 一辺が3.50mの方形と推定される。

主軸方向 N-40°-E

壁 壁高は20cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 炉付近から中心部にかけて踏み固められている。

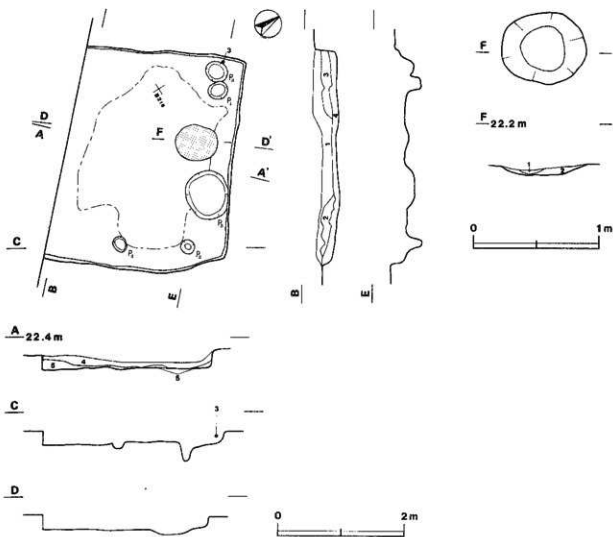
ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁とP₂は径20~31cmの円形, 深さ21~28cmで, 支柱穴である。P₃~P₅は性格不明である。

炉 中央部からやや北東寄りにある。長径68cm, 短径60cmで, 床面を10cm掘り窪めた不整形円形の地床炉である。火床は火熱を受け赤変している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土 5層からなる自然堆積である。



第12図 第23号住居跡実測図

土層解説

- 1 赤褐色 洗土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 洗土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 洗土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 洗土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 赤褐色 洗土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量

遺物 出土遺物は、土師器片80点、須恵器片1点及び混入した弥生土器片2点である。北コーナー付近の覆土中から第13図3の土師器鉢、炉内から1の坏がそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から5世紀中葉と思われる。



第13図 第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	坏 土師器	A [11.9] B (4.1)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から1縁部にかけて内彎して 立ち上がる。	1縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にふい褐色 普通	P155 10% 炉内 2次焼成
2	坏 土師器	B (2.0)	底部片。丸底。	底部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P156 10% 覆土中、2次焼 成、煤付香
3	鉢 土師器	A [21.8] B (9.1)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、口縁 部は外反する。	口縁部内・外面ナデ。体部内・外 面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にふい褐色 普通	P158 5% 覆土中

第24号住居跡 (第7図)

位置 調査区中央部南東側、B2b区。

重複関係 本跡は第9、10号住居跡及び第34号土坑を掘り込み、第27号住居跡によって掘り込まれていることから、第9号と第10号住居跡及び第34号土坑よりも新しく、第27号住居跡よりも古い。

規模と平面形 重複する遺構によって掘り込まれており、規模や平面形は明確ではないが、残存している壁や床から、一辺が5.45m程の方形と推定される。

主軸方向 N-53°-W

壁 3軒の住居跡との重複により、壁は東コーナー付近のみ残存している。残存壁高は15~45cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平州で、甕付近から中央部にかけて踏み固められた面がみられる。

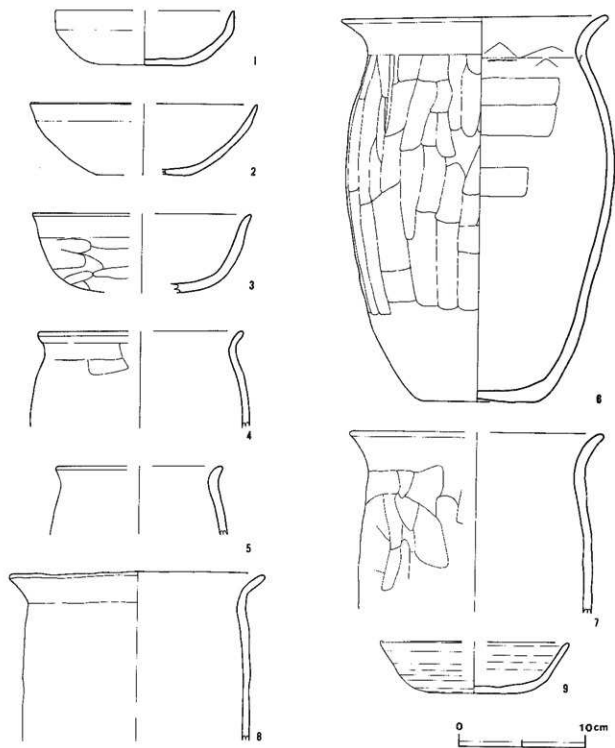
ピット 3か所(P₁-P₃)。P₁とP₂は長径27~32cm、短径23~25cmの楕円形、深さ36~46cm、P₃は長径[55]cm、短径[33]cmの楕円形、深さ40cmで、いずれも支柱穴である。P₃は第10号住居跡のP₂と上端が重複している。

竈 北西壁中央部に砂粒まじりの白色粘土で構築されており、天井部は崩落している。規模は煙道部から焚き口部まで115cm、両袖部最大幅125cm、壁外への掘り込みは31cmである。袖は芯材に凝灰岩を用い、その周り

は砂粒を混ぜた白色粘土を使用して構築されている。袖部内壁と床面を3cm掘り窪めた火床面は、火熱を受け赤変硬化している。径7cmの挿道が残存しており、外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黄 褐色 焼土小ブロック・白色粘土粒子少量、焼土大ブロック・炭化物微量
- 2 黄 褐色 焼土大ブロック・炭化粒子多量、白色粘土粒子微量
- 3 明赤 褐色 焼土大・中・小ブロック多量



第14図 第24号住居跡出土遺物実測図

覆土 7層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼上粒子・炭化物・炭屑・バミス微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼上粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼上粒子・炭化物粒子・ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼上粒子・炭化物粒子・白色粘土小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、焼上粒子・炭化物微量
- 6 暗褐色 焼上粒子・炭化物粒子・ローム粒子・白色粘土小ブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒子・白色粘土粒子少量、焼上粒子微量

遺物 出土遺物は、土師器片198点、須恵器片3点及び混入した弥生土器片1点である。覆土中から第14図2、3の土師器の坏、4、5、7の甕、南東塚付近の覆土下層から9の須恵器坏、中央部の床面から1の土師器の坏、北コーナー付近の床面から6の甕が横位の状態でそれぞれ出土している。竈内から出土した8の甕は、覆土中から出土した甕片と接合している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から7世紀後葉と思われる。

第24号住居跡出土遺物観察表

図号(号)	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	坏 土師器	A [14.1] B 4.4	底部から口縁部にかけての破片。 丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 浅黄褐色 普通	P159 50% 床直
2	坏 土師器	A [17.8] B 5.7 C [7.3]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部にかけて内 彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にふい褐色 普通	P160 35% 覆土中 2次焼成
3	坏 土師器	A [17.2] B (6.3)	底部から口縁部にかけての破片。 丸底。体部は内彎して立ち上がる。 口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 ナデ、外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にふい黄褐色 普通	P161 35% 覆土中
4	甕 土師器	A [16.0] B (7.7)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に立ち上がり、口 縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 ナデ、外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 褐色 普通	P164 5% 覆土中
5	甕 土師器	A [13.0] D (5.4)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に立ち上がり、口 縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 ナデ、外面へう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 褐色 普通	P166 5% 覆土中 2次焼成
6	甕 土師器	A 21.2 B 30.9 C 9.0	体部及び口縁部一部欠損。平底。 体部は内彎して立ち上がり、口縁 部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 へうナデ。体部外面縦位のへう削 り後ナデ。輪縁痕。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にふい褐色 普通	P141 85% 床直
7	甕 土師器	A [20.0] B (14.2)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に立ち上がる。口 縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 ナデ、外面へう削り。	砂粒・長石・石英・ スコリア 褐色 普通	P162 10% 覆土中 2次焼成
8	甕 土師器	A 19.9 B (13.2)	体部から口縁部にかけての破片。 体部はほぼ垂直に立ち上がり、口 縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア 褐色 普通	P163 10% 竈内 2次焼成
9	坏 須恵器	A [15.0] B 4.1 C 7.1	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内彎気味に立ち上 がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。体部下位外 面・底部縦位へう削り調整。	砂粒・長石 黄灰色 良好	P205 20% 覆土下層

第26号住居跡(第10図)

位置 調査区南東部、B2d4区。

重複関係 本跡は第20、21及び25号住居跡によって掘り込まれているので、これらの遺構よりも本跡の方が古い。

規模と平面形 重複する遺構によって掘り込まれており、規模や平面形は明確ではないが、残存している壁や床から、一边が7.70m程の方形と推定される。

主軸方向 N-47°-E

壁 3軒の住居跡との重複により、北東側の一部分のみ残存している。残存壁高は25~35cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部東側付近が踏み固められている。

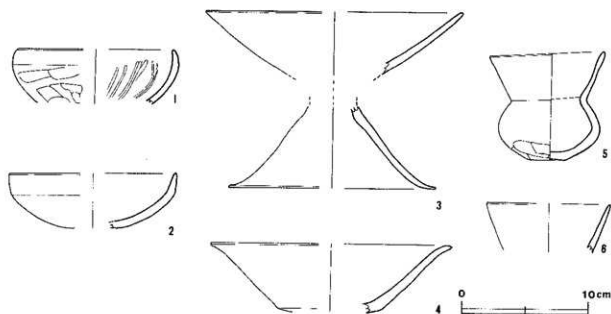
覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 粘土小ブロック・粘土粒子・炭化物・ローム粒・炭屑・バミス少量
- 2 暗褐色 粘土中ブロック中量、粘土粒子・炭化物少量

遺物 出土遺物は、土師器片24点である。覆土中から第15図1の上師器の坏、6の埴、4の高坏、北東壁際の床面から3の高坏がそれぞれ出土している。また、東コーナー付近の床面から5の埴が横位の状態でも出土している。

所見 3軒の住居跡によって掘り込まれているため、炉と柱穴はみつからなかった。本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から5世紀中葉と思われる。



第15図 第26号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表

図番番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色割・焼成	備考
第15図 1	坏 上師器	A [12.2] B (4.3)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部にかけて内傾して 立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ、体部内面 ヘラ磨き、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P188 20% 覆土中
2	坏 土師器	A [13.2] B (4.3)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり、口縁 部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ、体部内 外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 浅黄褐色 普通	P193 20% 床内 2次焼成
3	高 土師器	A [20.2] B (14.0) D [16.4] E (6.5)	胴部及び坏部にかけての破片。胴 部は「ハ」の字状に開く。体部は わずかに内傾気味に立ち上がる。	坏部内・外面ナデ、胴部内・外面 ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 褐色 普通	P190 40% 床直 内・外面摩耗
4	高 土師器	A [19.0] B (5.4)	坏部片。坏部との境に強い稜を持ち 体部はわずかに内傾気味に立ち 上がり、口縁部は外反する。	坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P194 5% 覆土中
5	埴 土師器	A 9.0 B 8.6 C 2.6	平底。体部はそろばん玉状を呈し、 口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ、体部内面ヘ ラナデ、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 褐色 普通	P191 100% 床直 2次焼成

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
6	埴土師器	A [9.8] B (3.8)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	1 埴器内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 褐色 普通	P192 5% 覆土中 2次焼成

(2) 奈良平安時代の住居跡

第1号住居跡 (第16図)

位置 調査区の北西部, A1c区。

規模と平面形 掘り込みが浅く、耕作による擾乱のため遺存状態が悪いが、住居跡中央部の土層断面と床面の残存部から、一辺4.90m程の方形と推定される。

主軸方向 N-56°-W

壁 残存壁高は15~34cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほとんど残存していないが、住居跡中央部に平坦で、踏み固められている面がみられる。

竈 北西壁中央部に粘土混じりの焼土が検出されており、竈と思われるが擾乱を受けほとんど残っていないため、明確でない。

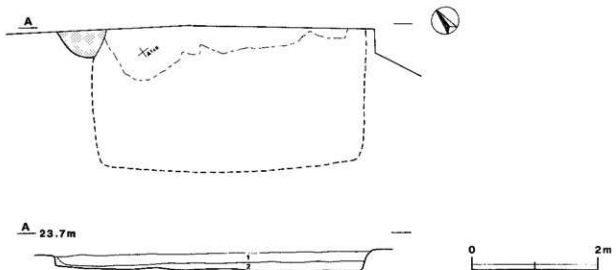
覆土 2層からなる自然堆積である。土層1は耕作によるトレンチャーの擾乱をかなり受けている。

土層解説

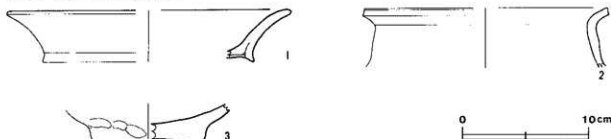
- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック少量, ローム大ブロック微量

遺物 覆土中から第17図1の土師器高坏, 2, 3の土師器甕がそれぞれ出土している。他に、覆土中から古墳時代の土師器坏片, 甕片と平安時代の土師器高台付坏片及び甕片が56点出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から平安時代以降と思われる。



第16図 第1号住居跡実測図



第17図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

段階番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17段	高土師器 A [22.2] B 4.1	4.1	底部下位から口縁部にかけての破片。底部下位に強い稜を持つ。口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部から底部下位にかけて内・外面1掌ナデ。	砂粒・長石・石英 棕色 普通	P1 覆土中 5%
2	土師器 A [19.0] C (4.7)	4.7	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁部を外上方につまみ上げている。	口縁部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 小石 にぶい・棕色 普通	P236 覆土中 5%
3	土師器 B (2.5) C (8.8)	2.5 8.8	底部破片。突出した平底。	底部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・ 小石 にぶい・棕色 普通	P2 覆土中 5%

第2号住居跡(第18回)

位置 調査区南東部中央, A1g区。

重複関係 本跡は第3号住居跡の南西壁部を掘り込んでいるので、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸3.65m、短軸3.00mの長方形である。

主軸方向 N-29°-E

壁 壁高は5~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、出入口から竈にかけての中心部が踏み固められている。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は径25~48cmの円形、深さ19~22cmで、主柱穴である。P₅は長径45cm、短径40cmの楕円形、深さ50cmで、出入口施設に伴うピットである。

竈 北東壁中央部に砂粒まじりの白色粘土で構築されているが、一部耕作による擾乱を受けている。天井部は崩落している。規模は煙道部から焚き口部まで130cm、両袖最大幅114cm、壁外への掘り込みは62cmである。両袖は芯材に凝灰岩を用い、その周りは砂粒を混ぜた白色粘土を使用して構築されている。袖の内壁は、火熱を受けて赤変している。火床面は床面を7cm掘り窪めており、火熱を受けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

出土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子多量、焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子少量
- 3 黄褐色 炭屑・バミス少量
- 4 黄褐色 焼土粒子多量、粘土小ブロック少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化物多量
- 6 黄褐色 炭屑・バミス中量

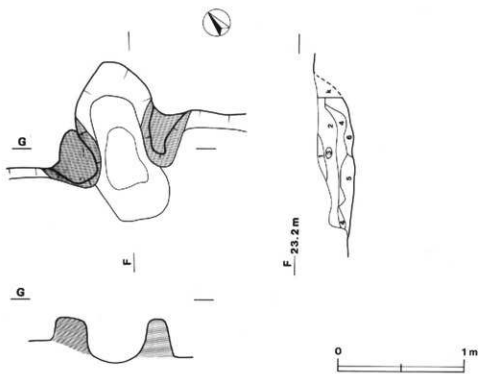
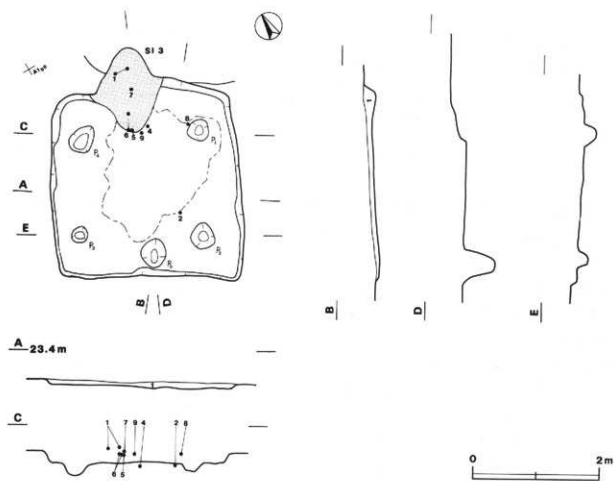
覆土 掘り込みが浅いため、覆土はほとんど残っていない。

土層解説

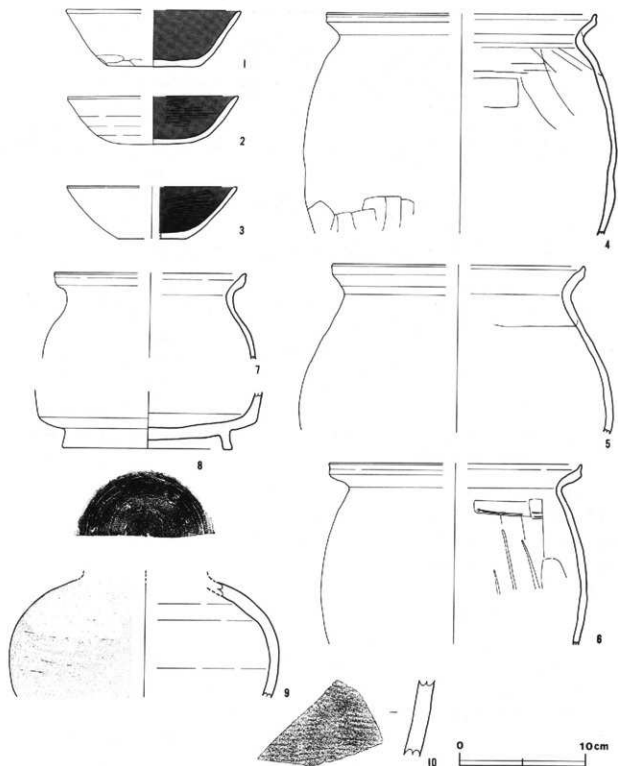
- 1 黒褐色 焼土粒子多量、ローム・中ブロック・ローム粒・炭化粒子・炭屑・バミス中量

遺物 出土遺物は、土師器片466点、須恵器片2点及び混入した弥生土器片2点である。覆土中から第19段8の須恵器高台付杯、9の須恵器短頸壺、中央寄寄り床面直上から2の土師器杯がそれぞれ出土している。また、竈内から1、3の土師器杯、5、6、7の土師器の甕が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から9世紀後葉と思われる。



第18图 第2号住居跡実測图



第19図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図数番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	坏 土師器	A [13.8] B 4.5 C 7.0	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部にかけて外 傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内部へ ラ磨き。内面黒色処理。体部下端 回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 棕色 普通	D3 40% 壺内

図説番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
第19図 2	坏 土器 器	A [13.6] B 3.9 C 6.9	底面から口縁部にかけての破片。平底。体部からI口縁部にかけて内傾意味に外傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。内面褐色処理。体部ト胸回転ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 淡黄色 普通	P4 10% 床直
3	坏 土器 器	A [13.4] B 4.2 C [5.3]	底面から口縁部にかけての破片。平底。体部からI口縁部にかけて内傾意味に外傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。内面褐色処理。体部ト胸回転ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい黄褐色 普通	P5 10% 甕内
4	甕 土器 器	A [21.4] B (17.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、I口縁部は外反する。I口縁部は外上方につまみ上げられている。	I口縁部内・外面ナデ。体部内面ヘラナデ。体部外面下半縦位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英・小石・スコリア にぶい褐色 普通	P6 10% 甕土中
5	甕 土器 器	A [20.0] B (13.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、I口縁部は外反する。I口縁部は外上方につまみ上げられている。	I口縁部内・外面ナデ。体部内面ヘラナデ。体部外面縦位のヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・小石・スコリア にぶい褐色 普通	P7 10% 甕内
6	甕 土器 器	A [20.1] B (14.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、I口縁部は外反する。I口縁部は外上方につまみ上げられている。	I口縁部内・外面ナデ。体部内面ヘラナデ。体部外面縦位のヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・小石 褐色 普通	P8 10% 甕内
7	甕 土器 器	A [15.1] B (6.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、I口縁部は外反する。I口縁部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部内面ヘラナデ。体部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・小石・スコリア にぶい褐色 普通	P9 5% 甕内
8	高台付坏 須恵 器	B (4.6) D 13.4 E 1.6	高台部から体部にかけての破片。高台は直線的に開く。体部は下位に横を持ち、外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底面ヘラ切り高台削り。	長石・石英 普通	P10 15% 甕土中
9	短頸 須恵 器	B (9.1)	体部片。体部は内傾しながら立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。体部外面自然釉。	長石・石英 褐色黄点 灰色 良好	P11 10% 甕内 木葉下空

10は須恵器の破片で、平行叩きが施されている。

第3号住居跡 (第20図)

位置 調査区南東部中央、A1g区。

重複関係 本跡は第2号住居跡によって南西喉部を掘り込まれているので、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸3.00m、短軸2.95mの方形である。

主軸方向 N-56°-W

壁 壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、踏み固められた面は見られない。

ピット 3か所(P1~P3)。P1は長径50cm、短径41cmの楕円形、深さは48cmで、主柱穴である。P2は長径46cm、短径37cmの楕円形、深さは18cmで、出入口施設に伴うピットである。P3は長径70cm、短径53cmの楕円形、深さは8cmで、性格不明である。

竈 北西壁中央部に砂粒まじりの白色粘土で構築されている。天井部と同軸部は崩落しており、竈の掘りかたのみ残存している。規模は煙道部から焚き口部まで82cm、最大幅85cm、壁外への掘り込みは45cmである。火床面は床面を8cm掘り窪めており、僅かではあるが焼けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

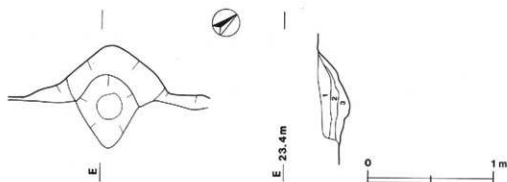
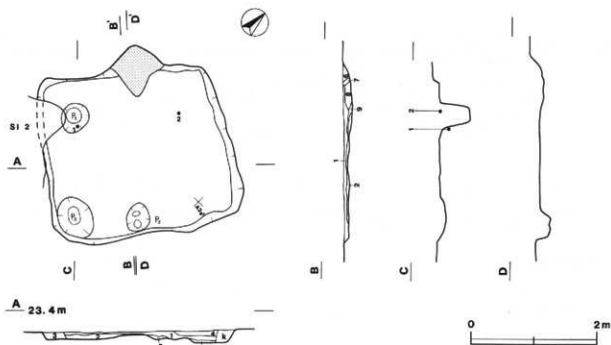
甕土層解説

- 1 灰 黄褐色 焼土粒子・ローム中アブク少量
- 2 黒 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム中アブク少量
- 3 黒 褐色 焼土小ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量

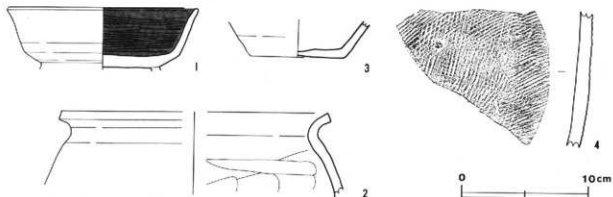
覆土 9層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 2 褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子多量・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 | 8 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 | 9 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 5 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量 | | |



第20図 第3号住居跡実測図



第21図 第3号住居跡出土遺物実測図

遺物 出土遺物は、土師器片が173点、須恵器片2点及び混入した弥生土器片4点である。覆土中から第21回3の須恵器片、中央北寄りの床面直上から2の土師器片、P₂の覆土中から1の土師器高台付坏と4の須恵器片がそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から9世紀後葉と思われる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21回 1	高台付坏 土師器	A 14.9 B (4.8)	底部から口縁部にかけての破片、 高台部剥離。体部下位に稜を持ち、 口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面横ナデ。体部内面へ うろつき。内面黒色処理。	長石・雲母 にふいね色 普通	P12 床直 65%
2	甕 土師器	A [21.0] B (6.7)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり、口縁 部は外反する。口縁部は外上方に つまみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部内面へ ラナデ。体部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 小石・スゴリア にふいね色 普通	P13 P1内 5%
3	坏 須恵器	B (3.0) C 7.4	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。底部同 転へう切り後ナデ調整。	砂粒・長石・石英 灰色 普通	P14 覆土中 5%

4は須恵器の破片で、平行叩きが施されている。

第4号住居跡（第22回）

位置 調査区北西部中央、A1b区。

規模と平面形 長軸4.55m、短軸 [3.70]mの長方形である。

主軸方向 N-55°-W

壁 南西壁は玉川の流れによって削られており、残存壁高は5~20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は北東壁と南東壁南コーナー寄りにみられ、上幅15~23cm、深さ9~16cmで、断面形はU字状である。

床 全体的に平坦で、竈から南東壁にかけて踏み固められている。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は径22cmの円形、深さ14cmで、出入口施設に伴うピットである。P₂とP₃は性格不明である。

竈 北西壁中央部に砂粒まじりの白色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、袖部は東側が残り、西側は補強材を一部残し崩壊している。規模は煙道部から焚き口部まで126cm、最大幅80cm、壁外への掘り込みは55cmである。火床面は床面を12cm掘り窪めており、僅かではあるが焼けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

覆土層解説

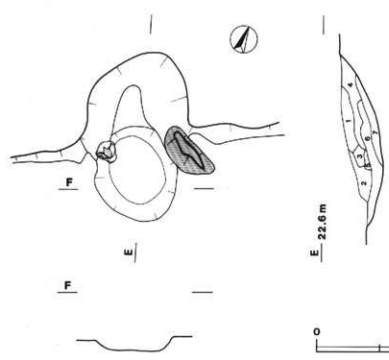
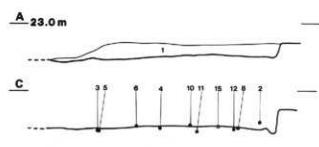
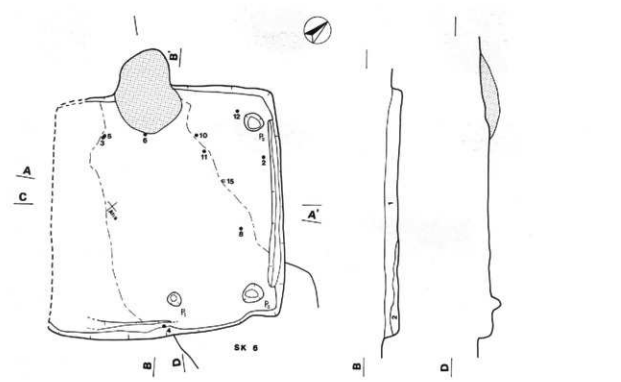
- | | |
|------------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 焼上粒子・炭化粒子中量 | 6 赤黒色 炭化粒子多量、白色粘土少量 |
| 2 赤黒色 焼上粒子多量、焼上小ブロック中量、炭化材少量 | 7 黄褐色 炭化粒子少量 |
| 3 赤黒色 焼上粒子中量、炭化材少量 | |
| 4 赤黒色 焼上粒子中量、炭化粒子少量 | |
| 5 明赤褐色 焼上粒子多量 | |

覆土 2層からなる自然堆積である。

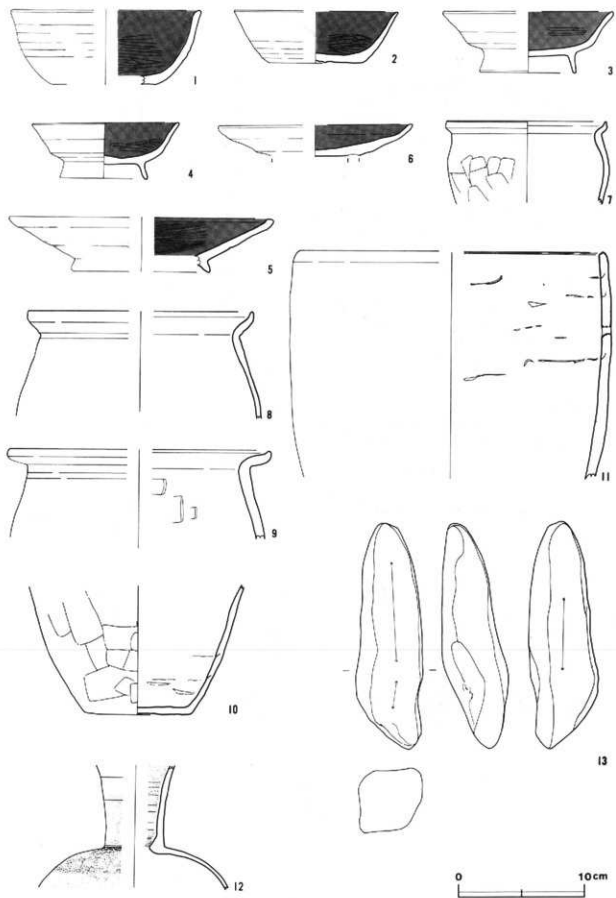
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒下・泥沼パミス中量、焼上粒子少量
- 2 暗褐色 焼上粒子・炭化粒子中量

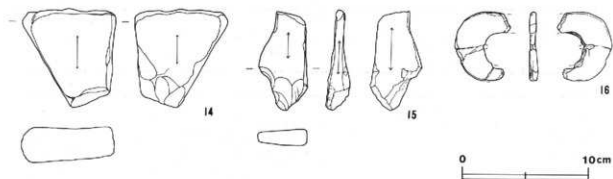
遺物 出土遺物は、土師器片949点、灰陶陶器片3点、石製品4点及び混入した弥生土器片5点である。覆土中から第23回1、2の土師器片、9の甕、13、14の砥石及び16の石製模造品、中央部北寄りの床面直上から11の瓶、北コーナー付近の床面直上から12の灰軸陶器長頸瓶、中央部北東寄りの床面直上から15の砥石、中央部東寄りの床面直上から8の甕、竈付近の床面直上から3の高台付坏、5、6の高台付皿、10の甕、南東



第22图 第4号住居跡実測图



第23图 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第24図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

階際の床面から4の高台付坏、窠内から7の甕がそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から9世紀後半と思われる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	坏 土 師 器	A [15.2] B 4.1 C [8.0]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内彎して立ち上り、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部外面横ナデ、内面へ ラ磨き。内面黒色処理、体部下端 回転へラ削り。	砂粒・長石 にふい黄褐色 普通	P15 確認面 20%
2	坏 土 師 器	A [12.9] B (4.1) C 7.4	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部にかけて外 傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面へ ラ磨き。内面黒色処理。底部回転 へラ切り後ナデ調整。	砂粒・長石・石英・ スコリア にふい黄褐色 普通	P16 土中 20%
3	高台付坏 土 師 器	A [13.4] B 4.9 D 7.4 E 1.6	高台部から口縁部にかけての破片。 高台部は直線的に開く。体部 下位に稜を持ち。口縁部はわずかに 外反する。	体部内・外面横ナデ。体部内面へ ラ磨き。内面黒色処理。高台貼付。	長石・雲母 褐色 普通	P17 床直 二次焼成 60%
4	高台付坏 土 師 器	A 11.6 B 4.6 D 7.0 E 1.3	体部から口縁部にかけての破片。 高台部は直線的に開く。体部下位 に明瞭な稜を持ち。口縁部はわずかに 外反する。	体部外面横ナデ。体部内面へラ磨 き内面黒色処理。高台貼付。	長石・雲母 黒褐色 普通	P18 床直 二次焼成 50%
5	高台付粗 土 師 器	A [21.0] B 4.3 D [10.8] E 0.9	高台部から口縁部にかけての破片。 高台部は直線的に開く。体部 から口縁部にかけて外傾して立ち 上がる。口縁部内面に凹面を持つ。	体部外面横ナデ。体部内面へラ磨 き内面黒色処理。体部下位外面へ ラナデ。高台貼付。	砂粒・長石・雲母・ スコリア にふい黄褐色 普通	P19 床直 10%
6	高台付粗 土 師 器	A [15.2] B (2.5)	底部から口縁部にかけての破片。 高台部直線。体部から口縁部にか けてわずかに内彎して立ち上る。	体部外面横ナデ。体部内面へラ磨 き内面黒色処理。高台貼付。	砂粒・長石・雲母 浅黄褐色 普通	P20 床直 10%
7	甕 土 師 器	A 12.8 B (6.6)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、口縁 部は外反する。口唇部は上方につ まみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部外面へ ラ削り。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P21 窠内 40%
8	甕 土 師 器	A [17.8] B (8.4)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、口縁 部は外反する。口唇部は上方につ まみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ナ デ。	砂粒・長石・石英・ パミス 褐色 普通	P23 床直 5%
9	甕 土 師 器	A [20.6] B (7.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、口縁 部は外反する。口唇部は上方につ まみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部内面へ ラナデ。外面ナデ。	砂粒・長石・石英 明褐色 普通	P24 確認面 5%
10	甕 土 師 器	B (10.3) C 8.5	底部から体部にかけての破片。平 底。体部は内彎しながら立ち上る。 体部	体部内面へラナデ。体部外面へラ 削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 浅褐色 普通	P25 床直 20%
11	甕 土 師 器	A [24.1] B (18.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部にかけて内彎して 立ち上がる。口唇部に凹面を持つ。 体部上位に穿孔。	口縁部内・外面ナデ。体部内・外 面ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 黄褐色 普通	P22 床直 10%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 12	長頸瓶 灰釉陶器	B (9.7)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内押しながら立ち上がる。 口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面横ナデ。口縁部内面・ 体部外面灰釉。	長石・石英 灰オリーブ色 良好	P26 5% 井ヶ谷78号窯式

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第23図13	碁石	17.8	5.4	5.3	—	543.3	緑泥片岩	2区蔵内	Q1 100%
第24図14	碁石	(7.8)	(7.4)	2.8	—	(209.3)	砂岩	覆土中	Q2 30%
15	碁石	(7.9)	3.8	1.8	—	(38.9)	凝灰岩	2区蔵内	Q3 50%
16	石製模造品	5.5	4.4	0.7	—	13.4	滑石	覆土中	Q4 勾玉本製品 100%

第5号住居跡(第25図)

位置 調査区中央部, A16区。

重複関係 第2号不明遺構は本跡によって掘り込まれていることから, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸4.00m, 短軸3.75mのほぼ方形である。

主軸方向 N-48°-W

壁 壁高は7~24cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 竈から中央部にかけて踏み固められている。

ピット 3か所(P₁~P₃)。P₁は径21cmの円形, 深さ15cmで, 出入口施設に伴うピットである。P₂とP₃は性格不明である。

竈 北西端中央部に構築されている。天井部と両袖部は残存しておらず, 掘り方のみを確認した。掘り方の規模は煙道部から焚き口部まで115cm, 最大幅85cm, 壁外への掘り込みは56cmである。火床面は床面を9cm掘り窪めており, 僅かではあるが焼けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

甍土層解説

- 1 黒褐色 焼上粒中量, 炭屑バミス微量
- 2 暗褐色 焼上粒子多量, 焼上小・中ブロック少量
- 3 暗褐色 焼上粒中量
- 4 暗褐色 炭化粒子多量, 炭屑バミス・黒色粒子中量
- 5 暗赤褐色 焼上粒多量
- 6 黒褐色 炭化粒子多量, 黒色粒子中量

覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

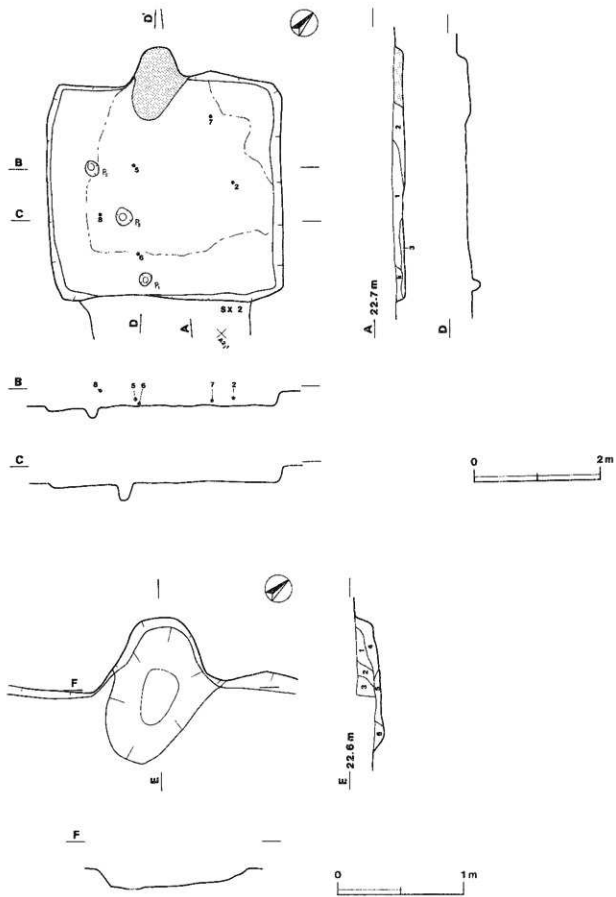
- 1 暗褐色 ローム粒少量, 焼上粒子・炭化粒・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量, 焼上粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼上粒子微量

遺物 出土遺物は, 土師器片708点, 須恵器片12点, 石製品3点及び混入した弥生土器片6点である。覆土上層から第26図1土師器坏, 3の高台付坏, 4の甕, 8の鉢, 9~11の砥石, 中央部北東寄りの覆土中層から2の坏, 中央部北寄りの覆土下層から7の甕, 中央部の覆土下層から5の甕, 中央部南東寄りの床面から6の甕がそれぞれ出土している。

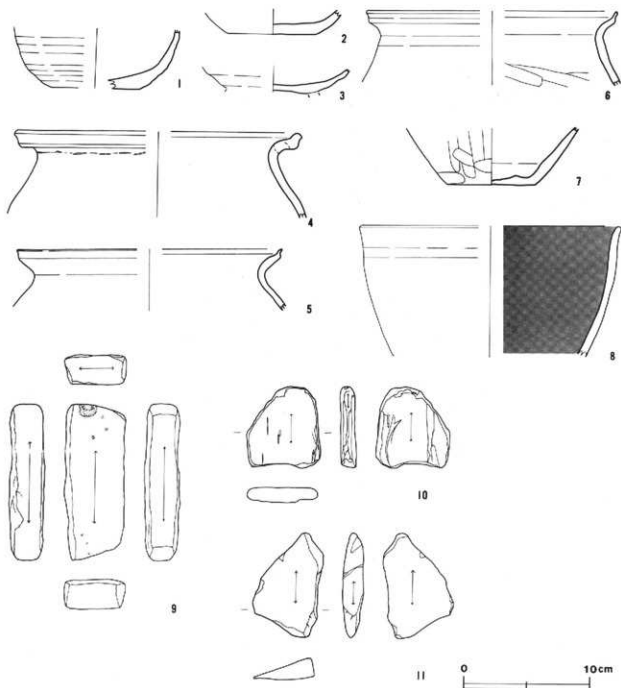
所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から9世紀前後と思われる。

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	坏 土師器	B (4.8) C (7.0)	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内押しながら立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 棕色 普通	P29 10% 覆土上層 二次焼成



第25图 第5号住居跡実測図



第26図 第5号住居跡実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第2図 2	杯 土師器	B [2.0] C 7.0	底部片。平底。	底部内面黒色処理。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石・石英・スコリア 棕色 普通	P28 15% 覆土下層 二次焼成
3	高台付杯 土師器	B (2.0)	底部片。高台部剥離。	底部内面へラ磨き。内面黒色処理。高台貼付。	砂粒・長石・スコリア 灰白色 普通	P27 15% 覆土上層
4	甕 土師器	A [22.1] B (6.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は外上方つまみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 棕色 普通	P30 5% 覆土上層

図面番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
第2図5	壺 土師器	A [20.9] B (4.9)	体部から1脚部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、1脚部は外反する。1脚部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部内面へラナデ、外面ナデ。	砂粒・長石・石英・云母にふい橙色 普通	P31 履上下層 5%
6	壺 土師器	A [20.0] B (6.0)	体部から1脚部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部内面へラナデ、外面ナデ。	砂粒・長石・石英・至母 橙色 普通	P32 床直 5%
7	壺 土師器	B (4.8) C 7.0	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内面ナデ。体部外面へラナデ。	砂粒・長石・石英・スクリヤ にふい橙色 普通	P33 履上下層 5%
8	鉢 土師器	A [20.1] B (10.4)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、1脚部はわずかに外反する。	口縁部外面ナデ。体部内面へラナデ、外面ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母 にふい橙色 普通	P34 履上下層 5%

図面番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第2図9	瓶 石	12.4	4.9	2.7	—	202.2	砂岩	2区岡ベルト	Q5 100%
10	瓶 石	6.3	5.8	1.4	—	58.3	凝灰岩	備後区	Q6 50%
11	瓶 石	8.2	3.6	1.6	—	61.2	凝灰岩	2区備土中	Q7 100%

第8号住居跡(第27図)

位置 調査区中央部, A2j区。

重複関係 本跡は第7号住居跡, 第30号土坑, 第32号土坑を掘り込んでいることから, これらの遺構よりも本跡の方が新しい。

規模と平面形 重複する遺構によって, 規模や平面形は明確ではないが, 残存している壁や床から, 辺が3.25m程の方形と推定される。

主軸方向 N-60°-W

壁 北東壁と北西壁の一部は確認されたが, そのほかの壁は確認できなかった。残存壁高は10~25cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 踏み固められた面はみられない。

竈 北西壁中央部に砂粒まじりの白色粘土で構築されているが, 一部耕作による攪乱を受けている。天井部は崩落している。規模は煙道部から焚き口部まで90cm, 両袖最大幅[100]cm, 壁外への掘り込みは30cmである。南側袖は砂粒を混ぜた白色粘土で構築されている。北側袖部は攪乱を受けて破壊されている。袖の内壁は, 火熱を受けて赤変している。火床面は床面を5cm掘り窪めており, 火熱を受けて赤変している。また, 火床面から長径17cm, 短径12cm, 深さ6cmの梅形支脚穴が見つかった。煙道は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 にふい橙色 粘土粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 粘土粒子少量
- 4 黒褐色 炭屑パミス少量
- 5 褐色 炭屑パミス少量

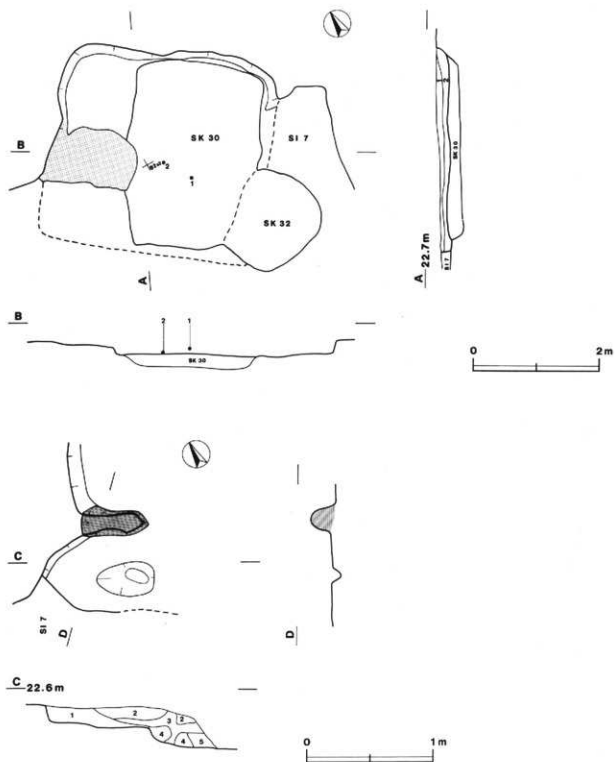
覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

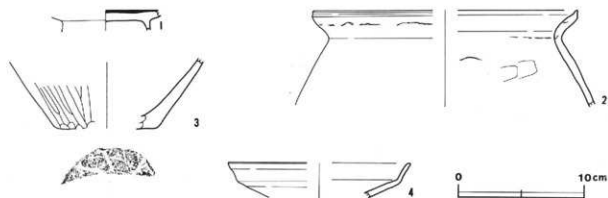
- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭屑パミス少量, 焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 出土遺物は、土師器片206点、須恵器片4点及び混入した縄文土器片2点と弥生土器片5点である。覆土中から第28図4の須恵器盤、3の土師器甕、中央部の床面直上から1の土師器高台付坏、2の甕がそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から9世紀前葉と思われる。



第27図 第8号住居跡実測図



第28図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	高台付坏 土器	B (1.5) E (0.8)	底面片。高台部一部欠損。高台は直線的に開く。	底面外面へラ切り。高台貼付。内面黒色処理。	長石・石英にふい褐色普通	P44 5% 床直 二次焼成
2	甕 土器	A [20.8] B (7.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内押しして立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラナデ、外面ナデ。	砂粒・長石・石英・小石 灰褐色普通	P45 5% 床直
3	甕 土器	B (5.6) C [7.8]	底面から体部にかけての破片。平底。体部は外押しして立ち上がる。	体部内面へラナデ、外面へラ磨き。底面木炭痕。	砂粒・長石・石英にふい赤褐色普通	P47 5% 覆土中
4	甕 須恵器	A [14.4] B (2.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外押しして立ち上がり、口縁部との境に線をもち、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 褐色普通	P45 5% 覆土中

第11号住居跡 (第29図)

位置 調査区東部中央, A2j3区。

規模と平面形 本跡の北東側4分の1は調査区域外に延びており、規模や平面形は明確ではないが、残存している壁や床面から、一辺が3.80m程の方形と推定される。

主軸方向 N-45°-W

壁 壁高は20~35cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦で、竈から中心部にかけて踏み固められている。

竈 北西壁中央部に構築されているが、耕作による攪乱を受けているためほとんど残存していない。

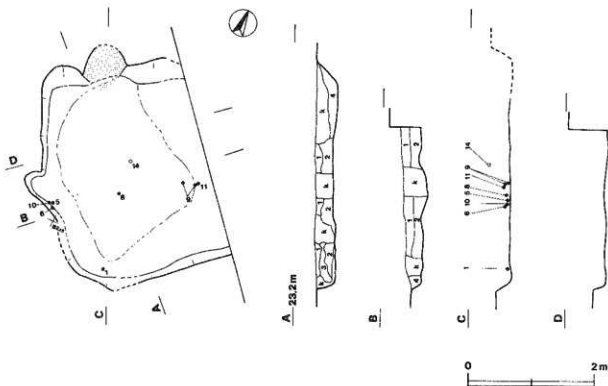
覆土 4層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量
- 2 暗褐色 炭化物・ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量、ローム大ブロック微量

遺物 出土遺物は、土器器片91点、須恵器片7点、土製品1点及び石製品1点である。覆土中から第30図2~4の土器の坏、7の高台付坏、13の砥石、中央部上層から14の土製紡錘車、下層から8の高台付坏、南西壁際中央の覆土下層から5、6の坏、10の甕、中央部東寄りの覆土下層から9、11の甕、南コーナーの覆土下層から1の坏がそれぞれ出土している。

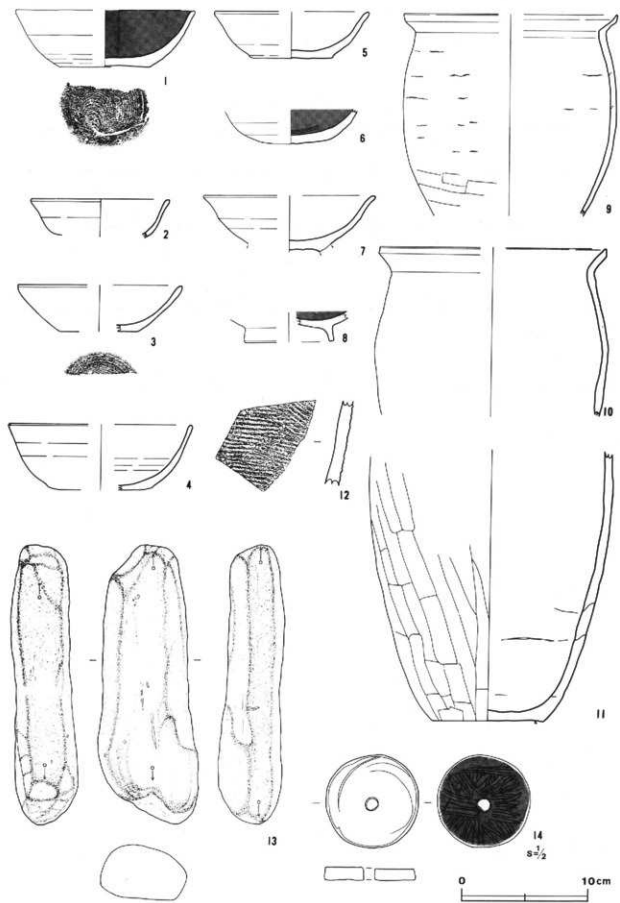
所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から10世紀前葉と思われる。



第29図 第11号住居跡実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	土師器 上脚器	A [14.1] B 4.5 C 7.3	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部はわずかに内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英 浅黄褐色 普通	P69 覆土下層 40%
2	土師器 土師器	A 10.8 B (3.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部はわずかに内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部・体部横ナデ。	砂粒・長石・石英 浅黄褐色 普通	P70 覆土中 2次焼成 35%
3	土師器 土師器	A [13.0] B 3.7 C [6.2]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部はわずかに内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P71 覆土中 2次焼成 20%
4	土師器 上脚器	A [14.2] B 5.2 C [8.2]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部横ナデ。底部一定方向のヘラ削り。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅褐色 普通	P72 覆土中 20%
5	土師器 土師器	A [12.2] B 3.7 C 6.4	体部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部横ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P73 覆土下層 2次焼成 15%
6	土師器 土師器	B [2.8] C 5.9	底部から体部下位にかけての破片。 平底。体部は内傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。体部内面ヘラ削り。内面黒色処理。体部下位回転糸切り。	砂粒・長石・石英・スコリア 黄褐色 普通	P74 覆土下層 15%
7	高台付土師器 土師器	A [13.4] B (4.3)	底部から口縁部にかけての破片。 高台付。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り後、高台貼付。	砂粒・長石・石英・スコリア 褐色 普通	P75 覆土中 2次焼成 10%
8	高台付土師器 土師器	B (2.4) D [7.2] E 1.2	高台部から体部下位にかけての破片。 高台付。体部は内傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ。内面黒色処理。底部回転糸切り後、高台貼付。	砂粒・長石・石英 黄褐色 普通	P76 覆土下層 2次焼成 5%
9	土師器 土師器	A [16.9] B (16.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反し、底部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。体部下位外面斜位方向のヘラ削り。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P77 覆土下層 20%



第30图 第11号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第30図10	壺 土師器	A [17.9] B (13.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、口縁部は外反し、端部は上方方向につまみ上げられている。	口縁部内・外面積ナデ、体部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒・長石・石英にぶい橙色 普通	P70 5% 覆土下層
11	壺 土師器	B (21.5) C 9.0	底部から体部にかけての破片。平底。体部はわずかに内埋して立ち上がる。	体部内面ヘラナデ、体部下半部位方向のヘラ削り。輪襷痕。	砂粒・長石・石英・小石にぶい橙色 普通	P78 30% 覆土下層

12は須恵器の壺片で、平行叩きが施されている。

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第30図13	磁石	22.0	7.8	4.4	—	1107.2	凝灰岩	覆土中	Q8 100%

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第30図14	粘銅土	4.9	—	0.7	0.7	16.3	中央部覆土下層	D P2 土師器転出	100%

第12号住居跡 (第31図)

位置 調査区南東部、B2b区。

重複関係 本跡は第13、14号住居跡の北西側を掘り込んでいるので、本跡の方が新しい。

規模と平面形 掘り込みが浅く、耕作による攪乱を受けているため、規模や平面形は明確ではないが、残存している床面から長軸(3.20)m、短軸[4.00]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-44°-E

壁 ほとんど残存していない。

床 全体的に平坦で、竈から中心部にかけて踏み固められている。

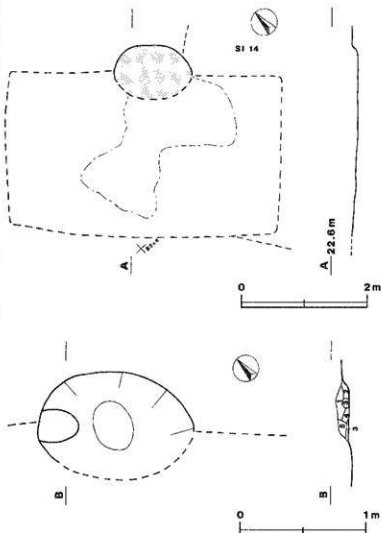
竈 北東壁中央部に構築されている。攪乱を受けているため、北西側の袖部が一部分残っているだけである。袖部は砂粒を混ぜた白色粘土で構築されている。

覆土層解説

- 1 泥色 黒色土粒子・白色粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 明褐色 ローム粒子多量
- 4 暗赤褐色 粘土粒子・ローム粒子多量
- 5 褐色 焼土粒子少量

覆土 掘り込みが浅いため、覆土はほとんど残っていない。

遺物 出土遺物は、土師器片52点である。ほとんどが細片である。



第31図 第12号住居跡実測図

所見 第14号住居跡床面が本跡床面下面からみつまっていることから、本跡は第14号住居跡よりも新しい。本跡の時期は、重複関係から10世紀前葉以降と思われる。

第13号住居跡 (第32図)

位置 調査区南東部, B2b区。

重複関係 本跡は第12, 14号住居跡によって掘り込まれていることから、これらの遺構よりも古い。

規模と平面形 本跡は2軒の住居跡によって掘り込まれているため、竈のみが残存する。規模と平面形は不明である。

主軸方向 [N-53°-E]

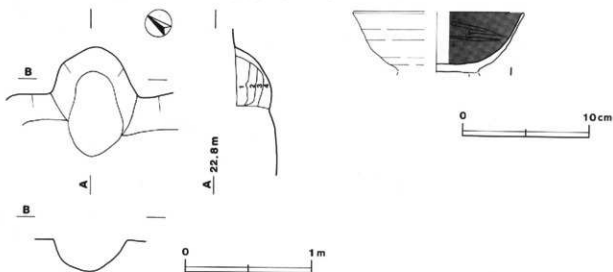
竈 北東壁に構築されている。天井部と袖部はほとんど崩壊しており、掘り方のみ確認された。規模は煙道部から焚き口部まで88cm, 最大幅70cm, 壁外への掘り込みは39cmである。火床面は床面を2cm掘り窪めており、火熱を受けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 焼土大ブロック微量
- 3 暗褐色 焼土中ブロック・炭化粒子多量
- 4 極暗褐色 炭化粒子極多量, 焼土大ブロック多量

遺物 出土遺物は、土師器片18点と混入した弥生土器片1点である。竈内から第32図1の土師器の高台付坏が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から10世紀前葉と思われる。



第32図 第13号住居跡竈・出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	高台付坏 土師器	A [13.5] B (4.8)	底部から口縁部にかけての破片。 高台剥離。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部・体部外面横ナデ、内面へり磨き、内面黒色処理。高台貼付。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P80 竈内 2次焼成

第14号住居跡 (第33図)

位置 調査区南東部, B2b区。

重複関係 本跡は第13号住居跡を掘り込み、第12, 15号住居跡によって掘り込まれていることから、第13号住

居跡より新しく、第12、15号住居跡より古い。

規模と平面形 2軒の住居跡によって掘り込まれているため、規模や平面形は明確ではないが、残存する壁や床から長軸(4.00)m、短軸[2.00]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-55°-E

壁 北東壁の一部が残存しており、壁高は15~35cmである。

床 全体的に平坦で、竈から中心部にかけて踏み固められている。

ピット 2か所(P₁とP₂)。P₁とP₂は性格不明。

竈 北東壁に構築されている。天井部と袖部はほとんど残存していないが、掘り方と支脚が確認された。支脚は火床面を掘り込みほぼ南東に傾いて立てられていた。規模は煙道部から焚き口部まで80cm、最大幅66cm、壁外への掘り込みは28cmである。火床面は床面を7cm掘り窪めており、火熱を受けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

覆土 2層からなる自然堆積である。

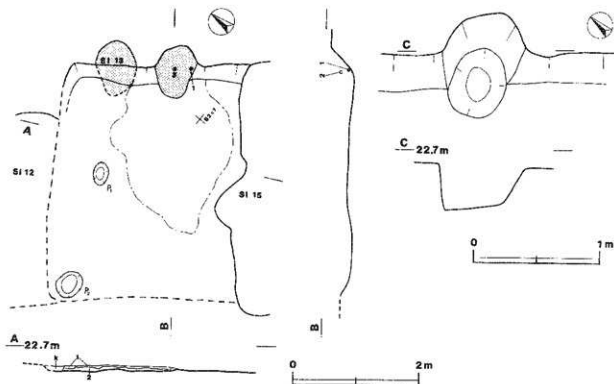
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

2 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土超了・炭化粒子微量

遺物 出土遺物は、土師器片121点と須恵器片2点である。竈内から第34図1の土師器の坏と2の支脚が出土している。

所見 本跡床面は第12号住居跡床面の下面からみつかっている。本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から10世紀前葉と思われる。

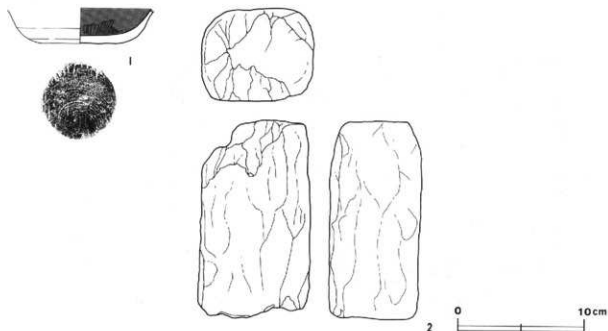


第33図 第14号住居跡実測図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	坏 土師器	B (2.5) C 6.0	腹部から体部にかけての破片。平底。体部は内傾して立ち上がる。	体部外面横ナゲ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。腹部阿形糸切り。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P81 竈内 70%

図録番号	種別	計測値					材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第34図2	支脚	15.7	8.8	7.3	—	722.3	凝灰岩	内	Q9 80%



第34図 第14号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡 (第35図)

位置 調査区南東部, B2c区。

重複関係 本跡は第14, 17号住居跡を掘り込んでいることから, これらの遺構よりも新しい。

規模と平面形 長軸3.90m, 短軸3.60mの方形である。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高30~55cmで, ほほ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 出入口から竈にかけての中心部が踏み固められている。

ピット P₁は長径48cm, 短径39cmの楕円形, 深さ35cmで, 出入口施設に伴うピットである。

竈 北西壁中央部に構築されている。天井部はほとんど残存していないが, 袖部が一部残存している。規模は煙道部から焚き口部まで118cm, 両袖最大幅137cm, 壁外への掘り込みは31cmである。袖は褐色粘土で構築されている。袖の内壁は, 火熱を受けて赤変している。火床面は床面を7cm掘り窪めており, 火熱を受けて部分的に赤変硬化した面がみられる。煙道は外傾して立ち上がる。

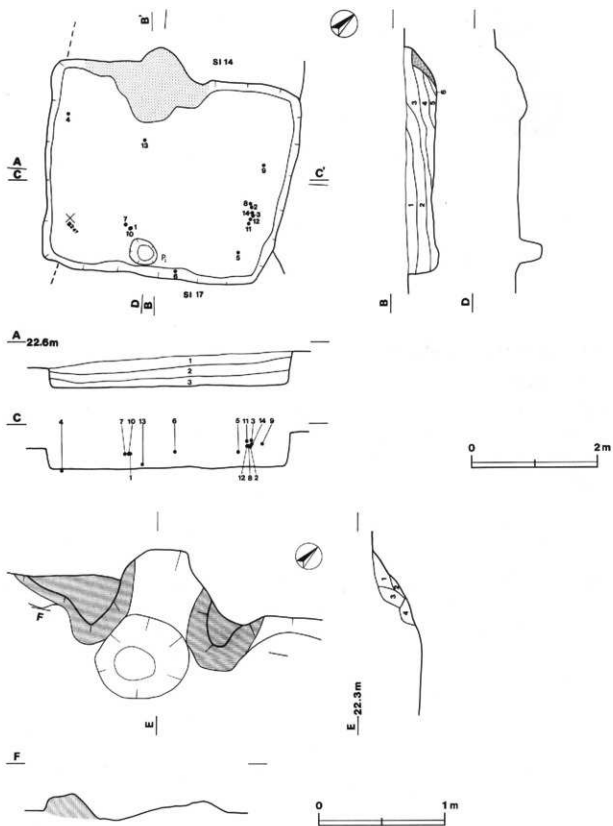
竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子少量

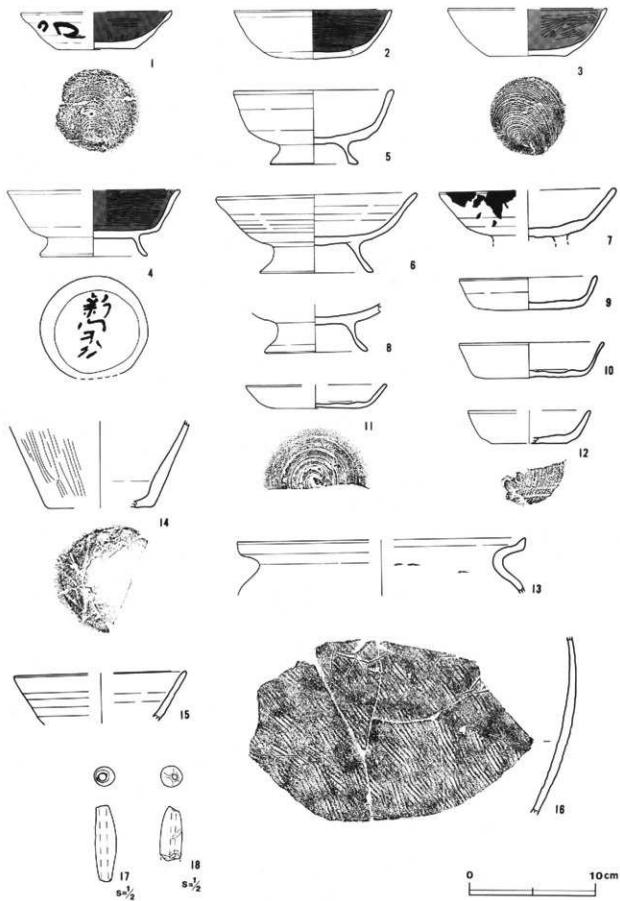
覆土 6層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子・腐沼バミス少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子多量



第35图 第15号住居跡実測图



第36图 第15号住居跡出土遺物実測図

遺物 出土遺物は、土師器片392点、須恵器片16点、土製品2点及び混入した弥生土器片1点である。覆土中から第36図1の土師器の坏、15の須恵器の坏、16の須恵器の甕、17、18の管状土甕、東コーナーから北東壁にかけての覆土上層より2、3の土師器の坏、5、8の高台付坏、9、11、12の皿、14の甕、中央部南寄りの覆土中層から1の坏、7の高台付坏、10の皿がまとまって出土している。南東壁中央部の覆土中層から6の高台付坏、南西壁際の床面直上から4の高台付坏がそれぞれ出土している。そのうち、2、4、7、10は正位の状態、5、9は逆位の状態それぞれ出土している。

所見 出土遺物のほとんどが覆土上層から出土している。時期は、遺構の形態や出土遺物から10世紀後葉と思われる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	土師器 坏	A [11.8]	底面から1縁部にかけての破片。 平底。体部から1縁部にかけてわずかに内傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。内面へラ削き。内面褐色処理。底部回転糸切り。	砂粒・長石 に多い褐色 普通	P82 60% 覆土中層 遺構「加」
		B 3.0				
		C 6.2				
2	土師器 坏	A 12.4	底面から1縁部にかけての破片。 平底。体部から1縁部にかけてわずかに内傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。内面へラ削き。内面褐色処理。底部回転糸切り。	砂粒・長石・スコリア に多い褐色 普通	P84 70% 覆土上層
		B 4.0				
		C 6.0				
3	土師器 坏	A [13.6]	底面から1縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部にかけてわずかに内傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。内面へラ削き。内面褐色処理。底部回転糸切り。	砂粒・長石・スコリア に多い褐色 普通	P85 40% 覆土上層
		B 3.8				
		C 6.2				
4	高台付坏 土師器	A [13.6]	高台部から口縁部にかけての破片。 高台部は長く「ハ」の字状に開く。 体部は下端に踵を持ち、外傾して立ち上がり口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部外面横ナデ。内面へラ削き。内面褐色処理。体部下端へラ削り。底部回転糸切り。高台貼付。	砂粒・長石・雲母・スコリア に多い褐色 普通	P87 75% 覆土床直 遺構「新家」
		B 5.2				
		D 8.3				
		E 1.7				
		C 6.2				
5	高台付坏 土師器	A 12.6	1縁部・部欠損。平底。高台部は長く「ハ」の字状に開く。体部から口縁部にかけて内傾して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。高台貼付。	砂粒・長石・スコリア 黄褐色 普通	P88 85% 覆土上層
		B 5.9				
		D 7.0				
		E 1.7				
		C 6.2				
6	高台付坏 土師器	A 15.6	1縁部と高台部・部欠損。高台部は長く「ハ」の字状に開く。体部は内傾して立ち上がり、1縁部はわずかに外反する。	1縁部・体部横ナデ。体部下位回転糸切り。高台貼付。	砂粒・長石・石英・スコリア に多い褐色 浅黄褐色 普通	P89 70% 覆土中層
		B 6.3				
		D 8.8				
		E 2.3				
		C 6.2				
7	高台付坏 土師器	A [14.0]	体部から1縁部にかけての破片。 高台欠損。体部は内傾して立ち上がり、1縁部は外傾する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。高台貼付。	砂粒・長石・石英・雲母 に多い褐色 普通	P90 60% 覆土中層 体部外面横ナデ
		B (4.0)				
		E (0.5)				
8	高台付坏 土師器	B (3.8)	高台部から体部にかけての破片。 高台部は長く「ハ」の字状に開く。 体部は内傾して立ち上がる。	体部横ナデ。高台貼付。	砂粒・長石・石英・雲母 に多い褐色 普通	P91 20% 覆土上層
		B 8.0				
		E 2.3				
9	皿 土師器	A 10.9	平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア に多い褐色 普通	P92 100% 覆土上層
		B 2.6				
		C 8.6				
10	皿 土師器	A 11.4	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア に多い褐色 普通	P93 100% 覆土中層
		B 2.8				
		C 8.5				
11	皿 土師器	A [11.1]	底面から1縁部にかけての破片。 平底。体部から1縁部にかけて外傾して立ち上がる。	1縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア に多い褐色 普通	P94 20% 覆土上層
		B 1.9				
		C 7.5				
12	皿 土師器	A [9.6]	底面から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・雲母・スコリア に多い褐色 普通	P95 20% 覆土上層
		B 2.6				
		C [3.0]				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色割・焼成	備考
第36図 13	甕 土師器	A [25.0] B (4.5)	頸部から11線部にかけての破片。 口縁部は大きく外反し、11線部は 外上方向につまみ上げられている。	11線部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P96 覆土中 5%
14	甕 土師器	B (6.9) C (8.3)	底部から体部下位部、平底。体部 は外傾して立ち上がる。	体部内面ヘラナデ、外面縦位のヘ ラ磨き。底部木突痕。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	P97 覆土上層 5%
15	坏 須恵器	A [13.5] B (3.9)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から11線部にかけて外傾して 立ち上がる。	11線部・体部横ナデ、ロクロナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P98 覆土中 5%

16は須恵器の甕片で、平行明きが施されている。

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第36図7	管状上蓋	4.1	1.1	—	0.4	3.6	覆土中	D P3 100%
16	管状上蓋	2.9	1.2	—	0.2	2.7	覆土中	D P4 50%

第17号住居跡（第37図）

位置 調査区南東部，B2c区。

重複関係 本跡は第18号住居跡を掘り込み、第15号住居跡によって掘り込まれていることから、第18号住居跡よりも新しく、第15号住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸(4.60)m，短軸4.40mの方形である。

主軸方向 N-56°-E

壁 壁高35~45cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、出入口から竈にかけての中心部が踏み固められている。

ピット P₁は径42cmの円形、深さ25cmで、出入口施設に伴うピットである。

竈 北東壁に構築されている。天井部と両袖部はほとんど残存していないが、北東側に袖の痕跡と北西側に袖部の補強材に使用したと思われる平石が直立した状態でみつまっている。規模は煙道部から焚き口部まで114cm，最大幅59cm，壁外への掘り込みは50cmである。火床面は床面を掘り窪めておらず、火熱を受けて部分的に赤変した面がみられる。煙道は外傾して立ち上がり、火熱を受けて赤変している。

覆土層解説

- 1 相 色 焼土粒子少量
- 2 暗 褐色 炭化粒子、ローム粒子少量
- 3 暗 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量

覆土 掘り込みが浅いため、覆土はほとんど残っていない。

土層解説

- 1 暗 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム小ブロックや草、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗 褐色 ローム粒子多量

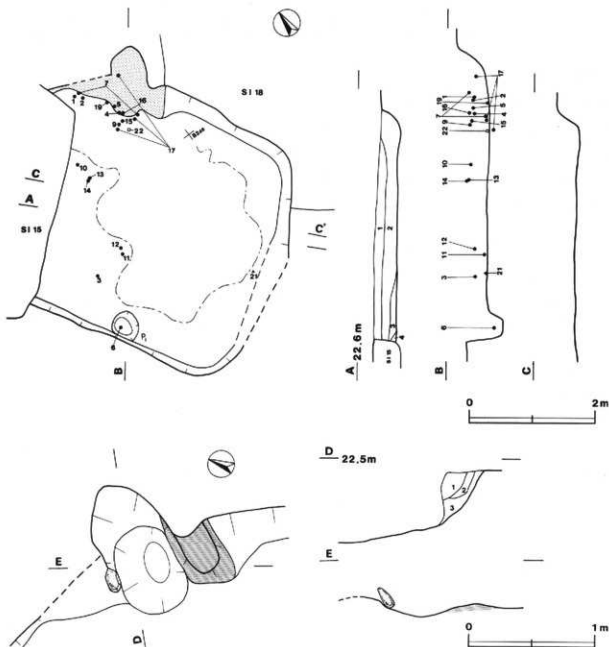
遺物 出土遺物は、土師器片285点、須恵器片1点、石製品1点及び混入した弥生土器片1点である。覆土中から第38図7の高台付坏、20の甕、竈付近の覆土中層から1、2の坏、4、5、9の高台付坏、15、16の皿、同じく覆土下層から7の高台付坏、22の砥石、同じく床面直上から17、19の甕、中央部北西寄りの覆土中層から10の皿、13、14の皿、中央部西寄りの中層から3の高台付坏、12の皿、下層から11の皿、南東壁中央部の下層から21の須恵器甕、P₁内から6の高台付坏がそれぞれ出土している。そのうち、3、5、12が正位の

状態で，4，6が斜位の状態ですぐ出土している。

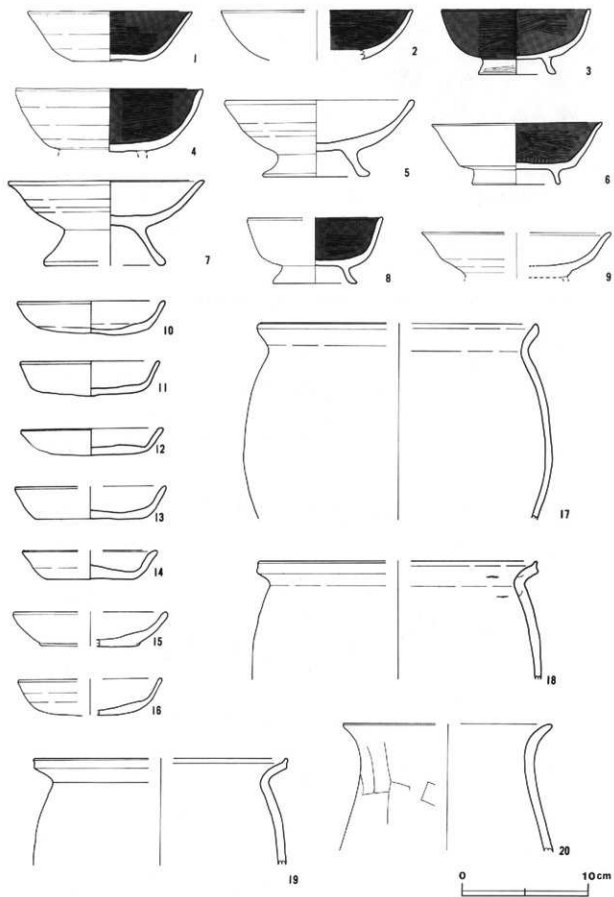
所見 出土遺物のほとんどが覆土上層から出土している。時期は，遺構の形態や出土遺物から10世紀後葉と思われる。

第17号住居跡出土遺物観察表

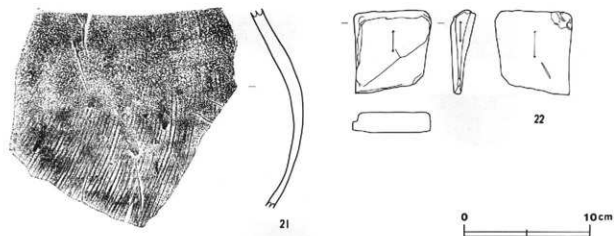
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	坏 土師器	A 13.2 B 4.0 C 5.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内 壁して立ち上がり，口縁部はわず かに外傾する。	口縁部・体部外面横ナズ，内面へ ラ磨き。内面黒色処理。体部下端 回転へラ削り。底部外面ナズ。	砂粒・長石・スコ リア 浅黄色 普通	P98 覆土中層 70%
2	坏 土師器	A [15.0] B (4.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内壁して立ち上がり，口縁 部はわずかに外反する。	口縁部・体部外面横ナズ，内面へ ラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P99 15% 覆土中層



第37図 第17号住居跡実測図



第38图 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第39図 第17号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 3	高台付 土 師 器	A 11.7 B 5.2 D 6.0 E 1.3	高台部は「ハ」の字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部から高台部にかけての内・外面へラ磨き並びに黒色処理。高台貼付。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P100 100% 覆土中層
4	高台付 土 師 器	A 14.9 B (4.8)	高台部剝離。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部外面横ナデ。内面へラ磨き。内面黒色処理。高台貼付。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄色 普通	P101 65% 覆土中層
5	高台付 土 師 器	A 14.7 B 6.1 D 8.2 E 2.0	高台部は「ハ」の字状に長く開く。体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。高台貼付。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄色 普通	P102 100% 覆土中層
6	高台付 土 師 器	A 13.4 B 5.0 D 6.8 E 1.1	口縁部一部欠損。高台部は直線的に開く。体部下端に稜を持ち、体部は外傾して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部・体部外面横ナデ。内面へラ磨き。内面黒色処理。高台貼付。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P103 85% P:覆土中
7	高台付 土 師 器	A 15.5 B 6.7 D [6.4] E 2.9	口縁部と高台部一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部横ナデ。高台貼付。	砂粒・長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P104 70% 覆土下層
8	高台付 土 師 器	A [10.6] B 5.2 D 6.6 E 1.1	口縁部と体部一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部外面横ナデ。内面へラ磨き。内面黒色処理。高台貼付。	砂粒・長石・石英 灰白色 普通	P105 40% 覆土中
9	高台付 土 師 器	A [15.0] B (3.6)	体部から口縁部にかけての破片。高台剝離。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。高台貼付。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P106 20% 覆土中層
10	Ⅲ 土 師 器	A 11.6 B 2.8 C 3.7	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部・体部内・外面横ナデ。底部回転へラ切り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P68 70% 覆土中層
11	Ⅲ 土 師 器	A 10.9 B 2.7 C 8.2	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転へラ切り。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P107 100% 覆土下層
12	Ⅲ 土 師 器	A 11.0 B 2.2 C 6.8	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底部回転へラ切り。	砂粒・長石・スコリア にぶい黄褐色 普通	P108 75% 覆土中層
13	Ⅲ 土 師 器	A [11.8] B 2.5 C 8.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底部回転へラ切り。	砂粒・長石・スコリア 灰白色 普通	P109 30% 覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
14	土師器 蓋	A [10.5] B 2.3 C 7.0	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転ハ タ切り。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 浅黄褐色 普通	P110 25% 覆土中層
15	土師器 上脚器	A [12.0] B 2.8 C [7.6]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部にかけてわ ずかに内傾して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底部回転ハ タ切り。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にふいね色 普通	P111 20% 覆土中層
16	土師器 上脚器	A [11.1] B 2.9 C [6.5]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内傾気味に立ち上 がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転ハ タ切り。	砂粒・長石・石英・ スコリア 浅黄褐色 普通	P112 10% 覆土中層
17	土師器 上脚器	A [22.0] B (15.1)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり、口縁 部は外反する。口唇部は上方向に つまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にふいね色 普通	P113 15% 床底
18	土師器 蓋	A [22.2] B (9.4)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり、口縁 部は外反する。口唇部は上方向に つまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 緑色 普通	P114 5% 覆土中
19	土師器 上脚器	A [19.7] B (8.3)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり、口縁 部は外反する。口唇部は上方向に つまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 ヘラナデ。外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 緑色 普通	P115 5% 床底
20	土師器 上脚器	A [16.4] B (10.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり、口縁 部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 ナデ。外面縦位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英 緑色 普通	P116 5% 覆土中

第39図21は須臾器の残片で、平行印きが施され、肩部に自然軸がかかっている。

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第39図22	銅行	6.6	6.1	2.0		78.8	凝灰岩	電科遺骨土層	Q10 30%

第18号住居跡 (第40図)

位置 調査区南東部, B2d区。

重複関係 本跡は第17号住居跡によって掘り込まれていることから、第17号住居跡よりも古い。

規模と平面形 北東側は調査区域外に延びているため、規模や平面形は明確ではないが、検出された壁や床面から、一辺が4.00m程の方形と推定される。

主軸方向 N-38°-E

壁 壁高25~60cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、出入口から竈にかけての中心部が踏み固められている。

ピット P₁は長径78cm、短径53cmの楕円形、深さ32cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化した微炭
- 2 暗褐色 炭化物微量、塵沼パミス微量
- 3 暗褐色 塵沼パミス微量

覆土 4層からなる自然堆積である。土層4は本跡の床面にあたる。

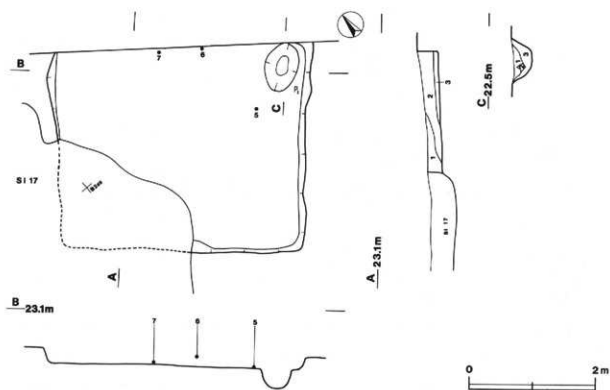
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化した微炭・塵沼パミス微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化した微炭
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・塵沼パミス多量、炭化物微量

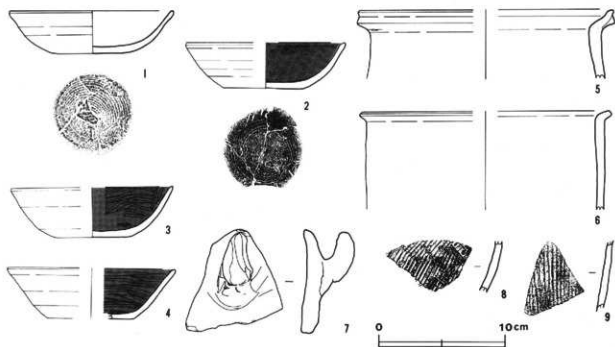
遺物 出土遺物は、土師器片159点、須臾器片8点である。覆土中から第41図2, 3, 4の土師器の坏, 6の

堯, P₁付近の床面直上から5の寛, 竈付近の床面直上から7の甌の把手がそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から9世紀後葉と思われる。



第40図 第18号住居跡実測図



第41図 第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表

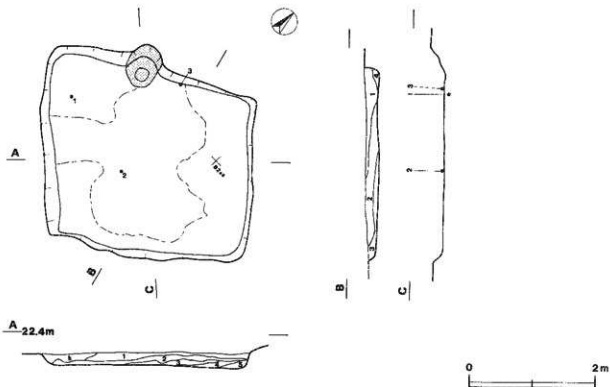
図物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	坏土師器	A 12.9 B 3.3 C 6.1	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英 浅黄褐色 普通	P117 覆土中 2次焼成 60%
2	坏土師器	A [12.5] B 3.7 C 6.3	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部外面横ナデ。内面黒色処理。体部下端回転ヘラ削り。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英 灰白色 普通	P116 覆土中 2次焼成 40%
3	坏土師器	A [12.8] B 3.4 C 5.8	底部から口縁部片。平底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部外面横ナデ。内面ヘラ削り。内面黒色処理。体部下端回転ヘラ削り。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英 雲母・スコリア 灰白色 普通	P119 覆土中 35%
4	坏土師器	A [13.1] B 4.0 C [6.5]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。内面ヘラ削り。内面黒色処理。体部下端及び底部回転ヘラ削り調整。	砂粒・長石・石英 雲母 灰白色 普通	P120 覆土中 30%
5	甕土師器	A [20.0] B (5.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は外上方向につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。外面ナデ。	砂粒・長石・石英 雲母・スコリア 褐色 普通	P121 床直 5%
6	甕土師器	A [19.4] B (7.8)	体部から口縁部片。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は短く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。外面ヘラ削りナデ。	砂粒・長石・石英 雲母・スコリア 浅黄褐色 普通	P122 覆土中 5%
7	甕土師器		把手片。把手は外上方を向く。	把手は体部外面に貼付接合ナデ。	砂粒・長石・石英 雲母・スコリア 褐色 普通	P123 床直 5%

8, 9は須恵器の甍片で、共に平行叩きが施されている。

第19号住居跡 (第42図)

位置 調査区南東部, B2c区。

規模と平面形 長軸3.40m, 短軸3.30mの方形である。



第42図 第19号住居跡実測図

主軸方向 N-43°-W

壁 壁高20~25cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、出入り口から竈にかけての中心部が踏み固められている。

竈 北西壁に構築されている。天井部と両袖部はほとんど残存しておらず、掘り方のみを確認した。規模は煙道部から焚き口部まで70cm、最大幅60cm、壁外への掘り込みは23cmである。火床面は床面を4cm掘り窪めており、火熱を受けて部分的に赤変した面がみられる。煙道は外傾して立ち上がる。

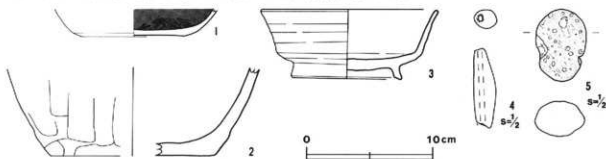
覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子多量、炭化物微量
- 4 黒褐色 ローム粒子多量、粘土粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 出土遺物は、土師器片119点、須恵器片3点、土製品1点、石製品1点及び混入した弥生土器片2点である。覆土中から第43図4の管状土鏝、5の軽石、西コーナー付近の床面直上から1の土師器坏、中央部の床面直上から2の甕、竈東側の床面直上から3の須恵器高台付坏が斜位の状態でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から8世紀後葉と思われる。



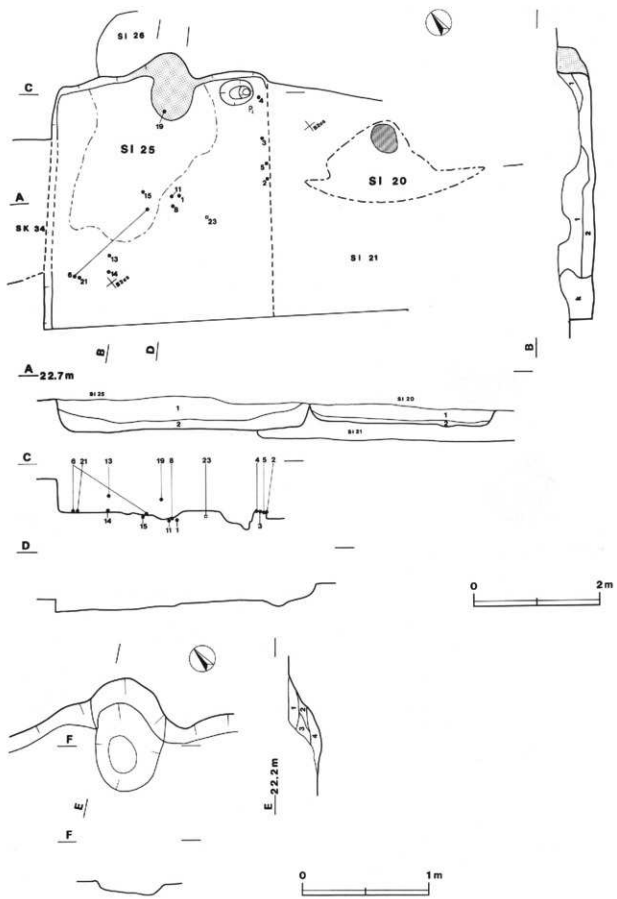
第43図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第43図1	土師器坏	B (2.1) C 8.1	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は内傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。体部内面へう磨き。内面黒色処理。体部下端及び底部回転へう削り調整。	砂粒・長石・雲母 淡黄褐色 普通	P124 床直	50%
2	甕 土師器	B (7.0) C [13.1]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内傾気味に立ち上がる。	体部内面へうナデ。外面縦位のへう削り。	砂粒・長石・石英・ スコリア ぶい・橙色 普通	P125 床直	5%
3	高台付坏 須恵器	A 13.7 B 5.7 D 8.5 E 1.1	口縁部一部欠損。高台部は短く「ハ」の字状に開く。体部下位に腰を持ち、体部から口縁部にかけてわずかに外反して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。体部外面下端回転へう削り。底部回転へう削り。高台貼付。	砂粒・長石 灰色 普通	P126 床直	93%

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第43図4	管状土鏝	4.3	1.2	—	0.3	3.5	覆土中	DP5 90%

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第43図5	軽石	3.8	2.6	1.9	—	4.0	軽石	4区覆土中 Q11 100%	



第44图 第20・25号住居跡実測图

第20号住居跡（第44図）

位置 調査区南東部，B2d区。

重複関係 本跡は第21、26号住居跡を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と平面形 一边が2.90mの方形と推定される。土層断面に一部床面が確認されたので，そこから本跡の規模と平面形を推定した。

主軸方向 不明

壁 壁高は25cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦であるが，部分的である。踏み固められた床面がみつまっている。

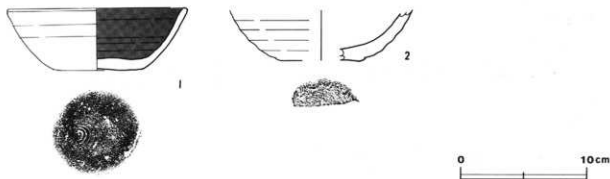
覆土 2層からなる自然堆積である。土層2が床面になる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・白色粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量

遺物 出土遺物は，土師器片56点と須恵器片6点である。覆土中から第45図2の土師器坏が出土している。

所見 本跡は，土層断面とその周辺から床面の一部が確認されただけである。本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から10世紀中葉と思われる。



第45図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	坏 土師器	A 14.1	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて内傾気味に立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き。内面黒色処理。体部下端及び底面回転糸切り後，回転へラ削り調整。	砂粒・長石・雲母 淡赤褐色 普通	P127 85% 覆土中 2次焼成
		B 4.8				
		C 7.2				
2	坏 土師器	B [4.1]	底面から体部片。平底。体部は内傾して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底面回転糸切り。ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P128 10% 覆土中 2次焼成
		C [6.3]				

第22号住居跡（第46図）

位置 調査区南東部，B2e区。

重複関係 本跡は第21号住居跡を掘り込み，第36号土坑に掘り込まれていることから，第21号住居跡よりも新しく，第36号土坑よりも古い。

規模と平面形 本跡の南側3分の2は調査区域外に延びており，規模や平面形は明確ではないが，一边が3.10m程の方形と推定される。

主軸方向 不明

壁 壁高は15～45cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、踏み固められた面はみられない。

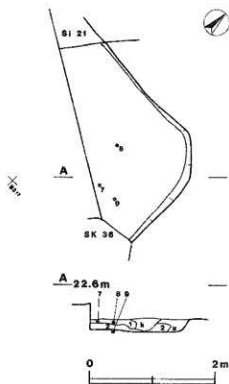
覆土 2層からなる自然堆積である。

土層観察

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒中程度

遺物 出土遺物は、土師器片75点、須恵器片3点及び混入した弥生土器片3点である。覆土中から第47図1～6の土師器片、7、8の甕、東横寄りの床面から9の瓶がそれぞれ出土している。

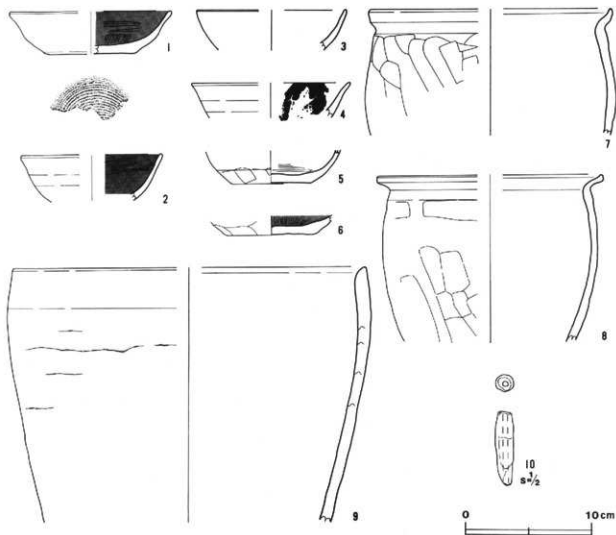
所見 本跡の時期は、出土遺物から9世紀後葉と思われる。



第46図 第22号住居跡実測図

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	坏 土師器	A [12.6] B 3.4 C [6.9]	腹部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部外面横ナデ。内面ヘラ削ぎ。内面黒色処理、腹部未切り。	砂粒・長石・石英 に多い褐色 普通	P146 20% 覆土中
2	坏 土師器	A [11.0] B (3.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部外面横ナデ。体部内面ヘラ削ぎ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P147 15% 覆土中 2次焼成
3	坏 土師器	A [11.6] B (3.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部にかけて内傾して立ち上がる。	口縁部・体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P148 15% 覆土中 2次焼成
4	坏 土師器	A [12.6] B (2.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア に多い褐色 普通	P149 5% 確認面 内面埋付者
5	坏 土師器	B (2.6) C 6.2	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内傾気味に立ち上がる。	体部外面横ナデ。内面ヘラ削ぎ。体部下端及び底部手持ちヘラ削り調整。	砂粒・長石・石英・ スコリア 淡黄褐色 普通	P150 30% 覆土中 2次焼成
6	坏 土師器	B (1.5) C 7.0	底部から体部下位にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。体部は外傾して立ち上がる。	内面ヘラ削ぎ。内面黒色処理。体部下端及び底部手持ちヘラ削り調整。	砂粒・長石・石英・ スコリア に多い褐色 普通	P151 5% 覆土中 2次焼成
7	甕 土師器	A [19.2] B (10.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ スコリア に多い褐色 普通	P152 5% 確認面
8	甕 土師器	A [17.7] B (13.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア に多い褐色 普通	P153 5% 覆土中



第47図 第22号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 9	甎 土器	A [27.8] B (20.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は外傾して立ち上がり、口縁 部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 ヘラナデ、外面ナデ。輪襷取。	砂粒・長石・石英・ スコリア にふい・焼色 普通	P154 覆土中 10%

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第47図10	管状土葺	4.0	1.0	—	0.3	2.8	覆土中	DP7 80%

第25号住居跡 (第44図)

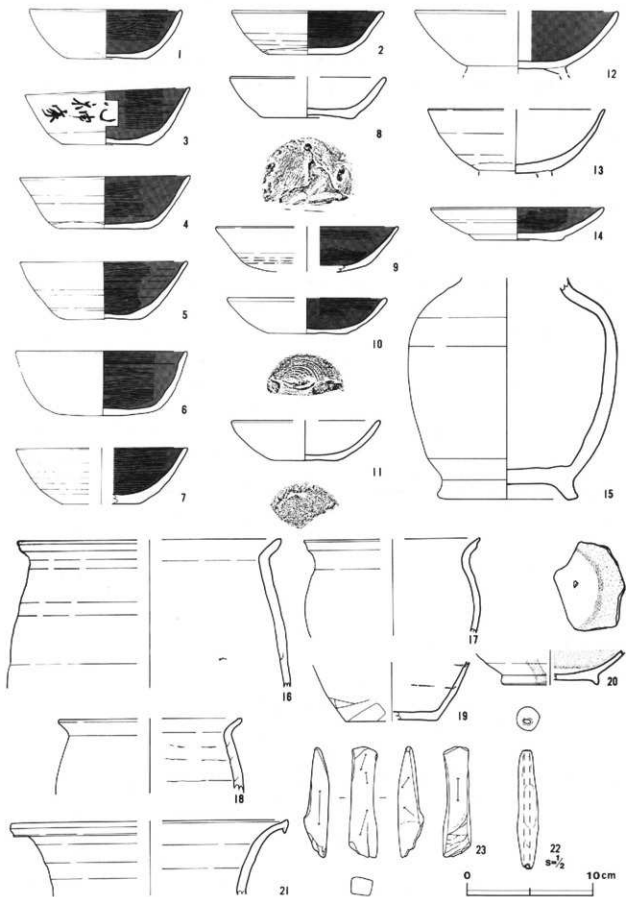
位置 調査区南東部、B2c区。

重複関係 本跡は第21、26号住居跡及び第34号土坑を掘り込んでいることから、これらの遺構よりも新しい。

規模と平面形 2軒の住居跡と重複し、南西側は玉川の流れによって削られており、規模や平面形は明確ではないが、残存している壁や床から、一辺が3.85mの方形と推定される。

主軸方向 N-36°-E

壁 壁高は25~50cmで、外傾して立ち上がる。



第48图 第25号住居跡出土遺物実測図

床 全体的に平坦で、竈から中心部にかけて踏み固められ、部分的に熱を受けて赤変した面がみられる。

ピット Pは長径55cm、短径37cmの楕円形、深さ29cmで、性格は不明である。

竈 北東壁中央部に構築されている。一部耕作による攪乱を受けている。天井部と両袖部は残存しておらず、掘り方の確認した。規模は煙道部から焚き口部まで90cm、両袖最大幅50cm、壁外への掘り込みは36cmである。火床面は床面を9cm掘り窪めており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 3 極暗褐色 焼土粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土大ブロック多量、炭化物・ローム粒子中量

覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量

遺物 出土遺物は、土師器片734点、須恵器片22点、灰釉陶器片1点、土製品1点、石製品1点及び混入した弥生土器片11点である。覆土中から第48図7、9、10の土師器杯、12、13の高台付杯、16～18の甕、20の灰釉陶器の皿、22の管状土鉢、中央部東寄りの覆土下層から2、3、4、5の土師器杯、中央部の床面から1、6、8、11の杯、15の長頸瓶、23の砥石、中央部西寄りの床面から14の皿、21の須恵器の甕、竈付近の床面から19の甕がそれぞれ出土している。そのうち、2、3、12は正位の状態、5は逆位の状態、4は斜位の状態それぞれ出土している。

所見 本跡は、出土した遺物の大部分が二次焼成を受けていることや、床面の一部が熱を受けて赤化していることから焼失家屋と思われる。本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から9世紀後葉と思われる。

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	杯 土師器	A 13.0	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部下層回転ヘラ削り、底部中央へラ削り調整。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P83 90% 床面 2次焼成
		B 4.6				
		C 7.0				
2	杯 土師器	A 11.8	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部下層回転ヘラ削り、底部中央へラ削り調整。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P168 98% 覆土下層 2次焼成
		B 3.5				
		C 5.8				
3	杯 土師器	A 13.0	平底。体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部下層及び底部回転ヘラ削り調整。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P169 100% 覆土下層 2次焼成 磁器「口神裏」
		B 4.6				
		C 7.0				
4	杯 土師器	A 13.4	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部下層及び底部回転ヘラ削り調整。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P170 83% 覆土下層 2次焼成
		B 4.2				
		C 8.0				
5	杯 土師器	A 13.2	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけてわずかに内彎して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部下層及び底部回転ヘラ削り調整。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P171 80% 覆土下層
		B 4.1				
		C 6.0				
6	杯 土師器	A 13.4	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。口縁部内面に稜を持つ。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部一定方向の手持ちへラ削り調整。	砂粒・長石・石英・スコリア 淡黄褐色 普通	P172 70% 床底 2次焼成
		B 5.1				
		C 7.5				
7	杯 土師器	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部にかけてわずかに内彎して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部下層及び底部回転ヘラ削り調整。	砂粒・長石・石英・スコリア 淡黄褐色 普通	P173 45% 覆土中 2次焼成
		B 4.4				
		C [6.0]				
8	杯 土師器	A [12.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部にかけてわずかに内彎して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P174 40% 床底 2次焼成
		B 3.3				
		C 7.4				

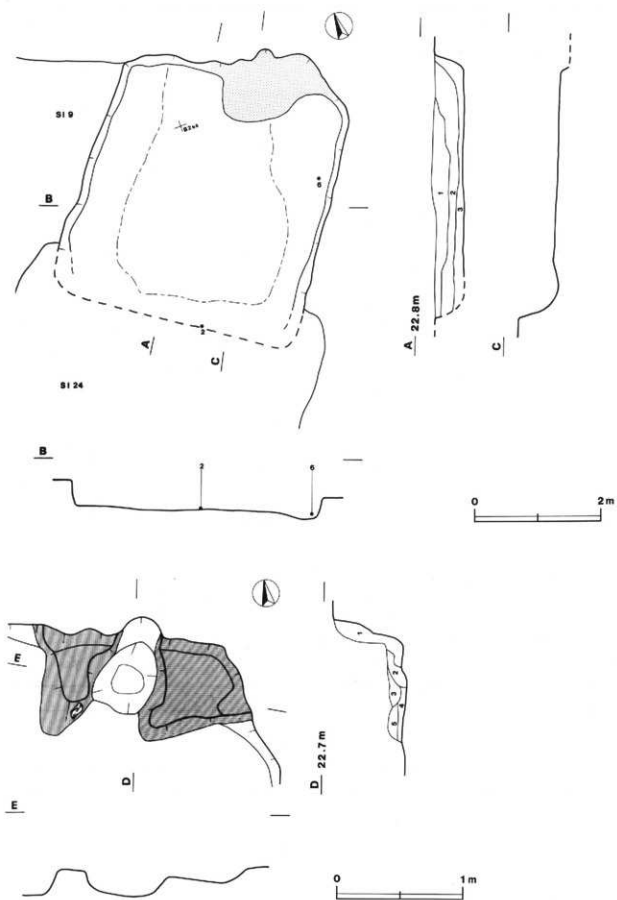
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・焼成	備考
第18回 9	坏 七脚器	A [14.3] B 3.7	体部から1脚部にかけての破片。 体部から1脚部にかけてわずかに 内湾して立ち上がる。	1脚部・体部外面横ナデ。内面へ ラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・ 雲母 浅黄褐色 普通	P175 30% 覆土中
10	坏 七脚器	A [12.5] B 2.9 C 6.0	底部から1脚部にかけての破片。 体部から1脚部にかけてわずかに 内湾して立ち上がる。	1脚部・体部外面横ナデ。内面へ ラ磨き。内面黒色処理。底部に 糸切り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい黄褐色 普通	P176 15% 確認面
11	坏 上脚器	A [11.6] B 3.2 C 5.0	底部から1脚部にかけての破片。 平底。体部から1脚部にかけてわ ずかに内湾して立ち上がる。	1脚部・体部横ナデ。底部四角 切り。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア 浅黄褐色 普通	P177 15% 床直 2次焼成
12	高台付坏 十脚器	A [16.1] B (4.9)	底部から1脚部にかけての破片。 高台割離。体部から1脚部にか けて内湾して立ち上がる。	1脚部・体部外面横ナデ。内面へ ラ磨き。内面黒色処理。薄残存。 高台貼付。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい褐色 普通	P179 30% 覆土中 2次焼成
13	高台付坏 上脚器	A [14.0] B (5.1)	底部から1脚部にかけての破片。 高台割離。体部から1脚部にか けて内湾して立ち上がる。	1脚部・体部外面横ナデ。内面へ ラ磨き。内面黒色処理一部残存。 高台貼付。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P180 20% 覆土中 2次焼成
14	土 上脚器	A 13.8 B 2.6 C 7.0	底部から1脚部にかけての破片。 平底。体部から1脚部にかけて内 湾気味に立ち上がる。	1脚部・体部外面横ナデ。内面へ ラ磨き。内面黒色処理。体部下 端及び底面凹状へラ磨き調整。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P178 75% 床直
15	長頸瓶 上脚器	B (17.2) D H.1 E 1.2	頸部から1脚部欠損。高台部は短 く「ハ」の字状に開き、角状である。 体部から1脚部にかけて内湾 して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。高台貼付。	砂粒・長石・石英・ 雲母 褐色 普通	P181 80% 床直 2次焼成
16	土 上脚器	A [20.6] B (11.7)	体部から1脚部破片。体部は内湾し て立ち上がり、1脚部は短く外反 する。	1脚部・体部横ナデ。ロクロナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 浅黄褐色 普通	P182 30% 覆土中
17	甕 上脚器	A [13.8] B (7.5)	体部から1脚部破片。体部は内湾し て立ち上がり、1脚部は外反する。 1脚部は外上方へつまみ上げら れている。	1脚部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい褐色 普通	P183 10% 覆土中 2次焼成
18	甕 上脚器	A [14.3] B (5.9)	体部から1脚部破片。体部は内湾し て立ち上がり、1脚部は短く外反 する。	1脚部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。輪襷状。	砂粒・長石・石英・ にぶい褐色 普通	P184 5% 覆土中 2次焼成
19	甕 上脚器	B [4.6] C (7.3)	底部から体部下位。平底。体部は 内湾して立ち上がる。	体部内面ナデ。体部外面へラ磨き。	砂粒・長石・石英・ スコリア にぶい褐色 普通	P185 20% 床直
20	圓 底輪脚器	B (2.7) D [7.4] E 0.8	底部から体部片。高台は「日」状 をしている。体部はわずかに内湾 しながら外反する。	1脚部・体部横ナデ。底部四角へ ラ磨き調整。体部内・外面一部 灰白。	砂粒・黒色斑点 灰白 良好	P187 5% 覆土中 黒質90号式
21	甕 須臾器	A [21.8] B (3.9)	1脚部破片。1脚部は短く外反して 立ち上がり、1脚部端は幅広い 縁帯を持つ。	1脚部横ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 浅黄褐色 普通	P186 5% 床直

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第18回22	管状七種	6.2	1.2	—	0.3	6.2	覆土中	D18 100%

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第48回23	甕石	8.8	2.4	1.5	—	43.5	凝灰岩	中央部床直	Q12 80%

第27号住居跡(第49回)

位置 洞全区南東部中央、B2b区。



第49图 第27号住居跡実測图

重複関係 本跡は第9号住居跡と第24号住居跡を掘り込んでいるので、これらの遺構よりも本跡の方が新しい。
規模と平面形 2軒の住居跡と重複しており、規模や平面形は明確ではないが、残存している壁や床から、一辺が4.60mの方形と推定される。

主軸方向 N-30°-E

壁 壁高は30~40cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、竈から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北東壁中央部付近に褐色粘土で構築されている。天井部は崩落している。袖部は西側が残存し、東側は崩壊している。規模は煙道部から焚き口部まで79cm、両袖最大幅 [120]cm、壁外への掘り込みは18cmである。袖は芯材に凝灰岩を用い、その周りには褐色粘土を使用して構築されている。袖の内壁は、火熱を受けて赤変硬化している。火床面は床面を5cm掘り窪めており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 極暗褐色 焼土大ブロック・ローム粒子少量
- 2 明黄褐色 褐色粘土多量、焼土中ブロック中量
- 3 明黄褐色 褐色粘土多量
- 4 黒色 炭化物多量、焼土粒子少量
- 5 黒褐色 褐色粘土多量

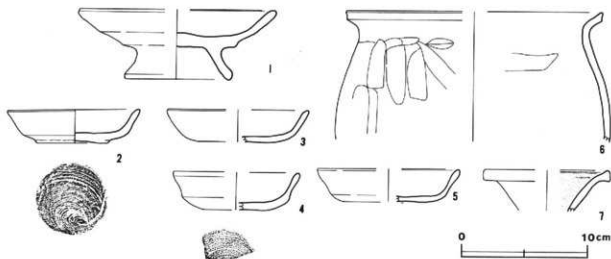
覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・粘土中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土中ブロック少量、焼土小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・粘土小ブロック少量

遺物 出土遺物は、土師器片90点、灰軸陶器片1点及び混入した弥生土器片1点である。覆土中から第50図3~5の土師器皿、7の灰軸陶器の長頸瓶、南西壁付近の床面から2の土師器皿が正位の状態、北東壁付近の床面から6の甕がそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から10世紀中葉と思われる。



第50図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	高内付環 上 師 器	A 115.5	体部から口縁部、部欠損。高台部は「ハ」の字に開き、体部との境に線を持つ。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。高台部付。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P196 履土中
		B 5.5				
		D 8.4				
		E 2.5				
2	土 師 器	A 10.4	平底。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部凹糸切り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P195 床直
		B 2.7				
		C 5.6				
3	土 師 器	A [11.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部ナデ調整。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P200 履土中
		B 2.6				
		C [6.1]				
4	土 師 器	A [10.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部下位に筒い様を持つ。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部凹糸切り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P201 履土中 2次焼成
		B 3.0				
		C [5.0]				
5	土 師 器	A [11.2]	底部から口縁部片。平底。体部下位に筒い様を持つ。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部凹糸切り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通	P202 履土中 2次焼成
		B 2.7				
		C [5.2]				
6	土 師 器	A [20.2]	体部から口縁部片。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は外方向につまみ上げている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。外面縦位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P203 床直
		B (10.2)				
7	長 瀬 瓶 灰 輪 胎 器	A [9.8]	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部に線帯を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。内面灰輪胎輪。	砂粒・長石・石英・オリーブ 黄褐色	P206 履土中
		B (3.3)				

表2 下村田遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁 高 (m)	内 部 装 設				炉・竈	土 器	消 じ 遺 物	備 考		
						壁	土	石	火						
1	A1c	N 56°-W	[方形]	4.90×(2.10)	15-34	平	-	-	-	-	竈	自然	土師器26 (高内付環、高付環)	調査範囲外に属する。	
2	A1g	N 25°-E	長方形	3.65×3.00	5-20	平	4	-	-	1	竈	自然	土師器27 (高内付環、高付環)	S13→木跡	
3	A1h	N 56°-W	方形	3.00×2.95	10-20	平	2	-	-	1	竈	自然	土師器28 (高内付環、高付環)	木跡→S13	
4	A1h	N 55°-W	長方形	4.55×(3.70)	3-70	平	2	-	-	1	竈	自然	土師器29 (高内付環、高付環)	木跡	
5	A1h	N 68°-W	方形	4.00×3.70	7-24	平	-	-	-	2	1	竈	自然	土師器30 (高内付環、高付環)	木跡→SX 2
7	B2a	[N 21°-E]	[方形]	3.85×7.35	5-15	平	-	-	-	4	-	自然	土師器31 (高内付環、高付環)	S18→S100→S151	
8	A2j	N 60°-W	[方形]	2.25×3.25	10-25	平	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器32 (高内付環、高付環)	S17→S100→S152→木跡
9	B2b	[N 27°-E]	[方形]	1.25×(4.00)	20	平	相	-	-	-	-	自然	土師器33 (高内付環、高付環)	木跡→S17→S151→S157	
10	B2b	[N 39°-E]	[方形]	3.20×(2.60)	30	平	相	-	-	2	-	自然	土師器34 (高内付環、高付環)	S19→木跡→S151→S157	
11	A2j	N 45°-W	[方形]	3.80×(2.50)	20-35	平	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器35 (高内付環、高付環)	
12	B2b	N 44°-E	長方形	3.20×[4.00]	-	平	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器36	S112→S114→木跡
13	B2b	N 57°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器37 (高内付環、高付環)	木跡→S111→S112
14	B2b	N 57°-E	長方形	4.00×(2.90)	15-25	平	-	-	-	2	-	竈	自然	土師器38 (高内付環、高付環)	S113→木跡→S117→S15
15	B2c	N 41°-W	方形	3.90×3.60	30-35	平	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器39 (高内付環、高付環)	S114→S117→木跡
17	B2c	N 56°-E	[方形]	4.60×4.40	35-45	平	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器40 (高内付環、高付環)	S118→木跡→S115
18	B2a	[N 38°-E]	[方形]	3.25×4.00	21-60	平	-	-	-	1	-	自然	土師器41 (高内付環、高付環)	木跡→S117	
19	B2c	N 43°-W	方形	3.40×3.30	20-25	平	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器42 (高内付環、高付環)	木跡→S117→S115
20	B2a	不明	[方形]	2.90×(2.90)	25	平	-	-	-	-	-	自然	土師器43 (高内付環、高付環)	S15→S11→S152→木跡	
21	B2a	N 45°-E	[方形]	2.70×(4.80)	30	平	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器44 (高内付環、高付環)	S15→木跡→S153
22	B2c	不明	[方形]	1.70×3.10	15-45	平	-	-	-	-	-	自然	土師器45 (高内付環、高付環)	S121→木跡→S136	
23	B2c	N 40°-E	[方形]	2.60×3.30	20	平	-	-	-	5	-	竈	自然	土師器46 (高内付環、高付環)	
24	B2b	N 53°-W	[方形]	5.45×(4.30)	15-45	平	3	-	-	-	-	竈	自然	土師器47 (高内付環、高付環)	S19→S119→木跡→S120
25	B2c	N 36°-E	[方形]	3.85×(3.50)	25-31	平	-	-	-	1	-	自然	土師器48 (高内付環、高付環)	S120→S121→木跡→S122	
26	B2a	[N 47°-E]	[方形]	1.15×(7.70)	25-35	平	-	-	-	-	-	自然	土師器49 (高内付環、高付環)	S149→S125→S122	
27	B2c	N 30°-E	[方形]	4.60×3.90	35-40	平	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器50 (高内付環、高付環)	S19→S121→木跡

2 土 坑

当遺跡の遺構確認の段階で、土坑を39基（SK-1～39）を確認したが、調査の結果、風倒木痕や近世の攪乱穴を除く土坑33基と墓塚2基を確認した。ほとんどが時期や性格は不明である。ここでは、遺物が出土している土坑について解説をし、その他の土坑については一覧表で記載する。

第2号土坑（第51図）

位置 A1d区。

規模と平面形 長径1.85m、短径1.75mの円形で、深さ30cmである。

長径方向 N-88°-W

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦。

覆土 2層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐 色 黒色粒多量
- 2 黒 褐色 rome粒中量

遺物 出土遺物は、土師器片7点である。中央部の覆土中層から第53図の1の土師器高坏胴部が出土している。

所見 時期は、出土遺物から6世紀初頭と考えられる。

第4号土坑（第51図）

位置 A1f区。

規模と平面形 長径1.58m、短径1.47mの円形で、深さ35cmである。

長径方向 N-37°-E

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦。

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗 褐色 rome粒中量、rome小ブロック少量
- 2 黒 褐色 rome粒中量、焼土粒少量
- 3 暗 褐色 rome粒多量、焼土粒微量

遺物 出土遺物は、土師器片17点で、ほとんど細片である。

所見 本跡の時期と性格は、不明である。

第5号土坑（第51図）

位置 A1g区。

規模と平面形 長径1.60m、短径1.48mの円形で、深さ26cmである。

長径方向 N-56°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 2 褐 色 ローム粒子多量、炭土粒少量
- 3 黒 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量

遺物 覆土中から土師器片15点が出土しているが、ほとんど細片である。

所見 本跡の時期と性格は、不明である。

第6号土坑（第51図）

位置 A1g区。

重複関係 第4号住居跡によって掘り込まれているため、本跡の方が古い。

規模と平面形 長径2.32m、短径2.16mの円形で、深さ37cmである。

長径方向 N-0°

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

ピット P₁は径30cmの円形である。

覆土 5層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子多量
- 3 褐 色 ローム粒子多量、鹿沼パミス少量
- 4 黒 褐色 ローム粒子中量
- 5 褐 色 ローム粒子多量

遺物 覆土中から土師器片30点と混入した弥生土器片2点が出土している。覆土中から第53図2の土師器坏が出土している。

所見 本跡の時期と性格は、不明である。

第9号土坑（第51図）

位置 A1g区。

重複関係 第27、28号土坑によって掘り込まれているため、これらの遺構よりも本跡の方が古い。

規模と平面形 長径2.05m、短径1.86mのほぼ円形で、深さ55cmである。

長径方向 N-0°

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・鹿沼パミス微量
- 2 黒 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・鹿沼パミス微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・鹿沼パミス微量

遺物 覆土中から土師器片101点が出土している。中央部西寄りの覆土上層から第53図3～5の土師器坏、6の高坏が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀初頭と考えられる。

第10号土坑 (第51図)

位置 A1h₀区。

規模と平面形 長軸2.20m, 短軸2.10mの方形で、深さ28cmである。

長軸方向 N-36°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子多量, 焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化物・ローム大・小ブロック・炭沼バミス少量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭沼バミス中量, 炭化物少量

遺物 出土遺物は、土師器片76点と須恵器片1点である。覆土中から第53図8の高台付坏, 西コーナー付近の中央部西寄りの覆土下層から7の坏, 9の甕が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から9世紀後葉と考えられる。

第12号土坑 (第51図)

位置 A2i₃区。

規模と平面形 長軸1.50m, 短軸1.00mの隅丸長方形で、深さ25cmである。

長軸方向 N-19°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック多量

遺物 出土遺物は、土師器片7点と混入した弥生土器片1点である。南壁付近の底面から第53図10の土師器の高坏が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀初葉と考えられる。

第14号土坑 (第51図)

位置 A2j₁区。

規模と平面形 長径2.15m, 短径1.95mの方形で、深さ22cmである。

長軸方向 N-16°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

覆土 耕作による攪乱を受けているため、ほとんど確認できなかった。

遺物 出土遺物は、土師器片58点で、ほとんど細片である。

所見 本跡の時期と性格は、不明である。

第18号土坑 (第52図)

位置 B2a₁区。

規模と平面形 長軸2.63m, 短軸1.60mの不整長方形で、深さ42cmである。

長軸方向 N-27°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

覆土 2層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭沼バミス多量、ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 植群褐色 ローム粒子・炭沼バミス多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量

遺物 出土遺物は、土師器片37点、須恵器片1点及び混入した弥生土器片1点で、ほとんど細片である。

所見 本跡の時期は、不明である。

第21号土坑 (第52図)

位置 B2g₁区。

規模と平面形 長径2.25m, 短径1.55mの楕円形で、深さ43cmである。

長径方向 N-55°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 植群褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 黒色粒子少量

遺物 出土遺物は、土師器片2点である。覆土中から第53図11の上師器瓶が出土している。

所見 本跡の時期は、不明である。

第30号土坑 (第52図)

位置 B2a₂区。

重複関係 第7号住居跡と第32号土坑を掘り込み、第8号住居跡に掘り込まれていることから、本跡の方が第7号住居跡や第32号土坑より新しく、第8号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸3.10m, 短軸2.03mの長方形で、深さ32cmである。

長軸方向 N-36°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

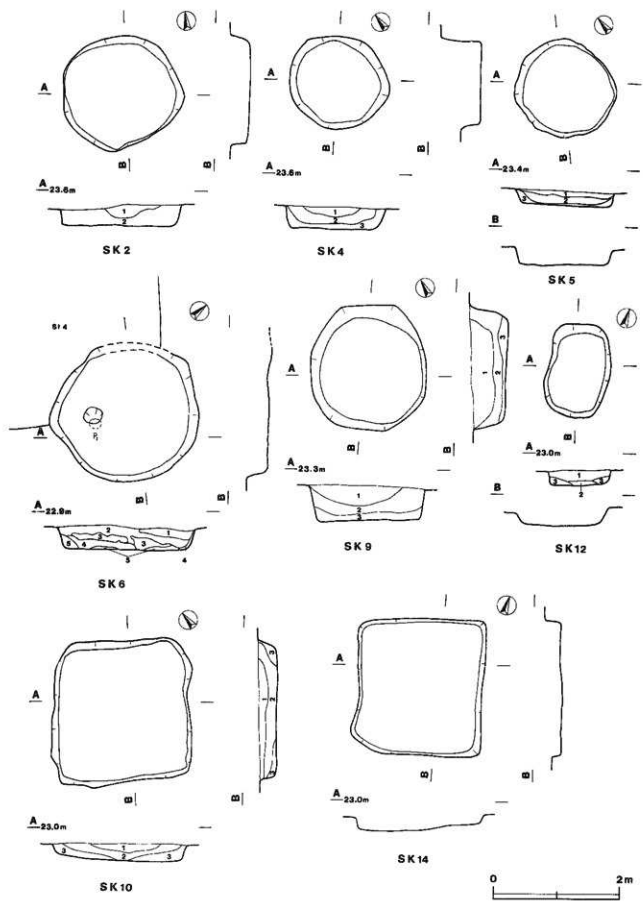
覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

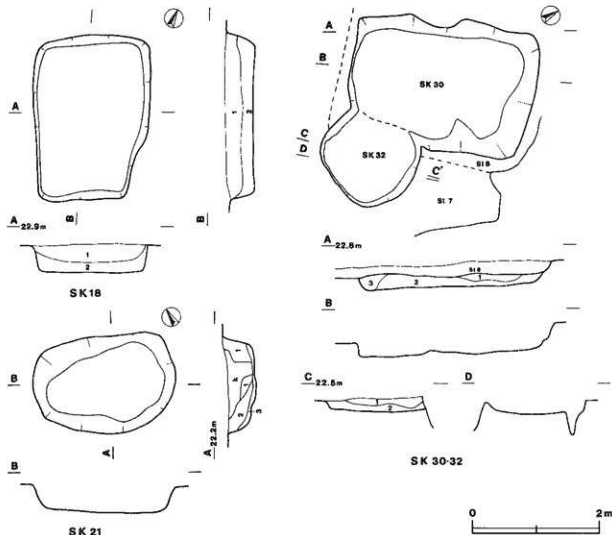
- 1 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子、炭化粒子・炭沼バミス微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック・炭沼バミス多量、炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック微量、炭沼バミス極微量

遺物 出土遺物は、土師器片2点で、いずれも細片である。

所見 本跡の時期と性格は、不明である。



第51图 土坑实测图(1)



第52図 土坑実測図(2)

第32号土坑 (第52図)

位置 B2a区。

重複関係 第7、8号住居跡、第30号土坑に掘り込まれていることから、これらの遺構よりも本跡の方が古い。

規模と平面形 長径1.62m、短径1.45mの楕円形で、深さ20cmである。

長径方向 N-90°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦。

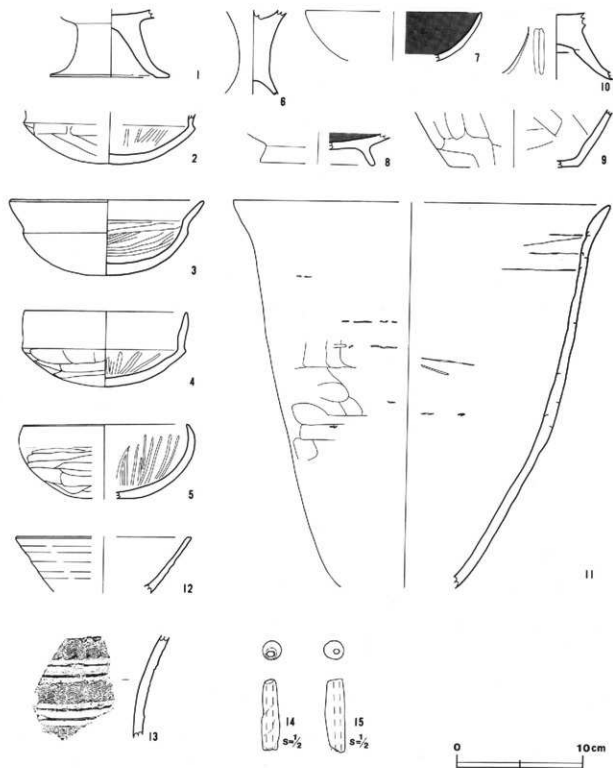
覆土 2層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・炭化種子・炭化バミス微量
- 2 黒褐色 炭土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量

遺物 出土遺物は、土師器片2点と混入した弥生土器片1点で、いずれも細片である。

所見 重複関係や出土遺物から本跡の時期は、6世紀前葉以前と思われる。



第53図 土坑出土遺物実測図

土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	高 土 鉢 器	B (4.8) D 9.5 E 4.3	脚部片。脚部は短くラッパ状に開く。	脚部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 棕色 普通	P207 40% SK-1 覆土中 2次焼成

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	坏 土師器	B (4.1)	底部から体部にかけての破片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。	体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 褐色 普通	P208 30% SK-6履上中
3	坏 土師器	A 15.3 B 6.0	体部から口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は外脣する。	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P209 90% SK-9履上中
4	坏 土師器	A 13.0 B 6.0	体部から口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は外脣気味に直立する。	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P210 70% SK-9履上中
5	坏 土師器	A 13.0 B 5.9	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部にかけて内脣して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 褐色 普通	P211 60% SK-9履上中
6	高 土師器	F (6.7)	頸部片。頸部は細く柱状で「ハ」の字状に開く。	頸部内面ナデ、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P212 10% SK-9履上中
7	坏 土師器	A [14.0] B (3.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部にかけて内脣して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・明赤褐色 普通	P213 10% SK-10履上中 2次焼成
8	高台付坏 土師器	D (2.6) C (9.1) E 1.5	底部片。高台部は「ハ」の字状に開く。	高台貼付。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・スコリア 灰白色 普通	P214 5% SK-10履上中
9	甕 土師器	B (4.6) C [10.2]	底部から体部下位にかけての破片。体部は外脣して立ち上がる。	体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 に灰・赤褐色 普通	P215 5% SK-10履上中
10	高 土師器	B (4.3) E (3.9)	頸部片。頸部は短くラッパ状に開く。	頸部内面ナデ、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 褐色 普通	P216 20% SK-12履上中
11	瓶 土師器	A [25.9] B (30.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は外脣する。	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り後ナデ。 輪積痕。	砂粒・長石・石英 に灰・黄褐色 普通	P217 25% SK-21履上中
12	坏 土師器	A [13.8] B (4.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内脣気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外脣する。	口縁部・体部横ナデ。ロクロナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P218 15% SK-25履上中

13は須恵器製の頸部片で、10本1条の樽波状文が3段みられる。

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)		
第5図4	管状土師	3.3	1.0	—	0.4	SK-37履上中	D P10 50%
15	管状土師	3.9	1.2	—	0.3	SK-37履上中	D P11 50%

表3 下村田遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長さ(m)×幅(m)	深さ(m)					
1	A1d	N-25°-W	不整形丸長方形	1.13 × 0.75	38	外傾	平坦	自然	土師器2須恵器2	
2	A1d	N-88°-W	円形	1.85 × 1.75	30	垂直	平坦	自然	土師器9(高坏)	古墳時代
3	A1e	N-54°-W	不整形長方形	1.33 × 1.00	10	外傾	平坦	自然	土師器2	
4	A1f	N-37°-E	円形	1.58 × 1.47	35	垂直	平坦	自然	土師器17	
5	A1h	N-56°-E	円形	1.60 × 1.48	26	外傾	平坦	自然	土師器15弥生土器2	
6	A1g	N-0°	円形	2.32 × 2.16	37	外傾	平坦	自然	土師器30(坏)弥生土器2	本館-S1(古墳時代)

上段番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	坑面	覆土	出 上 遺 物	備 考
				短径(m)×短径(m)	深さ(cm)					
7	A2g1	N-70°-E	長 方 形	1.30 × 0.75	60	外傾	平坦	自然	土師器 2	芋穴
8	A1g1	N-42°-W	不 定 形	1.80 × 1.05	21	外傾	平坦	自然		
9	A2g	N-0°	円 形	2.05 × 1.85	55	外傾	平坦	自然	土師器101 (坏, 高坏) 陶器 1	6号→36号 SK5A時代
10	A1h	N-36°-E	方 形	2.20 × 2.10	28	外傾	平坦	自然	土師器7(坏, 高坏) 土師器1	9世紀後半
11	A2i	N-43°-W	楕 円 形	1.20 × 1.05	38	外傾	平坦	自然	土師器10	芋穴
12	A2i	N-19°-W	楕 円 長 方 形	1.50 × 1.00	25	外傾	平坦	自然	土師器 7 (高坏) 弥生土器 1	古墳時代
13	A2i	N-10°-W	楕 円 長 方 形	2.15 × 0.78	28	外傾	平坦	自然	土師器 6	
14	A2j	N-16°-W	方 形	2.15 × 1.95	22	外傾	凹凸	自然	土師器58	
15	A1i	N-42°-E	長 方 形	1.90 × 1.25	39	外傾	平坦	自然	土師器10	芋穴
16	B2c	不 明	不 明	不 明	—	不明	不明	不明	常滑焼口瓮 (磁器器)	第 1 号墓塚に変更
18	B2a	N-27°-W	不 整 長 方 形	2.63 × 1.80	42	外傾	平坦	自然	土師器37須恵器 1 弥生土器 1	
21	B2g	N-55°-W	楕 円 形	2.25 × 1.55	43	外傾	平坦	自然	土師器 2 (破)	
23	A2h	N-55°-W	長 方 形	2.28 × (0.95)	26	外傾	平坦	自然	土師器26	
24	A2i	N-40°-W	長 方 形	1.6 × (0.90)	30	外傾	平坦	自然	土師器49	
25	A2i	N-60°-W	長 方 形	(21.0) × (0.90)	30	外傾	平坦	自然	土師器41須恵器 4 (要)	芋穴
26	A2j	N-84°-E	円 形	0.85 × 0.72	20	外傾	凹凸	自然	土師器50須恵器 1 (坏) 弥生土器 3	
27	A2g1	N-138° E	楕 円 形	(0.76) × 1.17	30	外傾	斜斜	自然		
28	A2g	N-61°-W	楕 円 形	(0.45) × (0.70)	16	外傾	凹凸	自然		
29	A2i	N-50°-E	長 方 形	0.94 × 0.63	45	垂直	凹凸	自然		
30	B2a	N-36°-E	長 方 形	3.10 × 2.03	32	外傾	平坦	自然	土師器 2	
32	B2a	N-90°-E	楕 円 形	1.62 × 1.15	50	外傾	平坦	自然	土師器 2 弥生土器 1	本 跡 → B17 → SK30 → S18 古墳時代
33	B2a	N-61°-W	長 方 形	1.07 × 0.83	20	外傾	平坦	自然		芋穴
34	B2c	不 明	—	1.95 × —	50	外傾	平坦	自然		
36	B2c	N-43°-E	楕 円 形	(0.72) × 1.20	84	外傾	平坦	自然		
37	A2i	N-90°-W	円 形	0.98 × 0.92	23	外傾	平坦	自然	土師器36貫状土師 1	
38	A1i	N-36°-E	不 整 長 楕 円 形	1.70 × 0.60	30	外傾	平坦	自然		芋穴
39	B2d	N-36°-W	楕 円 形	1.38 × 1.13	16	外傾	凹凸	自然		

3 墓 塚

当調査区内から墓塚 2 基を確認した。第 1 号墓塚は、当初第 1 号不明遺構として調査したが、出土遺物などから墓塚であることが判明したものである。また、第 2 号墓塚については規模や形状は不明であるが、人骨が出土していることから、墓塚として取り上げた。

第 1 号墓塚 (第 54 号)

位置 B2c 区。

重複関係 第 25、26 号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が新しい。

規模と平面形 本跡の規模は、確認できた北側部分は全体の 4 分の 1 であり、土層断面から長径 [2.80]m、短径 [1.53]m、深さ 47cm の楕円形と推定される。

長径方向 N-61°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

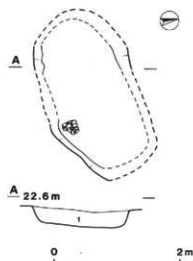
覆土 人為堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量

遺物 覆土中から人骨片と歯、底面から熱を受けた礫が固まって出土している。その他に土器片が4点出土している。

所見 本跡の時期と性格は、住居跡等との重複関係や出土遺物から平安時代以降の墓塚と思われる。



第54図 第1号墓塚実測図

第2号墓塚

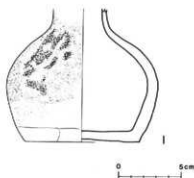
位置 B2c区。

重複関係 第24号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が新しい。

規模と平面形 掘り込みが浅いため、本跡の規模と形状は確認できなかった。

遺物 第24号住居跡の確認面で、1の常滑の磨口壺（第55図）が正位の状態で出土し、その壺内から火葬された人骨が出土している。

所見 掘り込みが浅いため、本跡の規模、形状及び覆土は確認できなかった。時期と性格は、出土遺物から13世紀後半の火葬墓と思われる。



第55図 第2号墓塚出土遺物実測図

第2号墓塚出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	磨口壺 陶器	B (10.5) C 9.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内傾して立ち上がり、頸部は直立する。	底部・体部横ナデ。	長石 明赤褐色 良好	P235 8% SK-39 覆土中 常滑 13世紀

4 不明遺構

当調査区内では不明遺構2基を確認したが、調査の結果、第1号不明遺構は出土遺物などから墓塚であることが判明したため、第1号墓塚として取り扱った。

第2号不明遺構（第56図）

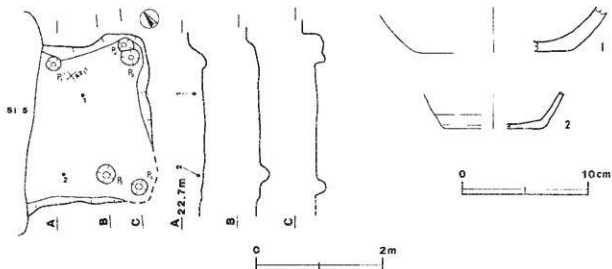
位置 A2j区。

重複関係 耕作による擾乱を受けており、第5号住居跡との新旧関係は捉えられなかった。

規模と平面形 長径2.48m、短径(1.86)m、深さ12cmの長方形である。

長径方向 N-43°-E

壁面 外傾して立ち上がる。



第56図 第2号不明遺構・出土遺物実測図

底面 平坦である。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₅は径23~30cmの円形、深さ8~15cmで、いずれも性格は不明である。

覆土 覆土は攪乱を受けてほとんど残存していない。

遺物 出土遺物は、土師器片4点、須恵器片2点である。中央部付近から第56図1の土師器甕、中央部南西付近から2の須恵器の坏がそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物が少ないため、不明である。

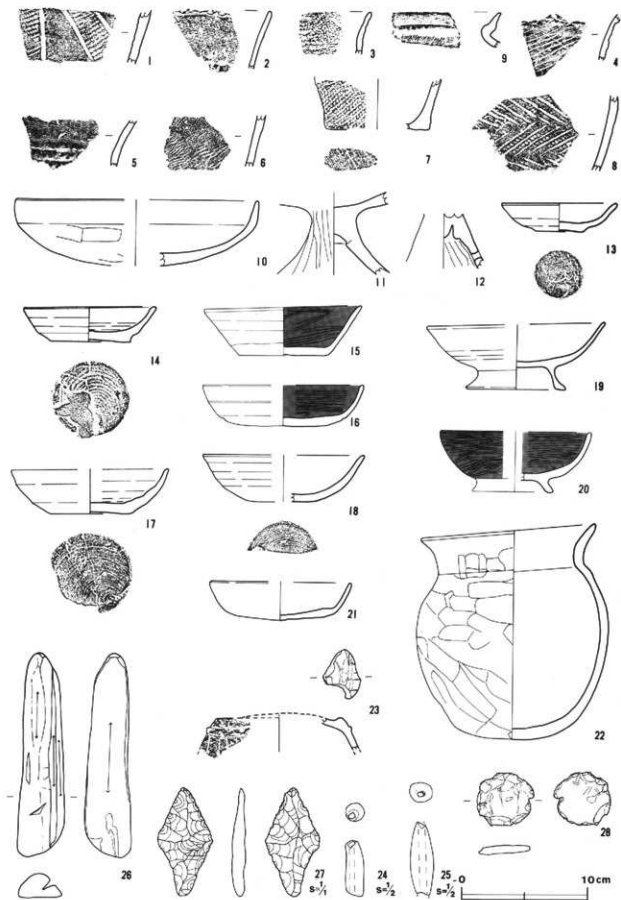
第2号不明遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	目録係(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	土師器 甕	B (3.6) C [12.2]	底部片、平底。	底部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア 浅黄褐色 普通	P219 5% SX-2 覆土中
2	須恵器 坏	B (2.8) C [7.8]	底部から体部下位片、平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部横ナデ。底部糸切り。ロクロナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P220 5% SX-2 覆土中

5 遺構外出土遺物

当遺跡には、古墳時代、奈良時代及び平安時代の遺構の覆土中に縄文土器片や弥生土器片等が混入しているもの、トレンチ調査や遺構確認調査中に出土した遺物がある。本稿では、その中から特色のあるものを抽出して報告する。

第57図1は縄文時代中期加曾利EⅢ式の深鉢片で、磨消縄文が施されている。2~8は弥生時代後期の広口壺片である。2, 3は口縁部片で、2は櫛描波状紋が施されている。3は単節縄文LRを多方向から回転施文させている。4, 5は胴部片で、4は附加条1種(附加2条)が施されている。5は櫛描波状紋が施され、その直下にはつぶれた3本の隆起線が巡り、初痕が残る。6は胴部片で、附加条1種(附加2条)が施されている。7は底部片で、附加条1種(附加2条)が施され、底部には布目痕が残る。8は胴部片で、附加条2種(附加1条)による羽状構成を取っている。2, 4, 5及び8は弥生時代後期の十干台式土器である。9は古墳時代前期五頸の土師器台付壺口縁部片で、口縁部断面がS字状を呈し、体部外面には刷毛目が施されている。



第57图 遺構外出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図10	坏土師器	A [19.0] B (3.2) C	体部から口縁部片。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい黄褐色 普通	P228 35% 表採
11	高土師器	B (6.6) E (3.1)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	脚部内面ナデ。外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 黄褐色 普通	P231 15% 表採
12	高土師器	B (4.3)	脚部上位片。脚部は「ハ」の字状に開く。中位に穿孔。	脚部内面ナデ。外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 黄褐色 普通	P232 10% 表採
13	土師器	A 9.2 B 3.3 C 3.8	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P223 100% 表採
14	土師器	A 10.4 B 2.9 C 6.3	底部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて内側して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P224 85% 表採
15	土師器	A 12.3 B 4.0 C 7.0	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部外面横ナデ。内面へラ磨き。内面黒色処理。体部下位及び底部回転糸削り調整。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい赤褐色 普通	P225 80% B24区表採 2次焼成
16	土師器	A [12.6] B 3.2 C 6.8	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて内側して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。内面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい黄褐色 普通	P226 65% 表採
17	土師器	A [12.4] B 4.0 C 5.5	底面から口縁部片。平底。体部から口縁部にかけて内側して立ち上がる。	口縁部・体部外面横ナデ。底部回転糸切り。ワクロナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい黄褐色 普通	P227 60% B24区表採 2次焼成
18	土師器	A [12.8] B 3.7 C [5.6]	体部から口縁部片。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・スコリア 黄褐色 普通	P229 20% 表採
19	高台付坏土師器	A [14.2] B 5.3 D 7.8 E 1.7	体部から口縁部一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、体部から口縁部にかけて内側して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。高台貼付。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄褐色 普通	P197 60% B24区表採 2次焼成
20	高台付坏土師器	A [12.0] B 4.8 D 6.3 E 1.1	高台部。体部及び口縁部一部欠損。高台部は短く「ハ」の字状に開き、体部から口縁部にかけて内側して立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面へラ磨き。内・外面黒色処理。高台貼付。	砂粒・長石・雲母 黒色 普通	P198 60% 覆土中
21	土師器	A [11.0] B 3.0 C 8.0	体部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部にかけて外側して立ち上がる。	口縁部・体部横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P230 30% 表採
22	土師器	A 13.8 B 17.2	体部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ナデ。頸部外面へラ削り。体部内面ナデ。外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P234 95% 表採
23	白面魂和意器	A [9.8] B 2.5	脚部上位片。脚部には筋みが施され喉部との境には1条の隆帯と同輪が巡る。	脚部横ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P233 5% 表採

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第57図24	管状土師	3.9	1.1	—	1.2	3.4	覆土中	DP12 80%
25	管状土師	2.9	1.0	—	1.0	2.4	覆土中	Dp13 40%

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第57図26	砥石	15.1	3.6	1.9	—	139.8	凝灰岩	トレンチ	Q16 100%
27	砥石	2.9	1.4	0.4	—	1.1	赤珪瑛	表採	Q14 100%
28	不明石製品	4.2	4.5	0.7	—	18.1	粘板岩	表採	Q15 100%

第3節 まとめ

下村田遺跡は茨城県那珂郡大宮町下村田338-2ほかに所在し、東流して久慈川に注ぐ玉川左岸の標高21～22mの台地上に位置している。

周辺には、周知の遺跡である西坪井遺跡、坪井遺跡、富士山古墳群、富士山遺跡等があり、下村田遺跡を含め縄文時代から奈良・平安時代の長期にわたり人々の生活の場となっていた。また、この地域は「雪村ゆかりの地」とも言われ、雪村筆洗いの池があり、当遺跡は五林堂地区とも言われている。

当遺跡の現況は畑地であり、耕作によるトレンチャーが縦横に走り遺構の保存状況はあまり良くない。遺跡から確認された遺構は、竪穴住居跡25軒、土坑33基、墓壇2基及び塚1基（五輪塔）である。

この下村田遺跡は、断続的ではあるが5世紀後葉から10世紀後葉まで集落として、13世紀以降には一部墓域として利用されたものと思われる。ここでは下村田遺跡の集落の変遷と墓域についてまとめることにする。

1 下村田遺跡の時期区分

下村田遺跡の集落の変遷は、出土遺物から下村田Ⅰ期～Ⅴ期に分けることができた。

竪穴住居跡25軒

下村田Ⅰ期	5世紀中葉	2軒	第23号住居跡、第26号住居跡
下村田Ⅱ期	5世紀末葉～6世紀初葉	2軒	第7号住居跡、第9号住居跡
下村田Ⅲ期	6世紀前葉	1軒	第21号住居跡
下村田Ⅳ期	6世紀後葉	1軒	第10号住居跡
下村田Ⅴ期	7世紀後葉	1軒	第24号住居跡
下村田Ⅵ期	8世紀後葉～9世紀前半	4軒	第3号住居跡、第5号住居跡、第8号住居跡、第19号住居跡
下村田ⅦA期	9世紀後葉～10世紀前葉	6軒	第2号住居跡、第4号住居跡、第18号住居跡、第20号住居跡、第22号住居跡、第25号住居跡
下村田ⅦB期		4軒	第11号住居跡、第12号住居跡、第13号住居跡、第14号住居跡
下村田Ⅷ期	10世紀中葉～10世紀後葉	3軒	第15号住居跡、第17号住居跡、第27号住居跡
不明		1軒	第1号住居跡

{1} 古墳時代（下村田Ⅰ期～Ⅴ期）

古墳時代の竪穴住居跡は7軒確認されている。この時代の集落は玉川縁辺部に分布しており、集落の中心部は玉川の流れによって削りとられたものと思われる。

下村田Ⅰ期

調査区の南東部に竪穴住居跡が2軒確認されている。竪穴住居跡は調査区域外に延びていたり、他の住居跡に掘り込まれているため住居跡の全貌をつかむことができなかった。第26号住居跡は一辺が7.70mの方形と推定され、当時の規模としては中規模のものと思われる。

遺物は第26号住居跡出土の土器群を中心に構成される。器種は土師器の坏、高坏及び埴甲等であるが、遺構数も少なく、他の住居跡に掘り込まれていることから出土遺物も少なく、確かな器種構成は捉えられなかった。

高坏 脚部は外傾して直線的に開き、坏部には稜を持つもの（S126-3）と持たないもの（S126-4）がある。

調整法は坏部、脚部にナデが施されている。

増 平底，体部が算盤玉状を呈し，口縁部は直線的に開く。調整法は体部下位にヘラ削りが施されている。

下村田Ⅱ期

調査区の中央部で竪穴住居跡が2軒確認されている。この時期の住居跡は，他の住居跡に掘り込まれているが，第7号住居跡は方形で，北西コーナーに貯蔵穴を持っている。第7，9号両住居跡の主軸はいずれも北西方向をさすものと考えられる。遺物は両住居跡出土の上器群を中心に構成される。器種は土師器の坏，埴，高坏，壺，甕及び甗等である。

坏 丸底のものと平底のものが出土しており，特に平底のものは体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる。

埴 内彎して立ち上がり，口縁部は直立し，内面に稜を持つ。

高坏 脚部が短くラップ状に開き，坏部は体部との境に稜を持つ。

壺 平底で，体部は球状を呈し，口縁部は緩やかに外反する。調整法は口縁部にヘラ磨きが施されている。

下村田Ⅲ期

調査区の南東部で竪穴住居跡が1軒確認されている。主軸方向はN-45°-Eである。竈は北東壁に，貯蔵穴はその東側に位置している。遺物は第21号住居跡出土の土器群によって構成される。器種は土師器の坏，台付坏，高坏，壺，小形甕及び甗等である。

坏 丸底が主で，須恵器坏蓋模倣の坏(SI21-2，3)が現れる。調整法はほとんどが外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨きが施されている。赤彩をされた坏もみられる。

台付坏 突出した底部に坏をのせた特殊なタイプ(SI21-10)である。

高坏 坏部と口縁部との境に弱い稜を持ち，外反する。

壺 平底で，体部に丸みを持ち小型である。調整法は体部外面にヘラ削り後ナデが施されている。

小形甕 平底で，体部は球状を呈し，口縁部は直立気味に立ち上がる。

甗 Ⅱ期と形態は似ているが，口縁部がわずかに外反する。輪痕痕が残る。

下村田Ⅳ期

調査区中央部で竪穴住居跡が1軒確認されている。住居跡の南西側の部分は，玉川の流れによって削り取られており，さらに，下村田Ⅴ期の住居跡によって北側が掘り込まれているため，竈は確認できなかった。主軸方向は北東と方向を指すものと考えられる。遺物は第10号住居跡出土の土器群を中心に構成される。器種は土師器の坏，埴，小形甕及び甗等である。

坏 体部は浅い皿状を呈し，体部と底部との境に稜を持ち，口縁部は短く立ち上がる須恵器の坏身模倣の坏(SI10-2)が出土している。調整法は内面に横位のヘラ磨き施されている。他にⅡ期から流れを持つ須恵器坏蓋模倣坏類(SI10-1，2)が出土している。

埴 小型で，体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。調整法は体部外面にヘラ削り後ナデが施されている。

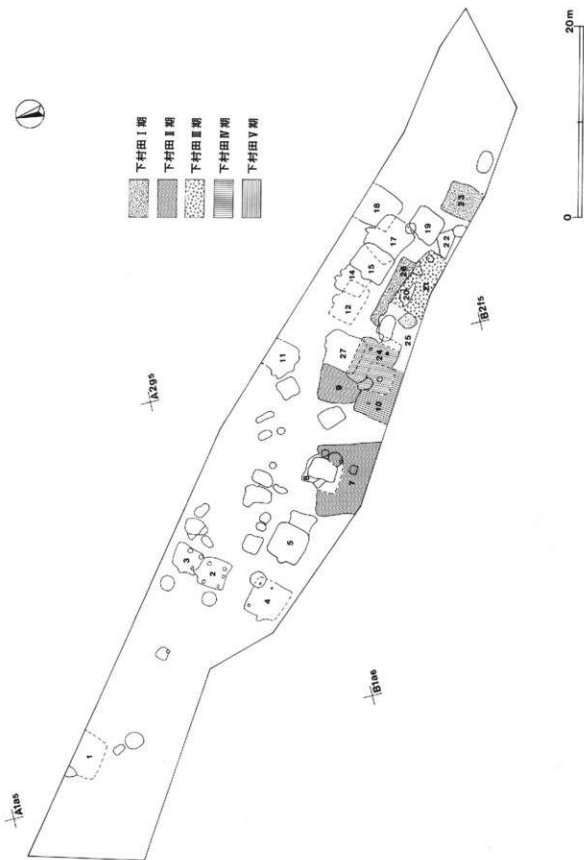
小形甕 口縁部が「く」の字状を呈するもの，短く外反するもの及び大きく外反するものの3種類がある。

壺 体部は球状を呈し，口縁部がわずかにつまみ上げられている。ヘラ削り後ナデ調整が施されている。

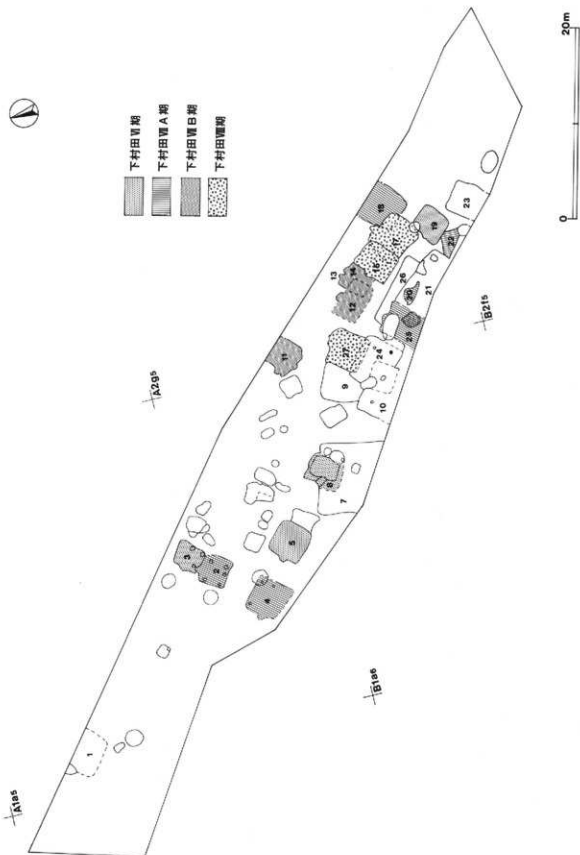
下村田Ⅴ期

調査区中央部で竪穴住居跡が1軒確認されている。北西壁に竈を有し，支柱穴も見つかっている。主軸方向はN-53°-Wと考えられる。遺物は第24号住居跡出土の土器群を中心に構成される。器種は土師器の坏，甕及び須恵器の坏等である。

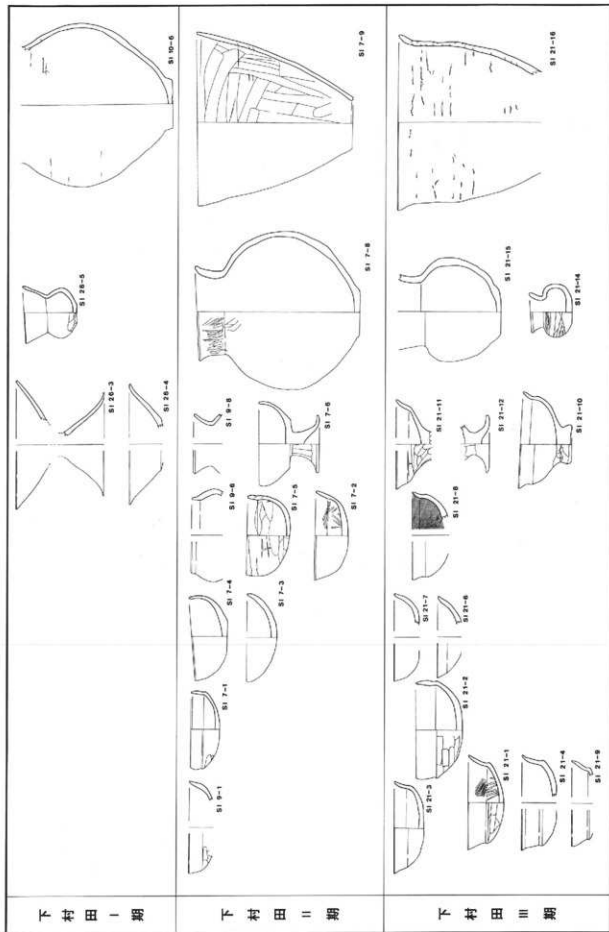
坏 Ⅱ期から流れを持つ須恵器坏蓋模倣坏類(SI24-1)があり，底部が平底気味の丸底を呈することが特徴

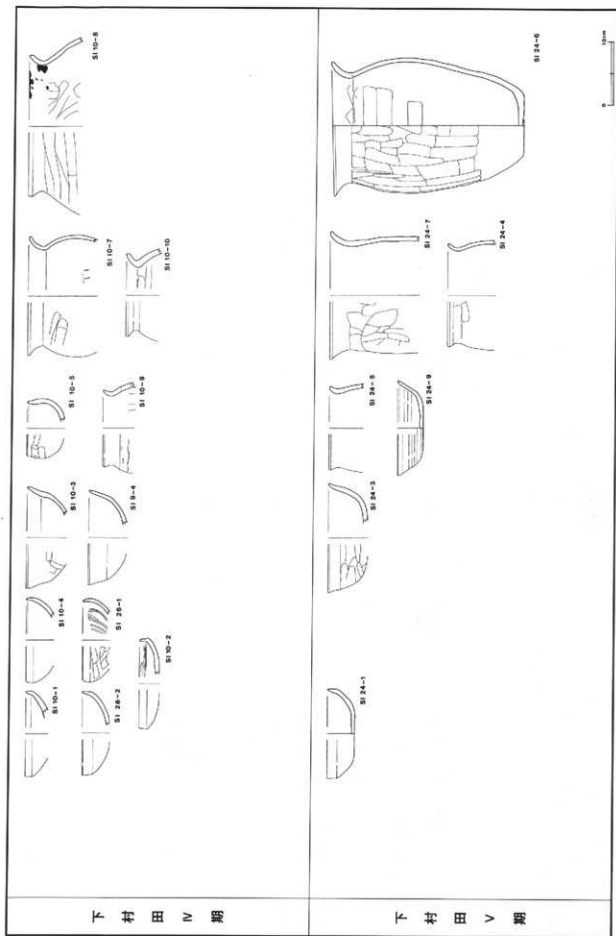


第58図 下村田 I ~ V 期住居跡分布図

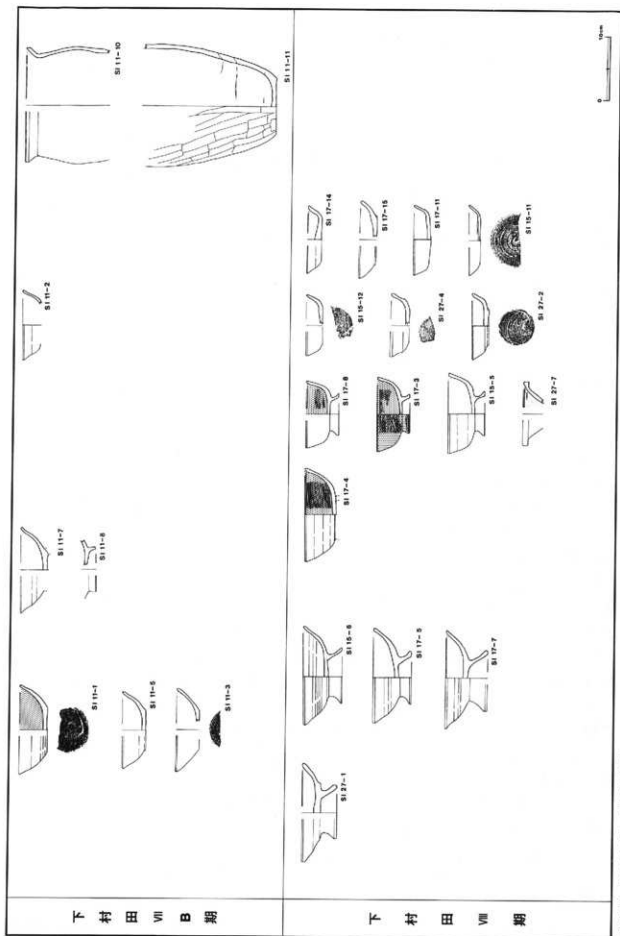


第59図 下村田Ⅵ～Ⅷ期住居跡分布図





第60図 下村田 I~V 期土器群



第61图 下村田VI~VIII期土器群

的である。

甕 長胴の甕で、最大径を口縁部に持つ。調整法は体部に縦位のヘラ削り後ナアが施されている。

須恵器 坏 丸身を持った平底で、口縁部はわずかに外反する。調整法は体部外面下位から底部にかけて回転ヘラ削りが施される。(SI24-9)

(2) 奈良・平安時代(下村田Ⅵ期～Ⅷ期)

8世紀後葉から10世紀後葉の奈良・平安時代の住居跡は17軒確認されている。集落は調査区中央部から北西側にかけて5軒、南東側に12軒の住居跡があり、特に調査区南東側に集中してみつがっている。甕は他の住居跡との重複や耕作によるトレンチャーによって遺存状況が悪く、あまりかたらをとどめていないものが多い。甕の位置は北西側に持つものと、北東側に持つものに分かれる。甕の袖部に袖塗材として凝灰岩を使用しているものがある。

奈良・平安時代の住居跡からは、土師器の坏、高台付坏、高台付埴、皿、小皿、須恵器の坏、高台付坏、短頸壺、甕、灰釉陶器の長頸瓶、皿等が出土している。須恵器の出土量は数が少なく、土師器が大半を占める。土師器は内面を黒色処理した坏や高台付坏が大部分で、わずかではあるが内・外面黒色処理した高台付坏もみられる。また、墨書土器が3点ほど出土しており、「加」、「新家」及び「□神家」と墨書されている。灰釉陶器は9世紀前半の井ヶ谷78号窯式の長頸瓶と、9世紀後半の黒径90号窯式の皿が出土している。

下村田Ⅵ期

調査区北西部から南東部にかけて竪穴住居跡が計4軒確認されており、散在して分布している。これらの住居跡をさらに出土遺物から第3、19号住居跡を8世紀後葉、第5、8号住居跡を9世紀前葉に比定することができるが、ここでは同時期として捉えた。甕は北西壁に持ち、主軸方向はN-43°-60°-Wである。規模もほぼ同じで、辺3.00-4.00mである。遺物は第3、8及び19号住居跡出土の上器群を中心に構成される。器種は、土師器の坏、高台付坏、鉢、甕、須恵器の高台付坏及び埴等であるが、出土遺物が少ないために器種構成は不十分である。須恵器の量はこの時期に多くみられる。

高台付坏 形態は、須恵器高台付坏(SI19-3)を模倣した坏である。調整法は内面ヘラ磨き、内面黒色処理が施されている。(SI3-1)

鉢 内面にヘラ磨き後黒色処理が施されている。(SI5-8)

甕 口縁部は外反し、端部は短くつまみ上げられている。調整法は体部外面にヘラ磨きが施され、底部に木葉痕を残す。

須恵器の高台付坏 高台が付けられた平らな底部から、体部が直線的に立ち上がる。調整法は体部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ切りである。法量は口径13.7cm、高台径8.5cmである。(SI19-3)

須恵器の鉢 底部の外周がやや持ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。小形の甕で、法量は口径約14.4cmである。(SI8-4)

下村田ⅦA期

下村田Ⅶ期はAとB期に細分した。B期はA期に比べて黒色処理を施された遺物の量が少なく、小皿に近い器種等が出土していることから、時期的にわずかに新しい器種機軸を持つ。

調査区中央部から東部にかけて竪穴住居跡が6軒確認されている。この下村田遺跡の集落はⅦA期からⅦB期にかけての時期のものが多い。主軸方向はN-55°-WとN-29°-55°-Eの範囲である。甕は北西壁に持つものが1軒、北東壁に持つものが3軒、不明2軒があり、北東壁に持つ割合が高い。遺物は第4、25号住居跡出土の上器群を中心に構成される。器種は土師器の坏、高台付坏、皿、長頸瓶、小形甕、甕、瓶、灰釉陶器

の皿、長頸瓶等であり、出土遺物は全体的に土師器が大半を占める。

坏 体部から口縁部にかけて内甕して立ち上がり、器高の違いにより3種類に分けられる。また、内面へラ磨き後内面黒色処理が施されているものと施されていないもの、底部糸切りのものとヘラ切りのもの等調整法の違いもみられる。

高台付坏 口縁部が僅かに外反して立ち上がる大型(SI4-3)、小型(SI4-4)の高台付坏と、体部から口縁部が内甕して立ち上がるものがある。調整法は内面へラ磨き後黒色処理がほとんどのものに施されている。

皿 底部と口縁から3種類に分類できる。底部は回転ヘラ削りによる削り出し(SI25-14)と高台貼付(SI4-5, 6)のものに分かれる。

小型甕 口縁端部が短く外上方向へつまみ上げられている従来の上総型甕(SI4-7, SI25-17)と短く外反する新しい形態の甕(SI25-18)が現れ、大きく2つに分けることができる。

甕 口縁端部が短く外上方向へつまみ上げられている従来の上総型甕(SI2-6, SI4-9)と短く外反する新しい形態の甕(SI25-16)が現れ、大きく2つに分けることができる。

長頸瓶 灰釉陶器の長頸瓶を模倣した土師器の長頸瓶(SI25-15)が出上している。

灰釉陶器 井ヶ谷78号窯式の長頸瓶(SI4-20)と黒笹90号窯式の皿(SI25-14)が出上している。

下村田VII B期

中央部北寄りから南東部にかけて竪穴住居跡が4軒確認されている。主軸方向は、N-45°-WとN-44°-55°-Eの範囲である。竈は、北西壁に持っているもの1軒、北東壁に持っているもの3軒である。遺物は第11号住居跡出土の土器群を中心に構成される。出土遺物が少ないので、十分な器種構成は捉えられなかったが、器種には土師器の坏、高台付坏、小皿及び甕等がある。

坏 体部から口縁部にかけて内甕しながら立ち上がる。調整法は底部糸切り未調整のもの(SI11-1, 3)が大半を占め、内面へラ磨き後黒色処理を施したものと施さないものとみられる。

高台付坏 高台は底部と体部との境に貼付られ、「ハ」の字状に囲くものと思われる。体部は内甕して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切りである。(SI11-7)

小皿 口縁部はわずかに外反する。当遺跡においてこの時期に初めて小皿が現れる。(SI11-2)

甕 平底で、口縁端部のつまみ上げが前期に比べ退化の傾向にある常総型甕(SI11-10)である。調整法は体部外面に縦位のヘラ削りが施されている。(SI11-11)

下村田VII期

調査区東部にかけて竪穴住居跡が3軒確認されている。重複関係がある住居跡もある。第17号住居跡を第15号住居跡が掘り込んでいることから第15号住居跡が新しくなる。出土遺物は両住居跡共にあまり変化がないので、第15, 17号住居跡を同時期に設定した。主軸方向はN-41°-WとN-30°-56°-Eの住居跡があり、竈を北西壁に持つもの1軒、北東壁に持つもの2軒である。遺物は第15, 17及び27号住居跡出土の土器群によって構成される。器種は土師器の坏、高台付坏、高台坏境、小皿、甕及び灰釉陶器の長頸瓶等であり、出土遺物は土師器が大半を占める。

高台付坏 足高高台を持つもの(SI15-6, SI17-4, 5, 7, SI27-1)と短い高台を持つもの(SI15-5, SI17-3, 4, 8)の2種類が出土している。足高高台付坏は外面ナデ調整が中心で、従来のヘラ磨き及び黒色処理は施されていない。短い高台を持つ高台付坏は従来の内面へラ磨き後黒色処理が施されている。そのほか内・外面へラ磨き後黒色処理が施されたものもみられる(SI17-3)。

小皿 底部が回転ヘラ削り(SI15-11, SI17-11, 14, 15)と糸切り(SI15-12, SI27-2, 4)の2種類の小皿

が出上している。回転糸切りのものは口径が10cm前後、回転ヘラ切りのものは口径10～12cmで、回転糸切りのものが小型である。

灰輪陶器長頸瓶 口縁部片が出上している。口縁部内面に施蒨。(SI27-7)

2 中世（鎌倉時代以降）

墓塚は、いずれも近接して2基見つかっている。そのうちの1基は掘込みは確認されなかったが、蔵骨器が正位の状態で見つかっている。この蔵骨器は13世紀の常滑焼きの壽山壺で、口縁部から頸部にかけて打欠き蔵骨器として使用している。骨は火葬された人骨で、頭部骨、頸椎及び指骨が壺内に納められていた。もう1基の墓塚は長楕円形を呈し、塚底の中央部に焼き石を敷き詰め、その上部からは骨片、歯、灰及び焼土が見つかっている。また、これらの墓塚は五輪塔から北西へ約4m離れたところに位置しており、五輪塔と何らかの関係が窺える。

塚は五輪塔があったところで、調査区中央の玉川縁辺部にあたる。この五輪塔は、平成4年に「雪村顕彰事業」に伴う五林堂地区調査で発掘調査が行われ、その際に調査前まであった中世の五輪塔に加えて、新たに近世の五輪塔と思われるものが1基見つかっている。また、五輪塔の石積みの中より仏花器が見つかっている。

3 下村田遺跡における時期区分の問題点

下村田遺跡はⅠ期～Ⅳ期まで時期区分したが、出土遺物の一括資料が少ないため十分な器種構成が捉えられていないこと、猿投産の井ヶ谷78号窯式の長頸瓶が9世紀後葉の土師器と共存して出土していること等の問題点がある。これらの問題点については再度遺物の出土状況などを詳細に分析し、さらに他の遺跡等の出土資料を元に今後検討を加えていくことにする。

参考文献

- ・茨城県教育財団 「一般国道349号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 北郷C遺跡森戸遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第55集』1990年
- ・東国土器研究会 「特集 黒色土器—展開と終焉」東国土器研究会第3号 1990年
- ・浅井哲也 「那珂台地及びその周辺における奈良・平安時代の土器について」『年報』茨城県教育財団 1991年
- ・佐々木義樹 「歴史時代の遺構と遺物」『武田Ⅳ—1990年度武田遺跡群発掘調査の成果—』御膳州市文化スポーツ振興公社 1991年
- ・櫻村宣行・浅井哲也 「常陸地域の鬼高式土器—久慈川・那珂川流域を中心として—」『考古学ジャーナル』342 ニューサイエンス社 1992年
- ・浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器Ⅰ」『研究ノート』創刊号 茨城県教育財団 1992年
- ・浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器Ⅱ」『研究ノート』2号 茨城県教育財団1993年
- ・櫻村宣行 「茨城県南部の鬼高式土器について」『研究ノート』2号 茨城県教育財団 1993年
- ・東国土器研究会 「東国における律令政治までの土器様相とその歴史的動向」東国土器研究会第4号 1994年
- ・大宮町教育委員会 「雪村顕彰事業 五林堂地区調査」1993年
- ・吹野富美夫 「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」『研究ノート』4号 茨城県教育財団 1994年

写 真 图 版



遺跡全景



遺跡全景 (南東側)

PL 2



試掘風景



遺構確認状況



遺跡全景



第7・8号住居跡



第7・8号住居跡
遺物出土状況



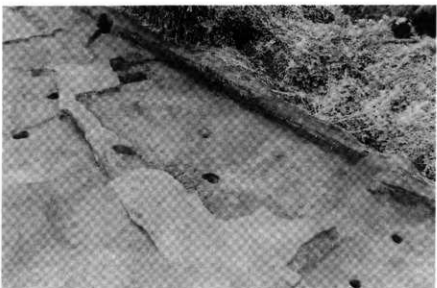
第7号住居跡遺物出土状況



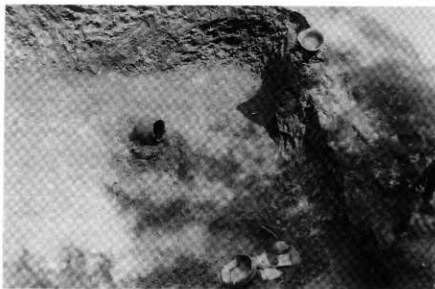
第7号住居跡貯藏穴
遺物出土状況



第10・24号住居跡
遺物出土状況



第21・25・26号住居跡



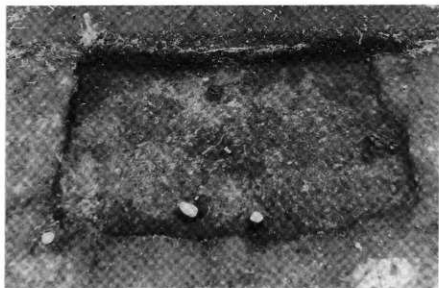
第21号住居跡遺物出土状況



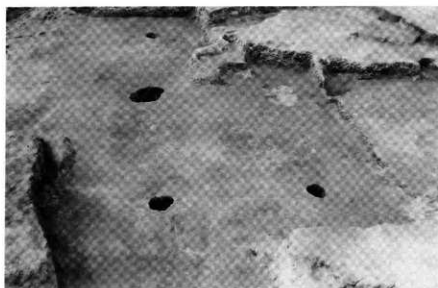
第21号住居跡遺物出土状況



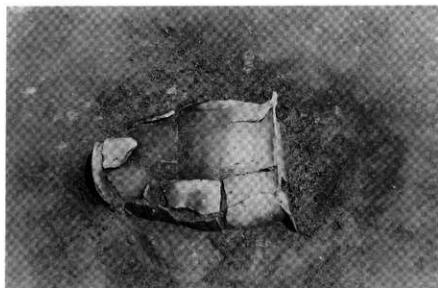
第21号住居跡電



第23号住居跡遺物出土状況



第24号住居跡



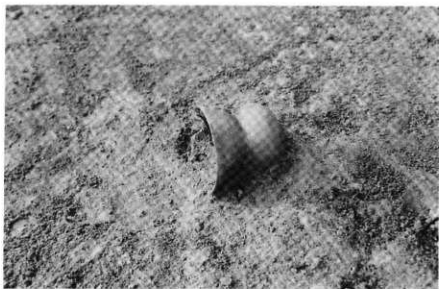
第24号住居跡遺物出土状況



第24号住居跡竈



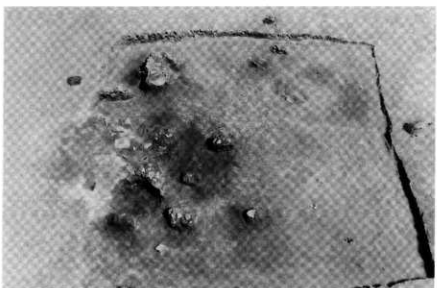
第25号住居跡遺物出土状況



第26号住居跡遺物出土状況



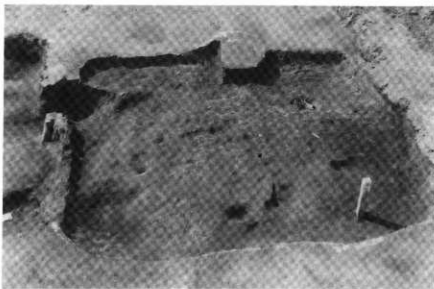
第2号住居跡



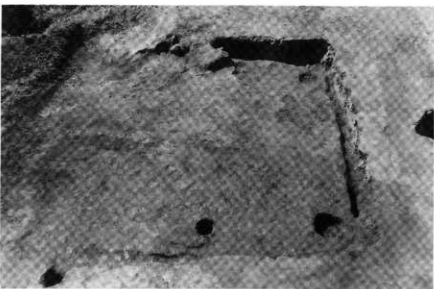
第2号住居跡遺物出土状況



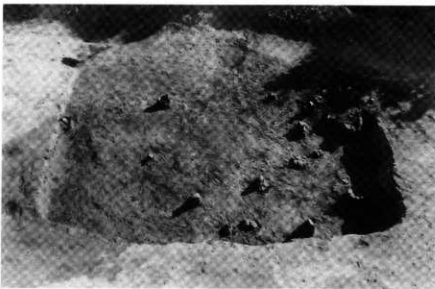
第2号住居跡竈



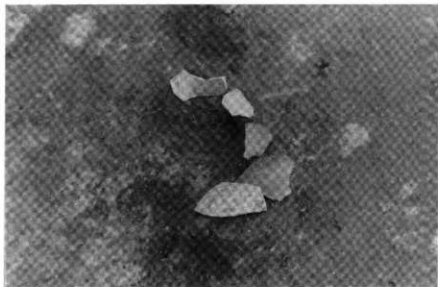
第3号住居跡遺物出土状況



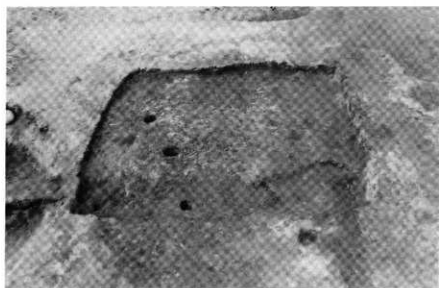
第4号住居跡



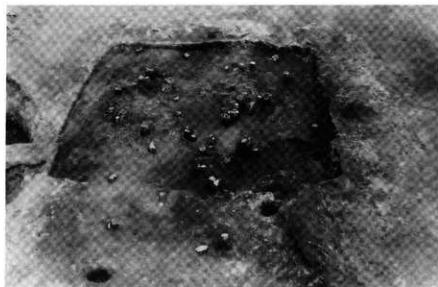
第4号住居跡遺物出土状況



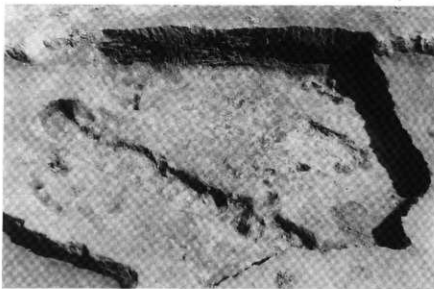
第4号住居跡遺物出土状況
(灰釉陶器)



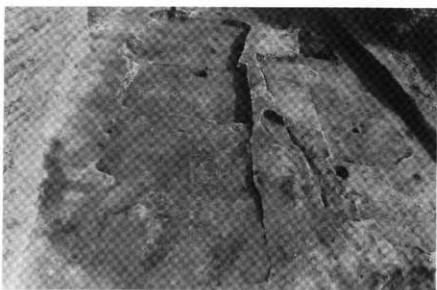
第5号住居跡



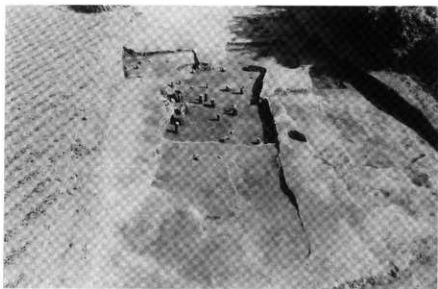
第5号住居跡遺物出土状況



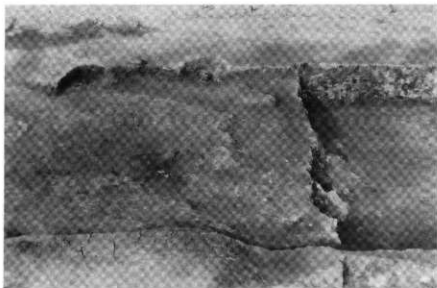
第11号住居跡



第12・13・14・15・17号
住居跡



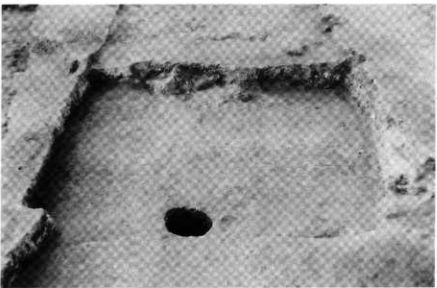
第12・13・14・15・17・
18号住居跡



第13・14号住居跡



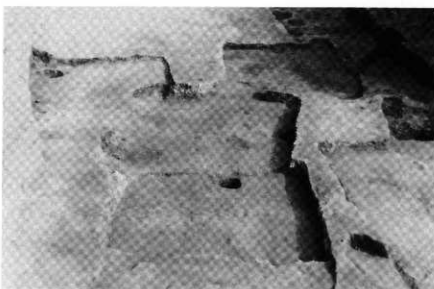
第14号住居跡
遺物出土状況



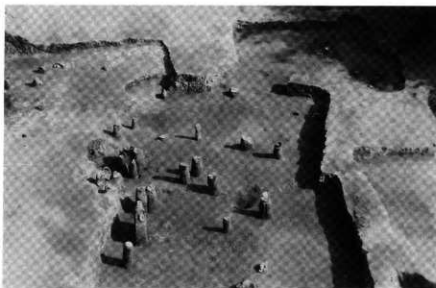
第15号住居跡



第15号住居跡遺物出土状況



第15・17・18・19号住居跡



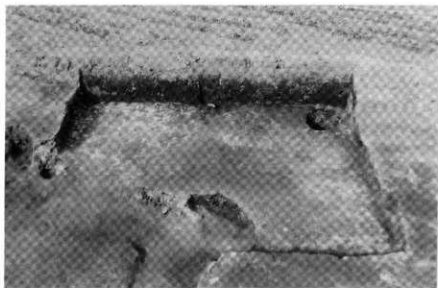
第15・17号住居跡
遺物出土状況



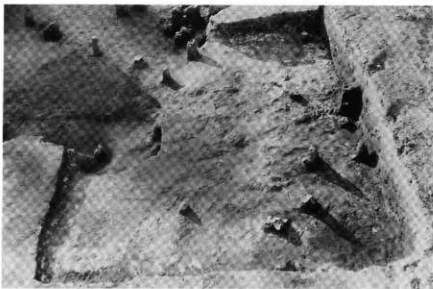
第17号住居跡遺物出土状況



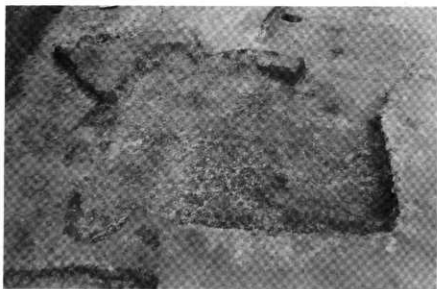
第17号住居跡遺物出土状況



第18号住居跡



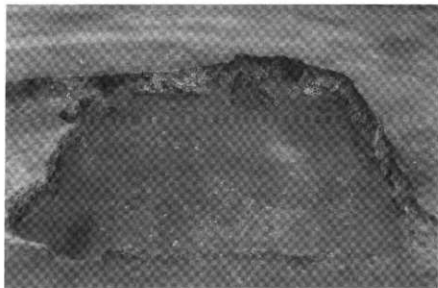
第18号住居跡遺物出土状況



第19号住居跡



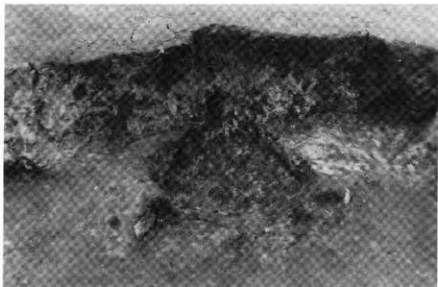
第19号住居跡遺物出土状況



第27号住居跡



第27号住居跡遺物出土状況



第27号住居跡壘



第 2 号土坑



第 9 · 27 · 28 号土坑



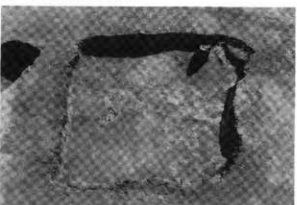
第 4 号土坑



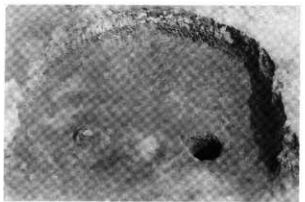
第 9 号土坑遺物出土狀況



第 5 号土坑



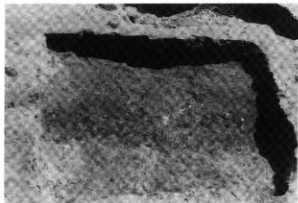
第 10 号土坑



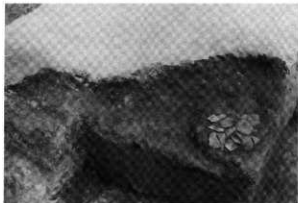
第 6 号土坑



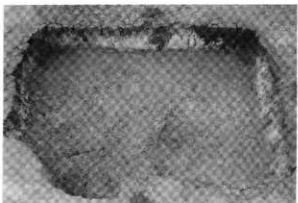
第 11 · 21 号土坑



第14号土坑



第1号墓壙遺物出土狀況



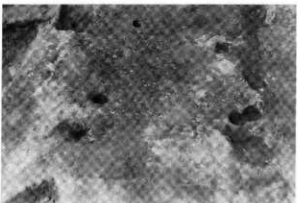
第18号土坑



第2号墓壙底口壺出土狀況



第32号土坑



第2号不明遺構



第37号土坑



五輪塔



6-1



6-2



6-3



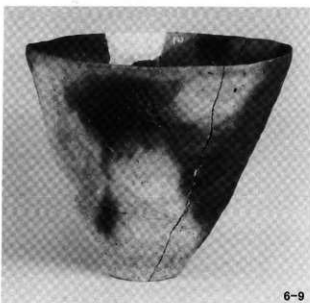
6-4



6-5



6-6



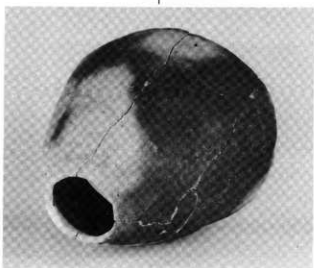
6-9

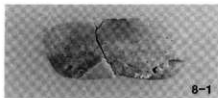


6-7



6-8





8-1



8-8



8-9



8-2



8-5



9-1



9-6



9-7



9-8



9-11



9-10



11-1



11-2



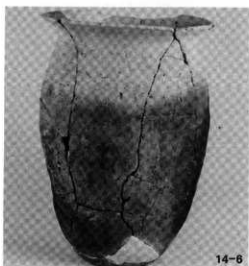
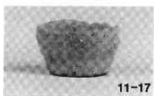
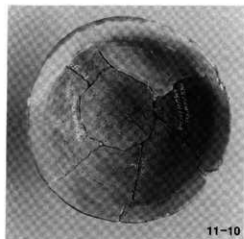
11-3

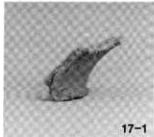
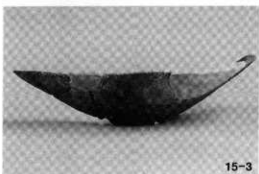
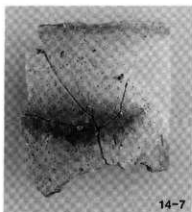


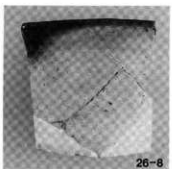
11-5

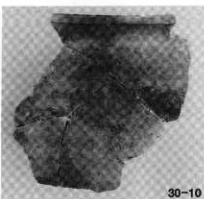


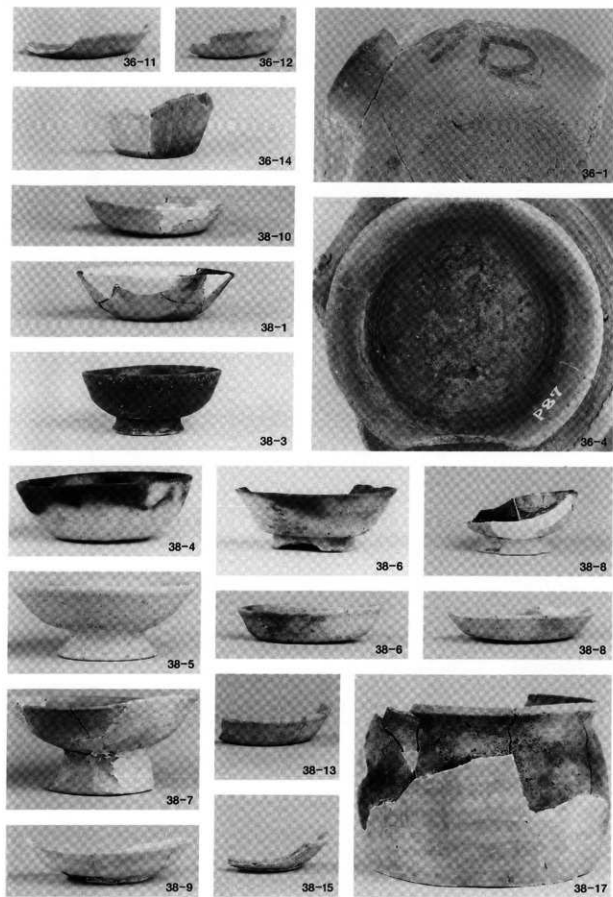
11-4



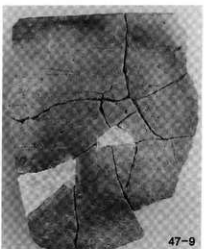


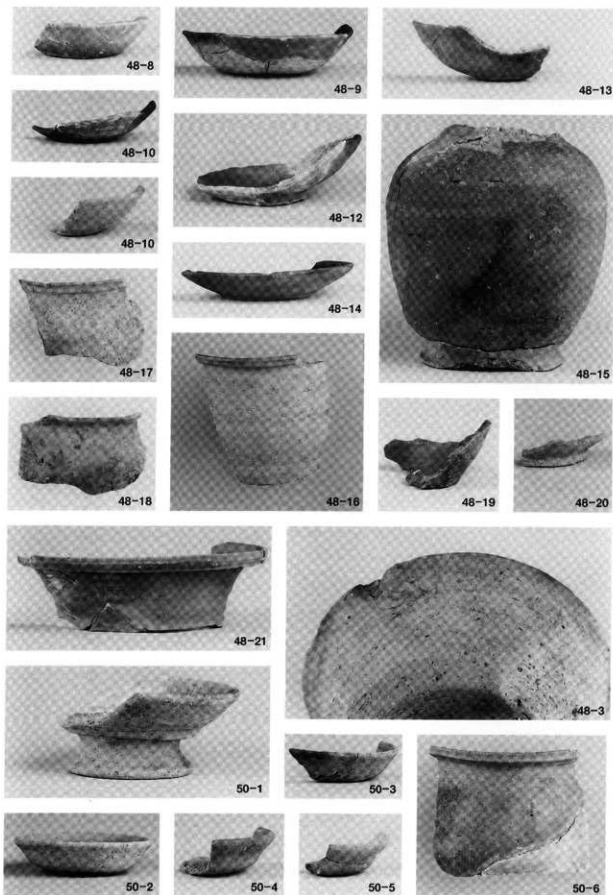




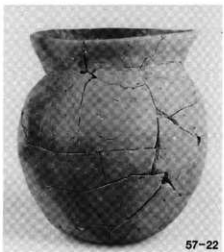


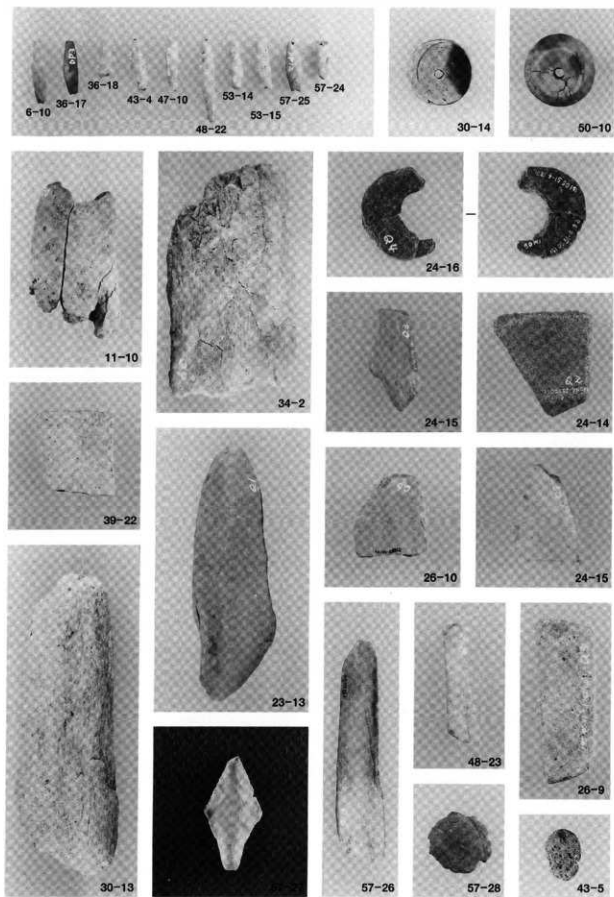
第15・17号住居跡出土遺物



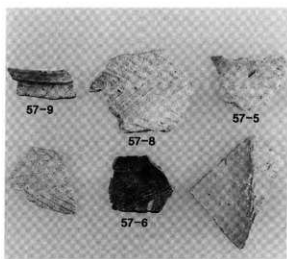
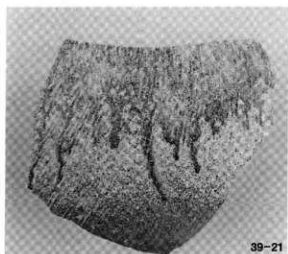
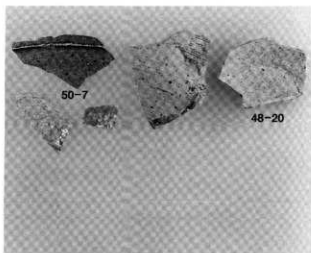
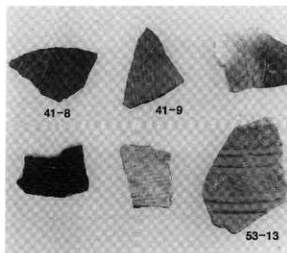


第25・27号住居跡出土遺物





各遺構出土遺物（土製品・石製品・石製模造品）



茨城県教育財団文化財調査報告第110集

一級河川玉川改修工事地内
埋蔵文化財調査報告書

下村田遺跡

平成8(1996)年3月25日印刷

平成8(1996)年3月30日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市見和1丁目356番の2
TEL 029-225-6587

印刷 有限会社 川田プリント
水戸市上水戸4丁目6番53号
TEL 029-253-5519代